
ブラック・シープ

M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック・シープ

【Nコード】

N6588C

【作者名】

M

【あらすじ】

あたしが死んだら、世界も終わる。そう言い残して逝ってしまった妹、朝日のことが心残りの姉、春野。そして、妹を追うようにして自殺してしまった妹の彼氏、礼。生前、変り種の妹を上手く愛してやれなかったことと、礼に恋愛感情を抱いてしまったことが、主人公春野の心に、深い傷を負わせる。日に日に肥大してゆく無気力感と、何にぶついたらいいかわからない悪意に戸惑う春野。ある日、彼女は“ブラック・シープ”という魔法の言葉をきっかけに、死後の世界へ迷い込む・・・心に闇を抱えた少女の幻想ファンタジー。

1・あたしが死んだら（前書き）

去年の新風舎出版大賞に奨励賞として入選した作品です。
発表はされませんでしたので、多くの方に読んでいただきたく投稿
させていただきました。

1・あたしが死んだら

「あたしが死んだら」

「あたしが死んだら、この世もなくなんねえん」

アサヒの声が、あたしの耳元で囁く。あの言葉は嘘だった。だって、世界は今も回り続けているじゃない。いつも、あたしに嘘をつくんだから。

「お姉ちゃん、ねえ」

「なに」

あたしの後ろの列にいた、3つ上と4つ上の従姉妹が囁きあう。

カオルちゃんと、サクラちゃん。もう高校生のくせに、お揃いで深緑色のパアカアとジインズという場をわきまえない格好だ。お母さんの方の親戚の人はみんなそういう“いなか”の人ばかりだ。

アサヒが死んでしまったのに、喪に服すつもりは無いというんだろうか。

薄情モノ。あんた達の誰がアサヒの苦しみを、知っていたというんだ。のこのこと、葬式にだけ参加して、美味しいお寿司だけ食べて、お金はなるべく少なく入れるんだ。

きつと、そうなんだ。そんな薄っぺらい封筒には、ぴんと張った綺麗なお札を平気で入れてきてるんだ。なんて礼儀知らずなの。

今日は、三月十五日。生きていれば、アサヒは昨日の十四日に、十二歳になっていたはず。あたしの怒りは、ふつふつと湧き上がり、思わず振り向いて二人を睨みつける。何十分も正座しっぱなしで、イライラも溜まっていたのかもしれない。

「朝日って、キリストじゃなかったっけ？」

「ああ」

カオルちゃんとサクラちゃんの会話は続く。お姉ちゃんのほうのカオルちゃんは無口で、どんよりした目で見つめている。体ごとカオルちゃんを見ているサクラちゃんと違って、本当にお喋りしているかどうか知らない。

あたしは肩越しに睨みつけていたけど、お父さんのすすり泣きで、体勢を戻した。お父さんはとつても涙もろい人で、そんなに悲しくもないくせに、アサヒの死を悼む。

涙で彼女が救えるものか。

今更、今更になって、アサヒのために涙を流す。

薄情モノ。

「ねえ、お姉ちゃんてバあ。何でなの？」

「うん」

背中越しに聴こえてくる、従姉妹達の無情な会話。そんなこと、今関係ないじゃない。

「桜、桜」

サクラちゃんの隣にいたヨシエおばちゃんが、見かねて止めに入った。よかった。くだらない会話を、これ以上聞かなくてすむ。

あたしは、そう思った。ところが…

「キリシタンは志津江おばちゃんだけなの。アサちゃんは、明弘おじさんと同じで仏教徒なんだよ」

「そおなんだ。桜、キリストのお葬式も見てみたかったのにサ」
なんてことだ。家族揃って、卑しい連中。

あたしは、怒りで全身が震えた。誰も、誰も、アサヒの戦いを知らなかったくせに。みんな、変人で天才のアサヒを疎ましく思っていたくせに。

今は誰も口に出さない。

「みんなあたしを嫌っていくんじゃないか！あたしが有名になったら、自慢するくせにイ！うちの子供は、友達は、親戚の朝日ちゃんはあるって、あたしへの仕打ちを忘れてしまুকせにい！なのに、今は誰も口に出さないんだあ」

アサヒはいつも、男言葉でブチ切れて、最後はお祖父ちゃんに蹴つ飛ばされて、部屋着で外に出されていた。暴力を受ける時のアサヒは無抵抗で、外に出されても家のまわりからは離れなかった。

近所に、頼れる友達もいなくて、部屋着で外にいるのがたまらなく恥ずかしかったんだろう。出される時は裸足だったし。逃げ出すこともできなくて、アサヒはいつもお庭の物置の中にいた。

アサヒは、頭のいい子だった。

「アサちゃん……」

お母さんがこらえ切れなくなつて、嗚咽を漏らす。ブルブルと震えて、お堂の畳を長い爪で引っ掻く。こんな時にも欠かさないアイライナアが、涙で溶けて、まるでクマみたいに瞳の回りを黒く染め上げる。

さんざん反対したお寺でのお葬式に、一番上等の着物をカチツと着こなして、仕事をたくさんやっていた。お母さんは、アサヒを愛していた。そのことに今、初めて気が付く。

「子供を愛さない親なんていないわ」

その言葉の意味は、子供にはまったくわからない。ただ、アサヒが死んで、お母さんが一滴の涙も流さなかったことに、あたしは酷く感心している。

お母さんは、本当の意味での「絶望」をしているんだなあと。

低い 波のお経が、静かに響き、あっちこっちですすり泣く声が聞こえる。たくさん押しかけた木枝玉大学初等部の六年生は、境内で石遊びでもしているんだろう。もちろん、ここに座り込んでいる親戚達よりも、アサヒのことをちゃんと解っていた人は多いはずだ。ただ、まだ十二歳のお坊ちゃんやお嬢様には、葬式は酷くつまらないものに違いない。一時間前の面会で、冷たいアサヒの顔の真上でぬるくなったオレンジジュウスを平気な顔で飲んでいた。小学生なんて、そんなものだ。

わざとらしく涙を浮かべる大人なんかより、よっぽど動物として完成している。

親戚以外の子供で唯一、本堂に上がることを許されたアサヒの彼のレイくんだけが、顔を真っ赤にして惨めに泣いている。

それだけなら、やり場の無い幼恋人達の死別ってかんじで、なんとも切ない場面なのに、レイくんはそれを自らの風体で打破していた。

それは、彼がマスクを身につけているということだ。もちろん、マスクをつけていること自体が異様なのではない。そろそろ花粉も心配な時期だし、マスクぐらいかまわないのだ。そう、普通なら。

でも、彼のはとても尋常ではない。「マスク」が、嫌に目立っている。それは、コンビニとかで普通に売られているマスクとは似ても似つかないし、此処最近流行っている立体マスクなんかともちがった。

さすがに色は白かったが、まるで、ダースベエダアのつけている仮面の下半分みたいな。つまり、まあ薬品化学工場の従業員あたりが使っているのだろう、分厚いフィルタアのマスクなのだ。彼が葬式の初めから、今もつけ続けているのが。

親戚のおじさんやおばさんに、何度も不信人物に間違えられ、いちちお母さんやお父さんに彼は誰かと、尋ねられていた。

アサヒは変人だったが、その彼のレイくんは、変態だったというわけだ。

アサヒとレイくんは、二年間も愛し合っていた。色褪せることも無く、疑うことも知らずに紡げる愛なんて、あたしには信じられなかった。あたしは恋なんてしたことがないし、したいとも思わない。そう言くと、周りの女の子達は決まって「嘘だ」と、決め付ける。まるで、いつでも好きな人がいないといけなみたい。好きな男の子が居るのが当然だというように。砂糖菓子やキャンディでできたような、甘い甘いお話ばかり、きゃっきゃ、きゃっきゃと毎日してる。いいかげん、飽きないんだろうか。

あたしはたぶん、一生恋愛も結婚もしない。取っ付きにくくて、何考えているのかわかんないアサヒにさえ、レイくんみたいにそこそ

こカッコイイ男の子が、彼氏としていてくれたわけなんだから、あたしにだって、相手は出来ると思う。

でも、結婚したくない。人生を縛られたくない。お父さんや、お母さんのようになりたくないし、子供なんて産みたくない。

あたしはかなり早くに（小学校四年生のとき）初潮を迎えた。そのため、小学校を卒業するまでには、性に関してかなりの知識を身に付けざるをえなかった。お母さんから、先生から、漫画から。言われることはいつも「はつきり断る。最悪付けてもらいなさい」だった。エイズ、妊娠、中絶、社会的立場からの離脱、親兄弟友人からの迫害と差別、最愛の恋人の裏切り、心と身体に、多大なダメージ……。

NO SEX NO SEX NO SEX!!!!!!

それで？それでどうやって、興味をもてて言うの。結婚は女の夢？出産は立派？ふざけんじゃねえっての。そんな気持ちの悪いこと、出来ないわ。

お腹の中に、自分以外の生物がいるって、どんなに気色の悪いものなんだろう。想像するだに恐ろしく、震えがとまらない。大げさではなく、本当にそうなのだ。

でも、そうして産んでみたら確かに、愛情は湧くかもしれないと思う。いとおしくていとおしくて、しかたがなくなるのかもしれない。

それまでの過程であるセックスと妊娠には、吐き気を堪えることもできないが、出産と育児に抵抗は感じない。まだ小さかったころのアサヒを思い出すだけで、黄色い悲鳴が出るほど幼児は大好きだ。それに、自分の子供だもの。

全部あたしの想像だけど、あたしはきつと、どんな子供でも愛してしまう。どんな不完全な子供でも。手が無くても、足が無くても、目も耳も利かなくても。頭が悪くても、犯罪者になったって、自分の子供であつたら守ってあげる。子供はそんな親をウザイとか、死ねとか思っているのにな。そうして、親の無償の愛に気付いた時、

子供は今までの辛辣な言葉を悔い、でもやっぱり親を愛せない自分に辟易してしまう。

自分を、壊してしまうんだろう。そうして、親だけじゃなく他の人間関係や、受験勉強、社会不安に悩ませられ、生きている意味も見失っていく。やっぱり、自分をこんな苦しまねばならない人生に送り込んだ「母親」という存在を、酷く恨むんだろう。

恨まれても嫌われても構わないけど、あたしのように苦しい想いを、あたしの血を引く子供に与えたくはない。とても耐えられない。

ましてや、五体満足に産んでやれなかったらとか、虐待してしまつたらとか、先立ってしまったらとかいう不安も消えない。

だから子供なんていらないし、結婚しなければ中絶しても正当化できる。強姦にあう場合を除けば、彼氏を作らなければ赤ちゃんを作ってしまう心配もない。彼氏を作らないためには、好きにならなければいい。

私はまったく無意識だけど、もしかしたらこの信念が、あたしに「人を好きになるな」と、警告しているのかもしれない。

その点、アサヒは楽観的だった。自分の幼さと理知的な外見、それにそぐわないミハアで、変人な中身。そのギャップも魅力も理解した上で、積極的に他人を好きになって、好きにさせていった。初恋は四歳に始まって、一度に五、六人に恋をしていた。レイくんは、二年前、彼から告って始まった。二年も、続いてたんだ。

レイくんをはじめて紹介されたのが、昨日のことのようによみがえる。

あと二人、木枝玉で本堂の畳を踏んでいるのがいた。アサヒの担任と、学園長だ。一番後ろの列で、何も言わずに手を合わせている。アサヒを問題児扱いしてきたこの二人が、神妙な顔でお経を聞いている。それは、酷く滑稽な様子で、あたしは笑いをこらえるのに必至だった。

まだ肌寒いこの季節だけあって、お寺にはちゃっかり暖房が効いている。さすがに灯油ストオブなんだろう。

とても、臭い。

でも、そんなことはどうでもよくって、問題は古き良き日本家屋に、灯油ストオブを隠すための木箱が増築されているということだ。これもまた、死者を愚弄しているように思えた。みんなと同じように、アサヒの存在を憎んでいたのに、あたしは今、彼女を重んじない全てのものを恨んでいる。

不思議。あたしこそ、いったい何がしたいのか。

「ねえ、春野」

突然、呼びかけられた。サクラちゃんだ。

「これ終ったら、散歩しようか」

太って、ふかふかした分厚いサクラちゃんの左手が、あたしの肩を優しく抱いて、慰める。何の処理もしてない毛深いサクラちゃんの顔が、ぐっと迫ってくる。

カオルちゃんに呼びかける時と、まるで別人の声色。きっと、妹も弟も生まれなかったから、あたしやアサヒのお姉さんになるうとしてるんだ。たまにしか会わない従姉妹に、いったいあたしは、どういう態度を取ればいいのか。

「ありがとね、桜ちゃん。春野、行っておいでね」

あたしがなんて答えようか迷っていたら、代わりにお母さんが前を向いたままで答えた。ヨシエおばちゃんが、サクラちゃんを良い子だと誉めるような目つきで眺める。

お母さんとヨシエおばちゃんは、双子の姉妹だ。けれど、うちのお母さんのほうが、数倍老けて見える。悲しみをこらえたその顔は、酷く厳しくまた、やつれている。

数日前までヨシエおばちゃんみたいなずんぐりした体型で、一升瓶を一本かるく飲み干して、朝から晩までぐうぐういびきをかいていたのに。あたしやアサヒに「豚」と、罵られても、ケロっとして「女はねえ、ジンカイにまみれて汚い奴ほど美人なのよ。私はそんなじゃなくていいの。心が綺麗ならね。いいの」で、なんだか難しいことを嘯いていた。まあ、太ってはいいても流石に元モデルだけ

あつて、美人の部類に入るお母さんが何を言ってるんだというカンジではあつたが。

そのときは、憎らしくて情けなくてたまらなかった。屁理屈ばかりで言い訳するお母さんが嫌いだった。醜いものを憎悪していたようなもんね。それに、アサヒは解っていたようだけど、理数系のあたしには「ジンカイ」の意味がわからなかった。そして、今もわからない。

お母さんの容姿もあたしがムカ付く由縁。デブで、クルクルパアマ。しかも、化粧が濃くて安物の洋服ばかり着てる。中一の初め、アサヒの授業参観から帰ってきたお母さんを見て、すごくびっくりした。

だって、長島商店の特売品のスカートと、黒い七部袖。おとしあたしがプレゼントした手編みの茶色いシヨオル。トオタルコオデイネエトでわずか千五百円。アサヒの学校は1ヶ月の授業料が四十万で、寄付金は一口五万で三口以上という「上級成金」のお嬢様学校だということにもかかわらずだ（あたしは近くの公立だったが、アサヒだけが受験させられたのだ）。

全身シャネルやコオチ、プラダのバックにハイファッションにでも載つていそうな奇抜なスーツに身を包み、奥様方はその日の朝にエステと美容院に行く。その真ん中で千五百円の巨体を震わせていたのかと思うと、気絶しそうだった。

お金が無いわけでもないのに、お母さんはお父さんのいないときはなんのお洒落もしない。お母さんが言うには、自分のレベルに合った格好をしたただけだという。あたしはアサヒの身になったようにして、お母さんを詰った。

後から帰ってきたアサヒは、ケロっとしていたけれど、あたしにはそれも我慢できなかった。確かに、あなた程度の女なら、それで済む。でも、レベルの前にTPOを考えてよ。それじゃあアサヒがあんまりだ。他の奥様方に、なんて罵られてるのか考えなよ。ほおら、すっげえ怖気が走るじゃない。

頭も悪くて、タイミングも計れなくて、いつも損ばかりのあたし。自分だけが地元の公立学校へ通わされていることも気に入らなくて、嫌味のつもりもあったのかもしれない。

あたしは、お母さんが嫌いだった。

「朝日…。アサちゃん、なんでなの……？」

すっかり肉の落ちた頬に、陰が出来ている。口端は垂れ下がり、前よりも顎が突き出て見えた。抉り取られたように浮き出た眼球は、ただ真赤に染まって、小指の幅ほどにも膨れた涙袋は、悪い色が滲んでいる。その横顔はどうも、苦勞した婦人なんかじゃなくて、何か別の生き物のようだった。

必死すぎる彼女の形相が、どこか化け物じみたイメージをあたしにもたせている。

はつきり言つて、アサヒの死よりもお母さんの変貌ぶりのほうが、あたしにはショッキングだった。話し掛けてもあいまいな答え。愚痴をこぼせばうるたえる。以前のように、軽口をたたいたり、頭のいいのを自慢したりしない。

あたしは、お母さんが嫌いだった。

「アサちゃん…」

今まで全く聞いたことのなかった御経。どちらかというと、プロテスタント寄りのあたしなのに、ただならぬ、重重しい雰囲気を感じた。オキヨウ・ミウジックを歌うお坊さん達は十八人も居た。その中に一人だけ、高校生ぐらいのお姉さんが混じっていたのを不思議に思っていた。

この世は、不思議でいっぱいだね。

ああ。

どうしてなんだろう。最期のお別れつて、こんなもんなの。

退屈だ。

あたしはアサヒを愛していた。

自分の妹を、心から愛していた。なのに、彼女がいなくなってから、まだ一回も生きている時の彼女を思い出さない。

アサヒ、どんなだったかなあ。

髪をかきあげる、人を睨む、パソコンに向かって舌打ちする……。そうだ、おもいだした。アサヒの仕草、アサヒの匂い。どんなに彼女を嫌った時も、安心できる“波”を感じていた。なのに、あたしは彼女を追い詰め、苛め抜き、たくさんたくさん喧嘩して、暴力もふるった。姉であることを最大限に利用して、卑怯なことも、さんざんやった。人間離れたアサヒの頭脳と美貌に嫉妬しながら、自分の中での「お姉ちゃん」らしく振舞った。

ああ。もういなんいんだ。

アサヒはもう、天国に行っちゃったんだ。

嫌いだったわけじゃない。ちゃんと愛していた。お母さんやお父さんのまねをして、アサヒに命令したり、本当に何度も喧嘩した。二階から故意に突き落とされたこともあったけれど、それでもあたし、アサヒのこと憎んでいたんじゃない。違う。

酷いこといっぱいしたね。ごめんね。

姑息な手段でもって、あなたを陥れようとしたよね。ごめんね。最低だったね。アサヒがお姉ちゃんって、呼んでくれなかったのは、当然だよな。あなたの苦しみの半分もわからずに、ときどき優しくしたりしたよね。

「あたしが死んだら、この世もなくなんねえん」

本当に、本当に、アサヒが死んだら『アサヒの居る世界』は終わった。馬鹿だったのはあたしだ。今更気付いたの？

薄情モノは、あたし。

ごめんね。

ごめんね。

ごめんね。

.....アサヒ、ごめんね。

ごめん.....。

「春野、ちょっと、出よう」

サクラちゃんが、あたしの手を引いて、強引に立たせた。まだ、

お葬式の途中だった。無限に広がる畳の上に正座した、黒い少年達があたしを一斉に見上げた。

空は、琥珀色だった。

「ごめんください。別府です」

ベップ？この雨の中、こんな暑いお昼時に。

誰？

どこかで聞いたような声。上ずりながらしゃべる、低い男の声。

コンコン

「ごめんください。誰か、いるんでしょう？」

今日は七月二十一日。大掃除で午前授業。だから早くに帰宅したあたし。台風も早めに上陸するらしい。ああ。関係ないや。

ほんと、最近は思考がグチャグチャね。

「チッ」

玄関ごしに聞こえてくる男の舌打ち。いないと判断して、帰ったのだろう。少し静かになる。これで安心して、ゲームの続きが出来るわね。

七年も酷使し続けたテレビが、ウンという音を立てて、一拍置いてから画面に火をともし。バトルの最中、足を蹴り上げて固まったままの主人公。

コントロオラアを握り締め、スタートボタンを押し込む。はじめっても、表の雨にかき消されて、聞こえないBGM。月にむら雲、ゲームにわか雨。

わざとらしく赤い鉢巻を巻いたガタイのいい大男が、月にでもいるのかと思うほど、高く高く飛び上がって、必殺憲法ウルフ・タイガア・キックを相手にお見舞いする。音が聞こえないと、迫力がでない。

ドンドンドン

「ハッ……」

びつくりして、ポオズボタンを押す。敵がしゃがみこんでいるところで、またしても彼らの時間が止まる。

「……いるの、春野さんでしょう？ 別府ですよ。別府 礼です。朝日に、お香あげたいんですけど」

「レイくん……？」

あたしはようやく、ベツプ レイという人物に思い当たり、テレビを消す。家にはあたし一人だから、あたしが玄関を空けなければならなかったのだ。

気が重い。意識せずとも、身体はのろのろとしか動かないけれど。がちや

「お久しぶりですね。春野さん、あいかわらず」

「……どうも」

出し抜けに満面の笑顔。アサヒと同じ人種だと感じずにはいられない、飄飄とした物言いに、一瞬言葉に詰まった。一年前までは、まるで本当の弟みたいだった彼。親しみも、懐かしさも湧き上がらない。

「本当に、あいかわらずですね。普通そんな格好で、でて来ませんよ」

「え？」

気付けば中学の制服を、よくもというぐらい着崩していた。スカートのホックはとれてジッパアも全開。おしりの大きさに支えられて、ほとんど引きずっている状態。ブラウスのボタンは肌着が見えるギリギリまで開いている。リボンは首にだらあん。まるでニシキヘビ。髪の毛もバサバサで、化粧も落としたばかりだ。

自分の醜態を再確認すると、なんとなく恥ずかしくなってきた、俯いたまま、顔をあげられない。尋問を受けている気持ちになった。

「匂い」

「今度は、何？」

泣きつ面にハチってこんなかんじ。レイくんは鼻をヒクヒクさせ

て、しかめっ面をしてみせた。もともと目つきの悪い彼のその表情は、心のそこから嫌そうだった。

「また、カップ麺？匂い、すごいですね」

「……………」

大きなお世話。たしかに、台所のドアなんか開けっ放しで玄関まで匂ってくるけれど……いい匂いじゃないの。美味しいんだから。

「ああ！ごめんなさい、春野さん。冗談ですよ」

ムツとしたのが顔に出てしまったらしい。慌てて取り繕うレイくん。それがあんまりらしくなくて、あたしは吹き出した。

でも、笑っているあたしの声はどこか他人じみていて、あたしは全然笑ってなかった。面白いと思っただし、吹き出した瞬間にはこんな冷静な部分、なかった。しばらく笑っていると、戻ってきたのは現実のあたし。

誰が笑っているの？

ああ、あたしか。

みたいな部分。最近は、冷静なあたしと、皆に合わせて馬鹿をしてるあたしが共存している。ロボットのあたしに乗り込んで『笑う』とか、『怒る』とかのコマンドを入力している。

「ひどいナア、もう」で、余裕の微笑を浮かべてるレイくんも、同じように思ってるのかしら。きっと、そうだよ。人間で、そうなっていくんだよね。

それとも、まだ子供のレイくんにはそういう二面相はないのか。ひとしきり騒いで、急にレイくんが引き締まった表情に戻った。あたしも、ばつさりと笑うのをやめた。ほんの一秒見詰め合う、というよりも睨み合っていた。

「朝日のお仏壇……。どこですか」

小さな唇を開き、あたしの瞳をじつと見上げながら問い掛ける。上ずりながらしゃべる、レイくんの特徴。

「そこ、突き当りの和室」

「おじいちゃんの、部屋だね」

レイくんは穏やかに微笑んだ。さらさらの黒髪がゆれて、花びらみたいに薄くてちいちゃな耳たぶを覆い隠す。背も低いし、この男らしい太い声さえ発しなれば、小学校低学年のお坊ちゃんにすら見える。

なのにもう、中学生なんだ。

アサヒも、生きていたら中学生になっていたのに。

「レイくん、どこの中学だっけ？木枝玉じゃあないんだよね、確か？」

振り返るレイくん。お坊ちゃん刈りで暗くて、眼鏡なんかかけていたら完璧なオタク。レイくんの異性としての良さなんて、アサヒが生きていた頃は全然気が付かなかった。むしろ、キモキャラぐらいにおもっていたけど。

肩越しの視線は、なんとも色っぽいんじゃない。アサヒには、見えてたんだね。

「ええ、鶴亀中です」

鶴亀中は、アサヒがいきたがっていた中学だ。お受験が大変だからと、お父さんに大反対されていた。まさか、レイくんはアサヒの望みを叶える為に？

「じゃあ……」

「ま、この話はまた後ほど」

突然大きな声を出して、あたしのセリフを遮ると、とことこととこ廊下を行ってしまふ。ぴしゃりとふすまが閉じられて、レイくんのため息が聞こえる。

「畜生」

あたしは閉められたふすまを一瞥すると、玄関の鍵をかけようとふと視線を落とした。

硬質のタイル。玄関に引き詰められたそれに、まるで染みのように白いズックが、真正面と右端にそれぞれ裏表逆に散らばっている。右のは、あたしの本皮靴をしっかりと踏み潰していた。

「畜生」

ガチャ ある日、梅雨の正午。受験生となったあたしと、死んだ妹の彼氏を2LDKに閉じ込める、小さな鍵の音が、無人の廊下に鳴った。

あたしはスカートがずり落ちないように両手で押さえながら、ほけっと突っ立っていた。フロオリングは足に心地よい。こんなムシムシした日には、家の廊下が一番なんだ。

「……………そしたら、俺もお前のところに……」

突然、

「うつ。ああつ…………」

嗚咽。

襖のまん前、冷たい廊下の中心に足を開いて立ち尽くす。ぼおっとなった頭で、ただただ、レイくんの慟哭を聞く。あのこ、まだちっこいのに、必死に堪えてる。

無声慟哭。こういうことかな。

淡淡と事務的な会話をしているようだったが、なんだ。感情にはしるのが、怖かっただけか。そんな人間的なこには見えないのに一瞬、葬列に並んだレイくんの、真白いマスクが記憶の断片として、頭をよぎる。一重の切れ長の目だけをぐりぐり動かして、後ろのほうから一生懸命に、アサヒの骨壺を見ようとしていた。変なマスクの、変な少年。

レイくんも、同じなんだね。やっぱり、アサヒがいないと辛いんだ。

頭が良くて、スタイルも良かったアサヒ。カラカラと笑う、無邪気な彼女。そのわりには、自分の哲学を追及して、あたしにはわからない世界で生きていた。

賛美しかもう、思い浮かばないくらいに、遠くなったアサヒの「生」。

「アンタなんか、生まれてこなきゃ良かったのよ！」

あの時言った、あの言葉。

でも、死ねばいいなんて一回も、思ったことないのに

！

「うつ」
「あ」
「ああ」
「うう」
「あ」
「あ」
「フウッ……」
「ぐっ」
「えっぐ」
「うあ」
「……う」
「っ」
「あ」
「」

「！」

東の窓から差し込むわずかな曇光と、イグサの匂いとお線香。おじいちゃんの部屋を支配するのはアサヒの笑顔の白黒写真。四方八方をアサヒに支配されたこの部屋で、レイくんは身体を折って倒れこみ、口に拳を突っ込んでまで、号哭悲鳴を聞かれまいとしている。意味なんて、あるわけないのに。

彼はのた打ち回って、地面より深く頭を擦りつけながら何者かに祈っている。

あたしは耳元で動き回るハエの、ブウンブウンという音と、レイくんの無声慟哭をキイタ。もう、考えるのはやめよう。

光を反射することのないあたしの瞳が、死者を見たのか。アサヒが廊下を横切るのを見た気がした。あたしが最初に最後に視た、幽霊である。

幽霊、か。

違うのかもしれない。今は、幽霊じゃなくて……。

「礼くん。あたしにも、あげさせて」

勇気をもって、襖を開ける。目を真赤に晴らし、右の手で左の二

の腕を、左の手で右のを、痣が出来るくらい強く掴んでいたレイくんが、パツと頭を上げて、一瞬怒りの表情を浮かべた。でも、すぐにすまし顔に戻る。いつもの、彼。いつもの、仮面。

「……はい。」

正座のまま、器用に仏壇の前から動いて、あたしを促す。

リビングと違って、共同通路側の祖父の部屋は、雨音も押さえられている。しとしと、実に梅雨らしい。

すこし開いた障子の先に、鉄格子のあるガラス窓。その向こうは、マンションの住民が行き来する通路。どこからか、足音がこだます。

「アサヒ、礼くん来てくれたよお？よかったねえ」

チンチン

.....

ほんの数秒の静寂。表情を変えない、アサヒの写真。卒業アルバムに載るはずだった、笑顔の彼女。いつもいつも、へらへら笑って、子供らしさを前面に押し出していた。

幼稚園生ぐらいの時から、彼女は恋急いでいた。お父さんはどうかしらないけれど、お母さんはよく「心配だわ」「持たせるべきかしら」と、悩んでいた。そんなもの、なるようにしかならないし、お母さんとお父さんの間に、あたしたちが生まれたということは、お母さんも、その行為を否定することは出来ない。

きつと、お父さんもお母さんも、親や周りを気かけず、自由な愛を求めて生きてきたんだろうに。自分がいざ親の立場になってみると、やっぱり止めに入るらしい。

あたしは、親じゃないから。アサヒはアサヒの思うように生きたんだと、納得できる。

「アサヒのこと、愛してます、今でも、これからも」

レイくんは、天井付近を見上げながら、恍惚とした表情で言った。あたしは確信する。自由奔放に野放しされ、傍若無人にねりあるいていた「アイ」やら「コイ」やらが、彼とアサヒの間で息吹き、大切に育てられているのだと。

「あたし、アサヒの死ぬ瞬間まで側にいたけど、あなたのこと、忘れなかったよ」

アサヒは、原因不明の病気にかかって、一週間生死の淵をさまよった。その間、彼女の記憶は先っぽからザクザクと消えていき、最終には自分が誰かもわからなくなってしまうた。もちろん、レイくんのことなど真っ先に忘れてしまったが、毎日お見舞いに通う彼を哀れんだお母さんが、必死に「レイ」って言わせるのを努力していた。幼児に逆成長しながら「レイ」と、言うと言められることを、六分間だけ覚えた。

あたしは、彼女に忘れられた瞬間に、はじめて「お姉ちゃん」でありたいと願った。本当に、心のそこから、アサヒのお姉ちゃんが良かった。

「あたしは、忘れられちゃった」

「名前だけです」

半ズボンからむきでた白い膝小僧をコツコツたたきながら、レイくんは小さく呟く。ほんのりと、男の人の匂いがする。

「名前だけしか、覚えていなかった…。春野さんと、同じですね」

刹那、視界が滲んだ。急に遠くなるレイくんと、そしてアサヒのお仏壇。

雨音も、遠ざかる。

何もかもが、離れていく。

頭、グラグラする。あたし、立っているの？座っているの？わかんない。

「朝日、全部忘れて死んじゃった。名前なんて、個人を区別する為に呼称されている記号のようなものですから、朝日が“礼”と、言えたからって、それは偶然に俺についている名前と同じ発音を言えたというだけで“俺”のことじゃない。でしょ？」

むきでた真白い膝を、親指と人差し指で強く抓る。黒ずんだ赤い染みが、できる。

あたしは、必死に焦点を合せようと、レイくんの足ばかり睨んでい

た。

アヘンを吸ったみたいにクラクラしながら、それでもなんとか答えるあたし。

「そう、そうだね。礼くん、なんだか大人みたいなこと言うね」

渴いた喉を鳴らし、いまいちハツキリしない頭で何とかそれだけ言う。

とたん、彼の表情が一転、冷淡な仮面を被る。もともと表情の乏しい少年だったが、まさかこれほどまで冷たい、刃物のようなかおをするなんて……！

足がすくんで

あたしは、ここでやっと自分が立って

たつてことに気付く

一人じゃたつてられない気がし

て、アサヒの仏壇にもたれかかる。

「大人じゃないと、言っちゃいけないんですか」

「え？」

「子供は、知りたがってはいけないんですか」

「え？」

「あんた、大人なんですか」

「え？」

「なぜ、そんなこと言うんですか」

「え？」

「……何も、疑問を感じたことが無いのか」

「え？」

「何も、考えたことがないのか、あんた」

「え？」

「俺たちが、必死にやってきたこと、考えてきたこと、馬鹿にするやつは大抵そう言うか、もしくは……」

「え？」

「信じられない、って言うんです」

「え？」

「信じようとしなないんじゃないか。今までちつとも、疑ってこな

かつたんじやないですか？何の努力も、努力する理由すら、経験してこなかっただけじゃないんですか」

「え？」

「親を、殺したいと思ったことはありませんか」

「え？」

「生まれてきたくなかったって、思いませんか」

「え？」

「死にたくないって、思いませんか」

「え？」

「薄情モノは、いましたか」

いたわ。たくさんいたわ。

シャワアのように降りかかる。外は大粒の雨に、腐った太陽が仄かな明かりを導きて。あたしの涙にも、どうか明かりをちょうだい。とつくのとうに枯れた、そうだと信じていた悲しみが、溢れ出した。

「でも、あたし、考えなかったのよ。自分は子供だからって、庇護される立場に甘んじた。朝日が死んでしまつて、傷心を口実に前よりもっと考えなくなつたんだ。あたし、あたし……」

「利用したんですね、朝日の死を」

核心を突かれて、畜生と思った。何もかもどうでも良くなって、お洒落も勉強も輝かなくなつた。もともと、そんなに素敵なことじやなかったのかな。お母さんを毛嫌いするのもやめたし、インコのももに芸を教え込むのも止めた。

学校でも、だれも悲嘆するあたしにかまわない。まるで傷口にさわるように接してくる。それをいいことに、あたしは何も考えず、動かない。

「妹さん亡くなつて悲しいのはわかるけど、なんで掃除までサボつてんの？」て、批判が最近多いけれど、気にはしない。

楽できるっていいね。だって、楽なんだもん。

何にもぶつからず、転ばないけどノロノロと、生きていければ立

派なものじゃない。子供とか大人とか、社会とか世界とか、自分とか…。考えるのはめんどくさい。

考えたって、答えの出ない堂堂巡りの哲学だ。あたしは、いいのよ。流されるだけ、流されればいいわ。アサヒのいなくなったのだから、実を言えばちつとも悲しくない。

「薄情モノは、あたし」

いつも目の上のこぶで、何をしても彼女に劣った。お母さんは平等に愛してくれたけど、それが逆に不愉快だった。お父さんは、アサヒを気味悪がっていた。口では「可愛い我が娘達」と、豪語していたが、アサヒの異様な生活スタイルに戸惑い、話し掛けられると固まった。

頭が良くて、何でも出来るアサヒに劣等感を、親戚中に煙たがられ、教師達にも差別されたアサヒに優越感を感じていた。ただ、それだけの存在だったんだ、お互いに。アサヒは最期まであたしを姉とは認めなかったし、あたしも何一つ姉らしいことはしてやれなかった。ただ、あたしがお姉ちゃんとしてカッコイイと思うことを、自分を満足させる為だけにアサヒに押し付けた。

アサヒとの趣味がまったく違うために、洋服の交換とかもしなかった。家族4人で出かけるとき以外、アサヒと外に出たことはなかった。

悲しくない。逆に、アサヒという異物が取り除かれて、せいせいする。

でも、淋しい。

町にはこんなに多くの人間が住んでいるのに、あたしはひとりぼっち。そんな不安を、取り払うことが出来ないでいる。臆病なのかな、あたし。

「ええ、そうよ。利用してるわよ。それがどうしたっての？」

低い声で、うなった。図星ではなかったが、レイくんの言いたいことは良くわかった。

「うん。春野さんらしいや」

ニイと、子供らしく笑う。目を細めて、顎を引いた、ヒキガエルみたいな顔だけど、なんて無邪気な笑顔。アサヒを、思い出しちゃう。

「今日は、アサヒと最後にキスして一年経った“忌念日”なんです」
先ほどの、冷たい刃の片鱗を残したままで、目を伏せる。あたしはこうして仏壇にもたれかかりながら立っているわけだから、彼を見下ろしていることになるのだけれども、若い少年からにじみ出る侮蔑のオオラはとんでもない質量となつて、あたしを見下す。

目を伏せる、頭をだるそうにもたげてパチツと目をあけて、真っ直ぐアサヒの位牌を見つめて、またパチツと、瞬き。次のパチツでは、彼の顔は肩ごと薄暗い窓辺に向かい、短いまつげを黒い瞳にかぶせる。

雨脚は、だんだん加速し、また空は、どんよりと臙脂色になる。

「俺たちを、大人みたいだつて評価する人には、わかんないんでしょね。朝日の、がんばってきたことなんか」

「そんなんっ……」

あたしは口ごもった。だつてそうだ。誰にアサヒの苦しみがわかるつていうんだ。アサヒが例え、あそこまで特異な存在でなかったとしても、例え、まわりが温かく彼女を迎えていたとしても、彼女がアサヒである以上は、苦しまざるを得ないことだつてあった。苦しまなければ、いけない宿命だった。悩んで、悩んで、傷つきボロボロにならないアサヒなんて、レイくんの言うところの記号“ケンドウ アサヒ”ではないんだ。

彼女のその存在意義を、いったい何処の誰が理解しえたんだろう。十二年二月二十四日間かけて、奔走してきたんだもの。そのくらの年月をかけて、解ろうとしなきゃ解れなかったのだろう。

あたしは反対に、自分の膝に目を落とす、すまし野郎に質問した。

「レイくんは、わかっていたの？」

「真実は、わかりません。でも、立場を置き換えれば現実には、直視可能です」

「そう。なんか、寂しいな」

仲間はずれみたいで……。とは言うまい。だって、あたしは仲間に入りたいとは思わないんだもの。自分の心臓の音が、迫っては遠のき、迫っては遠のき……。例の立ちくらみのようなものがあたしを襲う。

「お茶か何か、飲んでいく？」

けして、彼を気遣ったのじゃなくて、あたし自身立っているのが限界な気がしたから、リビングでちょっと一息入れたと思った。

こんなに蒸し暑いんだもの、きつと体の調子をおかしくしてしまつたに違いない。

なのに、彼はあたしの誘いには乗らずに、すつと立ち上がった。

「俺、もう帰ります」

サバサバしちゃって。でも、逆に子供らしい気がする。あたしだつたらきつと、どういう態度をとつたらいいのか解らなくて、あいまいな返答しかなかった。大人だったら、相手の言うままに頷いていた。お茶をご馳走にならなかったレイくんを、尊敬する。

彼は、ずかずかと玄関まで歩いていく。この家にすんでいるのに、あたしの方がお客さんみたいになって、背を丸めてくっついていく。

「春野さん、お願いしていいですか？」

突然、レイくんが振り向く。サラサラと、黒髪がゆれて、あたしが以前「ピエエル」って言うてからかった、高い鼻がこちらを指す。高い鼻、ちいちゃんお耳に、サラサラのお坊ちゃん刈り。印象の悪い三白眼に、たまごの輪郭。こうしてマジマジと見ると……………やっぱ、ちよつとオタク系。

「春野さん？」

「あ、うん。何」

目眩が原因か、あたしはレイくんから目が離せなくなった。

同じ身長だから、なおさら視界から出しがたい。

「ねえ、抱きしめていいですか？」

それが、彼の最期の言の葉。一年後、ベップレイは手首を切つて自

殺した。

いい加減にして！アナタなんかいなくてもいいわよ。どおしてそおデブデブデブデブ言えるんですか！わたしはアナタの妻なのよあ？元はといえば、アナタがあたしにハルちゃん産ませたんじゃないの。ああそう、じゃあ言わせてもらいますけどねえ、あの頃わたし、梅平さんと付き合ってたんですから。なんですか卑怯って！そうやって自分ばあつか優位に立たせようとするんですか？はあ、アナタって昔からそうじゃない。ええ、ええ！そうよあ！お義父さんのことだってわたし知りませんからね。あんな暴力ジジイくたばっちまえ！うるっさい！何が悪いんですか。わたし、あのときのこと、まだ覚えていますからね。まあ！酷いわ！まるでわたしが、強欲みたいじゃないですか。ああ、そお！いらないわよオ！それよりも、電話してこないでください。そう、そうよ！こっちは上手くいつてるの。アナタのはした金なんて、使うだけで身が穢れます！もうやめつつっていつてるでしょあ！ヤメテよあ。もうアナタの声なんて聴きたくない！アナタなんて……！この、このバカッ。いい加減にしてください！これ以上私たちにかかわらないでえ、思い出したくもないわっ。え……？ちよつと、ちよつと待ってください。それって、どういうことですか？ハ？なんですって。これ以上、わたしを怒らせないでちょうだい！ええ……。嫌っ。ア、そんな……。わたしから、ハルちゃんまで取り上げるって言うんですか？お義父さんのせいでアサちゃん酷い目に会ったんですよ？解って言ってるんですか、アナタ。ああ、神様……。神様、たすけてえ。そんなっ、そんなっ。アナタお願い、ハルちゃんだけは、わたしの生き甲斐なの。会社つたて、ちいっぴけな会社じゃないですか！ハルちゃん、歌手になりたいって、言ってるんですよ？それを、諦めさせるんですか。そん

な汚いインクべちゃべちゃ混ぜ合わせているだけの工場！アナタそれでも親なの？いい加減にして！そうやって、いつつもそうじゃない自分を正当化して。そうでしたよ。学生の中から。最低……。アナタそんなことばかりしてるから、悪徳って言われるんですよ。あら、知らないの？白石さんも大野さんも、暮場の奥さんも言っていましたよ！お陰でわたしがどれっただけ肩身の狭い思いをしたか！だからアサちゃんアナタに似ちゃったんじゃないの？アナタのせいでアサちゃん、天国にいちゃったのよ！そうよ！全部全部アナタの責任！あつそ！でも本当じゃない。わたしのこと幸せにするって誓ったのに！嘘つき。バカバカバカ！嫌いよ。わたしが知らないとも思ってたんですか？なにして、アレですよ。アナタの裏の性癖！ああら、これでもまだ惚けるのね。知ってるんですよ！男でしょう？そうでしょう、アナタは！好奇心だろうがなんだろうが、証拠はしつかりあるんですから。訴えてやるわ！梅平さんよ。そうよ。違うわ。違う。なんなの本当に！あたしをからかって、そんなに面白かったの？だって、夫婦じゃない。うすうす解ってはいたんです。そうね、終わりね私たち。でも、ハルちゃんは、渡しませんよ。だって！あのこのためだもおん！そおですよ。べつに、お義父さんだけが問題なんじゃないんだってバ！ねえ、アナタ本当に何もわかっていらつしやらないのね。信じられないわ。悔しい！だから男ってバカなのよ。いつまでもガキだってんのよ。アナタ、解ってる？さつきから自分のことばあつか言っちゃって！少しは他人の言い分とか気持ちとか考えてくださいよ。だからッ。ンもお、どおしてそおいう考え方しかできないの？しょうがないじゃない。アサちゃん、酷い目にあってたのに、アナタってば全然真剣に考えてくれなかった！あら、そこは大人ですもの。ばつ、なんてこと！あなたそんな風に思ってたんですか？最低だわつ。だって、わたしたちの子供じゃないの！育てる義務があるのよ私たちには。産まなきゃ良かったって……！まさか、本気でそんなこと言ってるわけじゃないでしょう？赦せないわ。とにかく、そんな人にわたしの春野を譲るわけ

にはいきませんから。母親として、きつぱり言わせてもらうわ。だいたいいあなたなんか子育てられるはず無いじゃない。今までずっとハルちゃんとはわたしと一緒に暮らしてきたんだから、ハルちゃんだって、アナタのところへなんか、行きたくないってよ！年頃の女の子なんですよ？アナタは子供と向き合う気ないし、むしろ、かわりたくないと思ってたんじゃないですか？なんですか。アサちゃんだってアナタの！建前上でも、娘じゃないの！どおしてそあやって順位なんかつけようとするの？それがダメなんだって、いつてるんじゃないですか！バカね、あなた本当に、最低な人間だわ。だいたいお義父さんはどうするの？そう。そうだったかしら？だってあのジジイ、なんでもないことで子供を蹴り飛ばすじゃない。虐待だわ！いい？わたしには、権利があります。ちゃんと出るところ出ようじゃないの。そうすればスツキリするわ。あんなボロ工場継がせるなんて、頭どうかしてる。女の子なのよ？ハルちゃんは！経済？知らないわよ、本当に。いい加減にして！なんとかしてみせるからね、アナタの思い通りになんてさせるもんですか！そうよ！ええ！じゃあ、ちゃあんと、弁護士さんと通してからにしてくださいね。だからもう、電話なんかしてこないで。本当にもう、アナタにはうんざり！アナタもさぞかし、わたしにうんざりしてるんでしょね！いいわ。離婚が成立して、わたしがハルちゃんの親権を頂いたら、そうしてから、男とイチヤイチヤしてなさいよ！このホモ野郎！ああ！思い出すだけで背筋が凍るわ。……うん。わかってるわよお。そんなことぐらい、わたしだって、わたしだって！んんつもおう！本当に最低ね。わたしを責めないで。寂しいのはアナタのほうじゃないですか。なんて、自分勝手なの？嫌っ、嫌っ、嫌よ。そうやって、逃げないで。わたしだけじゃないですか、いつも大変な思いしてきたんですから。今までずっと我慢してきたんですから。アナタのためにやってきたのに……わたしの人生を返してよ！このバカ！なんですって？糞、畜生！いいわよ、分かってるわ。わたしが諦めればいいのね、それしかないのね、いいですか、親権はしかた

なくても、わたしアナタに負けたなんて思わないわ。卑怯者！この、このお
ウラギリモノ……！

黒い、黒い人がいっぱい。頭も、顔も、身体も、足の先まで真っ黒。腕にはめている紫や透明の数珠も、黒い。

「記帳、お願いします」

「この度は、あの、お悔やみ申し上げます」

「……」

見たこともない、知らない女性。黒に黒いステッチでブランドのロゴのあしらわれた嫌味なスウツをびしっと着こなした、三十代前半の綺麗なヒト。黙って会釈するお母さんに目を合わせようとしない。もしかしたら、一緒にいるヨシエおばちゃんとお母さんの見分けが付かないのになって、一瞬思ったけど。杞憂だ。お母さんとおばちゃんは、ちっとも似ていないもの。体格こそはそっくりだけど、お母さんは骨が出っ張ってゴツゴツと硬そうな外見をしている。そのくせ、足はパンパンに鬱血してピンク色に腫れ上がっている。

おばちゃんは、ただ太っている。お母さんは、太っているのに、ガリガリなんだ。

顔なんてもっと酷い。おばちゃんはデブでブスなだけなのに、おあさんは目鼻口のバランスがグチャグチャになっている。濃い化粧でなおさら化粧物のようにになっている。

肌は割れ、ニキビが酷い。なのに粉を吹いている。

白髪も前の倍の倍くらい増えて、おばあちゃんみたくなくなってしまった。

今は「お気の毒」な、お母さんでも、数カ月後には「何あのババア」になっているだろう。もともとケアはしないけど化粧は欠かさない変な人だったので、家には口オシヨンも、拭くだけコットンも、

ニキビ予防もない。

あたしは、ヨシエおばちゃんと見分けの付かなかった頃のお母さんのほうが嫌いだった。でも、今のお母さんはお母さんとは違う、他人のようだ。

そこに、去年死んだ金沢のおじちゃんの奥さんが来て、涙を浮かべながらカウンタアを乗り越える勢いでお母さんの手をにぎった。

「志津江さん、かわいそうだったねえ！聞いたよ、精神異常の病気でしょ？頭狂って死んじやったんだよねえ！あんなうちっちゃいのにねえ、娘さん！春野だっけえ？」

ハルノはあたしだ！死んだのはアサヒなのに、なんてこと言うんだろう。

あたしは怒りで火照った。

「ちよつと、おば様ったら。そんな大声ださないでくださいよ」

お母さんはニコニコしながら宥めて、さりげなく金沢のおじちゃんの奥さんの手をふりほどいた。奥さんは金歯を光らせながら、大声で。

「そおだよねえ！ごめんね」

と、ケラケラ笑いながら言った。後で聞いたんだけど、彼女は“ソウ”っていう病気だったんだそうだ。鬱病の反対だって言っていた。

そんなことより、死んだのはハルノじゃなくってアサヒだって言うてよ。あたしは、無言の抗議の瞳でお母さんをねめつけた。

なのにお母さんは何の訂正もしないで、記帳をお願いした。

朝日が精神病で狂って死んだわけじゃないことも何も説明しなかった。お陰で、奥さんの大声を鵜呑みにしたほかの人たちは、ヒソヒソと噂し始めた。死んだ人間の悪口を言い始めたんだ。あたしは、声を大にして叫びたかった。

違う違う違う！やめて、そんな嘘を話すのはやめて。だれも彼女の苦しさを知らなかったくせに。酷い。

あたしは、ぐっと悔しさを堪えて黙ってお母さんの隣に立ってい

た。きつとお母さんも堪えているんだ。でも大人だから、がまんしているんだ。そんな風に思っていた。けど、お母さんの目はどこか虚ろで、本当は、何にも見ていなかったのかもしれない。

遠巻きにあたし達を見る人人の視線が痛い。

とにかく、早くお葬式が終ることを願った。ついさっき、親しい親戚同士のみのお食事会のようなイベントをこなしてきたから、ヘトヘトだった。しかも、お葬式が終わったらすぐに焼き場に行かないといけない。アサヒの小さな柩に付き添うのは、何故か親族ではなくて業者の人。あたしたちは、焼き場のある南町田までマイクロバスに詰め込まれる。

親戚の人は嫌いだ。お母さんの親戚は秋田の人だからなのか、変な訛り言葉で喋るし、お父さんの親戚は少なく、みんな会ったこともない人ばかりだ。

アサヒが死ななければ、きつと一生会わなかったんじゃないかって不安に思う。それほど、お父さんの側とは疎遠だった。向こうの従兄妹にも、先ほどはじめて顔を合わせた。

お互い歳も近いのに、一言も話さなかったが。

ヒロミさんとカズヤさん、この時はイトコと思い込んでいたが、ハトコのミツヒデさんが固まって睨んでいた。皆、祖父に良く似たキツイ目をしていた。でも、三人はお葬式が始まると優しい目になって、時々涙を流した。あたしは初めて会ったのに、アサヒのことは知っている様子だった。お母さんに丁寧な挨拶をして、木枝玉大
学初等部の子供達の面倒も見ていてくれた。

あたしは、何もしなかった。言われるままに立って、言われるままに座った。何度か会ったことのあるアサヒの友人達と会話をし、親戚だけで行われた小さな食事会でも、「この度は妹、アサヒのために集まってくださってありがとうございました、あの子も天国で喜んでいると思います、私はアサヒと二つ違いの姉でしたが、父や母の深い愛情によって、親友のように仲良く、双子のように固い絆で結ばれやすく育ちました、特にアサヒは成績も優秀で、さら

に文学の才能に秀でていました、そんな妹を私はとても誇らしく、頼もしく思い日日を過ごしてまいりましたが、彼女は突然帰らぬ人となりました、病名は私には分かりませんが、でも彼女は持ち前の明るさで元気に……と、いうのも可笑しな話ですが、元気に闘病生活を送っていたようでした、それが、まさか……あまりに突然のことで、本当に辛く悲しいです、大切な妹を亡くし、私は……わたくしわ……と、しゃがみ込んだ。黒い薔薇のコサアジュが腹部に食い込み痛かった。周りの親戚は、再び泣き出した。お父さんとお母さんの挨拶もあったけど、あたしの時に一番泣き出した。でも、あたしはそこでしゃがんでいる女の子じゃない。そこで喋っているのは偽者だと、思う。だって、口は喋っても心は貝のように黙っていて、黒い真珠は見えないの。盲目になったように……音しか聞こえない。喋っているのは誰？あたし？誰？

その時、ジインズ姿の肥満した女性が二人座敷に入ってきた。

「おくれてごめんなさい」

「ごめんなさい」

お母さんの双子の妹、ヨシエおばさんの娘達、あたしの従姉妹だった。申し訳なさそうに入ってきて、ずっとおばちゃんと、おじちゃんの間座った。泣きはらした目玉で、覆った両手で、丸めた身体で、あたしは全身全てで彼女達を睨みつけた。

薄情モノ……！

死んじやえと、思った。あたしは薔薇のコサアジュのある、膝丈の黒いワンピースに、おさげ。お母さんは真つ黒い着物に、銀のハンドバック。アサヒの通っていた小学校の子供達は紺のブレザー姿。派手で有名な金沢のおじさんの奥さんだって、黒い着物に、からし色の帯と、黒いレエスを頭にピンで。みんな真つ黒なのに、あの田舎者は碧と青。

怒りが噴出した。

「ハルちゃん、ごめんね」

お母さんは落ち窪んだ目をぱちぱちしながら、あたしの頭を撫でた。あたしは、もう受験生になるのだし、そんな年齢ではなかったけれど、されるがままになっていた。

「お父さんの所に、また、行ってきたらどうだい、アナタのためにもなると思う」

「うん、分かった、つうか、少し休んだら？」

「ええ…、いい子ねハルちゃんは、死んだアサちゃんもきつとそういう風に言ってくれたね、お母さん、頼もしいよ」

「……うん、じゃあ行ってきたら」

角張った体型の面影こそはあったけれど、お母さんの手足は浮腫み、アバラが見えるほどにやせ細り、尖った包丁のようにきついイメジになっていた。眼光は鋭いが、良く見ると、黒目はいつもどんよりしていた。体重も、80キロから60キロに激減した。わずかにヶ月ちよつとで、だ。あまりに異常な減り具合なので離婚してから、お母さんは通院し続けた。生活保護は来週から受けられるようになる。

あたしは、離婚前はお父さんに引き取ってもらおうと心に決めていた。お金ばかりかかって、不細工で憔悴し切ったお母さんには、ついてはいけないうと割り切っていた。

それはお母さんも分かっていた、親権は放棄すると決意していた。二人の我が子を、失ってしまおうとしていた。でも、お父さんは違った。

「春野、お母さんを頼むよ」

あたしは、硬直した。お父さんが、あのお父さんが、こんな顔をするなんて…！

「あの人は、お前がなかったら死んでしまうかもしれん、慰謝料を払う義務はないが、お前がお金を取りに来れば当面の生活費ぐらいは渡す、進学に必要な分も、半分は払おう、このマンションも俺が

お母さんの為に買ったものだから、出て行く必要はないよ、お父さんはな、明後日から九州だ。それに、女の子を育てることには自信がないなあ」

お父さんは、不器用にあたしの頬にキスをした。あたしは反射的に払いのけて、怖い顔をしてしまった。そして、しまった、口に手をあてる。

「ちっちゃいときは、お前たちからキスしてきたのになあ、もんっ お父さんシヨック」

おどけて言っ、自分で照れ笑いをした。お父さんとあたしの間には軋轢がある。もともと、こんな風に話し合う仲じゃなかった。あたしは、お互いに嫌っているものと思っていた。ひとたび何かあれば、追い出されてホオムレスか、娼婦になるしかないと決意していた。他人のように考えていた。

お父さんは、あたしを見捨てたりしなかった。

びっくりした。お父さんが、あたしたちを無償の愛で包み込んでいてくれたことに。無償の愛などというものが、この世に存在することに。

横浜の祖父の家に、二週間に一回ぐらい戻って来て、そしてあたしにお金を渡すお父さん。あんなに脅えて、あんなに嫌って、悪口ばかり言っ、他人のように考えてゐた。そんなあたしだけだった。そんな風に娘に思われて、そんな娘にお金を渡して。一体、お父さんの人生ってなんなんだろう。

「無償の愛」に気付いても、あたしは愛してあげられない。

薄情モノはあたし。

あたしは、お父さんにとってたった一人の娘だった。そのことに気付くのは、もっとずっと後のことだったけれど、アサヒが死んでからはそうだったから、かわりはない。

実は、アサヒとあたしは異父姉妹だったのだ。

お母さんは魔性の女だった。何が男をそうさせるのか、デブでクウルなお母さんは非常にモテていた。あたしが生まれた頃の浮気は

日常茶飯事で、何度も離婚騒動になったらしい。そんな折、新しい赤ちゃんがお母さんのお腹に宿った。

「二人も子供が出来ちゃあね、もう、わたしも落ち着こうかな」

お母さんは仕事もやめ、浮気もやめ、よたよた歩くあたしとお腹の子供の面倒を見た。

お父さん方の祖父は、その頃独り身になり、お母さんに八つ当たりした。お母さんもお母さんで、工業高校出の祖父を小ばかにしていい加減なことばかり言っていた。

お祖父ちゃんがある日キレた。

お母さんのお尻から、赤ちゃんを守るためのお水が出た。赤ちゃんは、このお水のなかでふわふわ浮いて、外からの衝撃に耐えている。いわばクッションのようなものだ。それがお母さんから流れ出てしまった。祖父がお母さんをイスで殴ったから、お腹が破裂してしまったんだ。赤ちゃんはもう、外からの衝撃に耐えられない身体になった。

とても弱い弱い、小さな生き物だから、あたしの妹になるはずの赤ちゃんは、死んでしまいかも知れない。暴力をふるった祖父だつて、お母さんにムカついただけで、けして赤ちゃんに死んで欲しかったわけじゃない。

祖父は慌てふためいた。赤ちゃんが死んじゃうと思って、病院に電話した。後生だから、自分はどうなつてもいいからと、救急車でも病院でも泣き喚いて頼み、お母さんに付き添った。

「志津江さん、ごめんね、本当にこんなつもりじゃあなかったんだ、えい！えい！ああ、畜生なんてこつたああ」

担架に運ばれるお母さんに、何度も謝った。お母さんは、その時のことを覚えていなくてこれは祖父から直接聞いた話だ。そしてこの話しをしてくれた後、彼は毒ついた。

「それがあよお、まさかよ、明弘の子供じゃねえってんだもんよ、えい！こんなことがあったたまるかと思った、じいちゃんがああ嫁殴らなかつたら、アサちゃんはずうっと弘明とあの嫁の子供として、

育っちゃったわけよ、べらぼうめえ、やってらんねえよなあ…あ？
やってらんねえと思った」

祖父は二ホンザルを思わせる容貌で、お父さんとは似ていなかった。日焼けした肌に、厳しい目。真つ黒に染められた髪の毛は七三で、いつも饅えた匂いがした。ヤニで黄色くなつた歯はほとんど抜け落ち、何を言っているのか聞き取るのは容易ではなかった。

赤ちゃんを流産しそうになったお母さんは、手術で助かった。赤ちゃんはまだ、生まれてくる準備をしていなかったのに、外に出されて色んな検査を受けた。両手に乗るほどの大きさがなかったという。血液型が、A B型だった。お父さんはO型、お母さんもO型、もちろんあたしもO型だった。祖父達もO型かA型だった。

「志津江、どういうことだ」

「……」

お父さんは怒りをどうにか、抑えた。でも、言葉の端端から怒りと哀しみが滲んでいた。出産をしたばかりのお母さんは、疲れ切っていた。でも、どうしても、お父さんと向かい合わないといけなかった。

まだ、夜明け前だった。祖父は妊婦を殴つた悪い人なので、逮捕されてしまい、病室にはお父さんとお母さん、それにお母さんに抱っこされたあたしがいた。

お母さんは顔面蒼白で、疲労の限界という顔をしていた。背が高く、80キロもある巨体で、病院のベッドを軋ませ、あたしをあやしていた。

「血液型だけじゃない、DNA検査までしたんだぞ…？お前、どうするんだよ」

お父さんは祖父と違い、優しい目をした人で特にこの頃は、ハツとするようなハンサムだったらしい。そのお父さんが、祖父とそっくりな巻き舌で、詰め寄った。

「ごめんなさい、わたしも貴方の子供だと思っていたの」

お母さんはありのままを、正直に言おうと決意していた。お母さ

んはサバサバと、冷徹ともとれる態度でお父さんに言った。

「相手はガイジンか？」

アサヒは、赤ん坊の時から目鼻立ちがハッキリとして、金に近い薄い髪色だった。あたしが物心つく頃には、日本人にいてもおかしくないくらいに茶髪だったし、鼻も上を向いていてけて高くはなかった。物凄い美少女ではあったが。

「わからないわ、わたし、本当に貴方の子供だと…身に覚えがないのよ」

お母さんはこめかみを押さえた。膝に乗って大人しくしていたあたしを見て、お母さんはなお更に絶望した。あたしは、お父さんにそっくりだった。体型こそはずんぐりとしていたけれど、骨格が本当にそっくりだった。

「ごめんなさい、わたし貴方になんて言えばいいのか、これからどうしていいのかもわからないの、ねえ、でも保育室の赤ちゃんを見た？あんなに小さくても、人間なのね、びっくりしたの、びっくりしたら、涙が出た」

「うん」

「わたしの子供だと思うと、辛かったよ」

お父さんは、冷たい、どこまでも冷たい表情で窓を眺めた。

「わたし、赤ちゃんを連れていくわ、貴方には迷惑をかけない、離婚しましょう」

「お前がいらない、人生なんかいらない…！」

後から聞いたあたしが、思わず赤面してしまったような気障なことを言つて、お父さんはお母さんを抱きしめた。

お母さんは、お父さんの二の腕をマニキュアのしっかり塗られた長い爪で押し返した。

妻と母の際で、お母さんは決断を迫られていた。血のつながらない子供を、ましてや愛する妻を寝取った男の子供を、男の人は受け入れない。常識だった。

お母さんは、ダメだよと言おうとした。

でも、お父さんは笑ってこう言ったんだそうだ。

「親爺とお前、俺と春野と生まれた赤ちゃん…みんなで幸せになる
う」

こうして、あたしとアサヒは異父姉妹だというコトに気付かないまま育った。祖父も良く、黙っていたものだ。それとも、アサヒは知っていたのだろうか。

アサヒが死んで、四年経った。

2・砂漠に落ちる月

砂漠に落ちる月

砂漠に落ちる月は七色。今日は二色目、はいねず色だ。明日は納戸色になると、何故かあたしは知っていた。あたしは、いつからココにいるんだろう？

あたしは、誰なの？

つい今しがた、砂漠の中で目覚めたあたしは、それまでの記憶を全て…失っていた。

ただ、心の奥に一人の少女がいる。深層心理の奥深く、彼女は昏昏と眠り、目覚めるその日を待っているようだ。その“アサヒ”という少女の存在があったから、あたしはこの荒涼とした砂漠に立っていられるのだと思う。

自分が誰かわからないし、ここがどこなのかわからない。

とにかく、ここを抜け出ようと思った。冷たい風が吹きすさぶ、七色の月の眼下から。

「ごきげんよう、ハイネ」

見たこともないような美男子があたしの前に現れた。砂嵐で視界が悪かったせいもあるが、目の前の何もない空間に突如出現したようにも見えた。あたしは言葉を失った。

「どうしたの？何故黙ってるの？僕はアルシオンっていうの、たぶん…。ねえ、ハイネは？ハイネ、名前はなんていうの？」

透き通るように白い肌に、漆黒の髪。唇はぷっくりとした林檎色で、まるで白雪姫のような男の子。目は何処までも蒼く、大きい。あたしと同じか、上くらいの歳なのだろうが、このあどけなさは何だ。綺麗で、愛らしい…とても、この世のものとは思えない少年だった。

「あ、あたしは…」

少年 たしか、アルシオン は黒いポンチヨのようなものをまとっていて、それがなお更、彼の肌の白さを際立たせている。顔だけが空中に浮いているような錯覚を得る。

少し不気味に感じながら、何とか名乗ろうとした。言葉に窮す。当たり前だ、あたしは自分の名前を覚えていないんだから。ふと、アルシオンがあたしに“ハイネ”と呼びかけていたことを思い出す。どういうコトだろうか。

「は、ハイネ！ハイネよ、あたし」

「ええ？それ、本当なの？」

アルシオンは目を真ん丸くして、あたしの顔を覗き込んだ。懐疑の眼差しだ。どうやら、ハイネというのは名前には向かない言葉だったらしい。

「可笑しいね。僕はアルシオンなのに、ハイネはハイネなの？ハイネって“どなたか存じ上げないご婦人”って意味でしょう？アルシオンってね、とある地方の古い言葉で“存在できなかった妻”って意味なんだって、おもしろいね」

彼はニコニコと笑って、そう言った。

しまった！「どなたか存じ上げないご婦人」よ、なんて。変な名前を名乗ってしまったものだ。恥ずかしい。

「わ、笑い過ぎ！は、発音、そうだよ、発音が違うのよ、あたしはハイネじゃなくて、ハ・イ・ネ、よ」

照れ隠しに喚きたてる。アルシオンはごめんね、と小首をかしげて愛らしく謝った。

「だって“どなたか存じ上げないご婦人”でしょ？“存在できなかった妻”に、実は知り合いにね“誰にも知られない老婆”って意味の名前の人がいるの、三人の名前を並べただけで、サアガアができたちゃうよ」

サアガアとは、物語とかそういう意味だろう。

「そうだあ、その知り合いに逢わせてあげるよ、彼もきつと、おも

しろがるんじゃないかな、ねえ、いいでしょ、早くいこうよ」

アルシオンはあたしを急かした。あたしは、首を振った。足が疲れて歩けないのだ。先ほど目覚めて二、三步歩いた。それだけで、ねつとりと絡みつく砂の中で、足を踏み出すのがどれほど大変か知らしめられた。

それに、この美貌の少年を、信じきれない。

確かに、疑う余地もないほど美しく、純心無垢な男の子だけれど、なにか心に引つかかるものがあつた。無気味にも見える、白い肌。

「何故？」

「だって、疲れて動きたくないし」

「へ？」

アルシオンは、きょとんとしてからニヘラ、笑った。

「ハイネったら、ケチン坊だなあ、そんなに魔力をセエブしてどうするの？」

「魔力？」

今度は、あたしがきょとんとする番だつた。アルシオンは、しかたないなあというように肩をすくめて、ひよい、あたしをお姫様抱っこした。

男子にお姫様抱っこされるなんて、初めてだつた。

初めてだと、思う。確信がない。

「い、嫌あ！降ろしなさいよ、ちよつと、なにすんのよ」
「行くよ」

フツと、それまで一面に広がっていた砂漠がフイドアウトして、紫色の光がスパクした。恐ろしくなつて、瞳を閉じるとそこに人影が見えた。

白を基調にしたセエラカラアのツウピイス。紺のニイソックスにバックルに凝ったベルトがまかれ、茶色いロウファを履いている。そして、おかっぱ頭。けして可愛いとはいえないものの、愛嬌のある人懐っこい顔立ち。ぼつちやりした身体つきに、アヒルと罵られる大きな口。

あたしだ。

あたしは、誰？

いつから此処にいるのか解らない。生まれたときからいるのかもしれないし、ついさっきまでは、違う場所にいたのかもしれない。心の中にアサヒという少女がいる。

それだけが、確かだ。

ぱつと、クラッシュして、光が飛び込んできた。アルシオンの黒いポンチョに包まれているのに、強烈な光。

次に喧噪。

砂漠の真ん中でお姫様抱っこされて、光が舞って、一瞬で市街の中。そう、これは…

「まち？」

「そう、クモの糸広場、来た事ない…？」

アルシオンが言った。あたしの知っているクモの糸は、大きくてもせいぜい顔の大きさだったはず。足元に、広がったクモの糸はとてつもない大きさだった。

アルシオンにそっと下ろされ足をつく。白い、円筒状の道。クモの糸だ。

夜空を照らす、淡いオレンジの光はそれぞれの屋台や劇場から。太いクモの糸は道路で、その他の空洞にはあたしの知っている太さのクモの糸が、張り巡らされている。

中空に浮いた、クモの糸の巨大ハンモックに、堤燈をぶら下げた屋台とテント……糸は触ると、ふんわりしていて、少し粘っこい。

さあ、安いヨ安いヨ！

とうきび汁のタイムサアビスをはじめよ！

二皿でなんと、赤花びら三枚！

その殆どが食べ物屋で、五軒に一軒の割合で土産屋が軒を連ねている。まるで、お祭りだった。屋台は葉っぱを丸めたものを幾重にも重ねてできていて、あたしは、自分の中に残る不確かな記憶が、いよいよ確かでなくなったのを感じた。

住人達は、青白い肌をしていて、男も女も（男と女の区別は付かないが）あたしの二倍の身長。猫背で、頭が小さく不思議な装飾品と、化粧をしている。青く巨大なその人たちが、クモの糸広場にいる人間の大半を占めていた。

数人、違う人種を見たけれど、すぐに青い巨人の雑踏にまぎれてしまふ。

青い巨人は、ぎょろりとした目で値踏みするようにあたし達を見る。けして敵意のある視線ではないのだが、大きい分だけ威圧感があつて、思わず物怖じしてしまう。

「こわい……」

思わず、アルシオンにしがみ付く。彼は、ニコニコとしてあたしを慰めた。

「“あおじん”を見るのは、初めてなの？可笑しい人…、ハイネのこと、もつと知りたくなっちゃったよ」

「え……？」

カツと、顔が熱くなった。アルシオンの笑顔が、あたしの胸に飛び込んだのを感じた。

うろたえるあたしを追い立てるように、彼は厳かにお辞儀をした。そして、姿勢を戻す前に、ずっとあの大きな青い瞳であたしを盗み見た。

なんでも、しってるよ。

その顔が、語っていた。

「お腹はすいていないんだ、でも、来た事ないなら案内するよ」

「う、うん……」

初恋だなんて。そんなもの、信じてないのに。

「お嬢さん、どう？コレ、新鮮なんだよ？」

「い？」

目の前に突き出されたのは、得体の知れない緑色の塊。首を振っても、屋台のおおじんは試食だからと、スプウンでえぐって、顔の前に持ってくる。

「あの、その…」

戸惑い、あたしはアルシオンに判断を乞う。当然、断ってくれるものかと思ったら、

「どうして食べないの？お腹いっぱいなの？」

と、こうだ。

こんな不気味なもの、食べれるわけないじゃない。

ちょうどそのとき、ぐぐうと、最低なことに腹の虫が鳴った。あたしは真赤になって、慌てて弁解しようとしたが屋台のおおじんに、無理やりスプウンを押し込められた。

「うぐぐ」

「ほらあ、美味しいでしょ？」

口に広がるほのかな酸味と、程よい冷たさ。柑橘類のアイスクリームのようだった。口で、すぐに溶けてなくなる。不思議な食べ物だったけど、とても美味しい。

「これ、何ていうの？」

あたしは思わずそう聞いていた。

「“ユウキ”ですよ、今朝とれたばかりなんです」

「ユウキ？変な名前ね」

「そらあ、生きてる人間の付ける名前ですからね、変な名前でしょうな」

おおじんは、にんまり微笑んだ。あたしは、よく分からないまま頷いた。

「お夕食にいかが？」

「あたし、お金持っていないのよ」

あたしはポケットをとんと叩く。と、ポケットがほのかに光った。「赤い花びら二枚で一食分」

あわててポケットをひっくり返すと、萎れかけたポピイが落ちた。

花びらが僅かに光っていたのだが、外に出すと普通のポパイに戻った。おおじんはにんまりして、

「二枚だよ」

と、言った。あたしは戸惑いながらも花びらを二枚、彼の大きな青白い手に乗せた。ポパイの花びらはあと四枚。何故、砂漠にいたあたしが、ポパイなんて持っていたんだろう？首を傾げるあたしの手には、ずつしりとビニール袋につまった緑の塊が、手渡された。

「こんなに？」

おおじん達は、これほどの量を一食で食べてしまっらしい。袋に振り回されるように、あたしはアルシオンを追った。彼は、小さな男の子のように微笑む。あたしは、彼が振り向くたびに顔が火照るのを感じた。守ってあげたくなるような、それでいて謎めいた、美しい男の子。こんなこ、今まで見たことない。

？あれ？

なんとなく腑に落ちない気がした。

表情にも表れていたらしく、アルシオンも首をかしげる。黒いポンチヨを翻して、それでもあたしを促す。オレンジ色に満たされた、クモの糸広場の中心に、大きな黄色いテントが見えてきた。周りの身長が高いせいで、今まで良く見えなかったが、どうやらテントは朽ちた月桂樹の葉を赤い毛糸で繋ぎ合わせてできているようだ。

中から、聞いたことのあるような、ないような音楽。

テントを通り過ぎて、いくらか歩いた。そこは、白い建物が並ぶ住宅街。やはり、オレンジ色の堤燈をぶるさげてる。思い出したように屋台があるが、先ほどのような活気はない。白い建物は蜘蛛の糸を練り上げて作っているらしく、歪で気味が悪かった。

「ここは……？」

「ルシアに、“誰にも知られない老婆”に、逢いたいですよう？彼はココに住んでいるんだ、可笑しいでしょう？“蜘蛛の糸広場”はおおじんの町なのにサ、物好きだよね」

「ルシア……？」

懐かしい響きだった。もしかしたら、今までのあたしを知っているかもしれない。

アルシオンは白い住宅のある一戸の前で立ち止まって、こう言った。
「ごきげんようルシアア！」
しん、と静まり返っている。

白い住宅には扉はなく、穴が穿つてあるだけだ。穴のすぐ横の堤燈は光を発しておらず、朽ち落ちている。大きな虫の羽が寄り集まってできている堤燈。

その中に、顔のない虫の死骸。巨大なほたるのお尻だった。うつ、吐き気を堪える。

「ルシアア！」

返事はない。白い洞窟は、アルシオンの声をこだまするだけで、人の気配はない。あきらかに、誰もいない。

「むう、困ったね、ハインと逢わせてあげたかったのに……」

肩を落とし、とぼとぼ元来た道を戻る。あたしに、蜘蛛の糸広場を案内してくれる気らしく、あれは白鳥の羽町の伝統工芸の店、あれはチエとカナシミ専門店、あれは蟬の茸店、あれは……と、指さし歩く。

ルシアは明らかに、あそこには棲んでいなかった。アルシオンは諦めたらしい。

不思議な店ばかり。雨水を売る店が一番多い。喉が渴いて、一食分の水を買う。花びら一枚。先ほど買ったユウキと雨水を交互に食べ歩きながら、アルシオンの後に続いて大きな黄色いテントの周りをぐるり。

「ねえ、この大きなテントはなんなの？ さっきからすっぱえ音楽とか、震動とか」

ある程度歩いて、疲れたあたしはとうとう聞いた。アルシオンは、ぎくりとしたようだ。一瞬動きが止まる。

「ここはね、今、劇団“るなぎ”が公演しているんだよ、普段は落語とかばかりやっているんだけどね、月に一度こういうカッコイ

イ劇団がくるんだ」

「へえ、演劇？」

「うん、ダンスとかも入ってるんだって」

「そういえば、この音楽…チャイコフスキィ？くるみ割り人形じゃあない？」

「僕は、音楽にあまり詳しくはないんだ、ねえ、見てみたい？」

「見たい」

あたしは即答した。どうしてだろう？なんだか、うつすらと記憶の中で踊る白い人影が見える。あれは、アサヒ。

薄れていた記憶が、少しずつ鮮明になってくる。“アサちゃん”と、声をかけられて、翼をつけた白いドレスの女の子が前に出る。あたしは斜め後ろから、じっと彼女を見ている。天使のような女の子。

あたしのさらに後ろには、チュチュが並べられていて、それぞれの前に天使を睨みつける女の子達が陣取っている。その敵意は、何故かあたしにも向けられている。大人たちが回りにいる。さっき“アサちゃん”と、呼びかけた太った女の人のだけが、にこにこ微笑んでいるけれど、他の大人たちは唇から血が出るほど噛みしめて、怨めしい顔をしていた。女の子がたくさんのライトの下で片足を上げて、横を向き、手を優雅に持ち上げた。美しい、美しい“アサちゃん”は神神しくて、グロテスク。あの軽やかなステップを見る。あの完璧なピケに感嘆して、あの礼儀正しいレヴェランスに誉れを捧げる。これが、あたしの記憶にあるダンス。無音の記憶。

テントの中は湿っぽく、蒸し暑い。扇に並べられた木のイスに、ふんぞりかえるあおじん達。みな、一様に柄が悪い。あたしの不確かな記憶は、これが演劇の会場であるはずがないと、告げている。

宙を横切るゴミと花びら。大半があおじんだったが、数人身体がひん曲がった白い人達がいた。蝉に似た羽を生やし、あちらこちらを飛んでいる。

中央に据えられた切り株の舞台に、バイオリンに似た楽器を弾くあおじんと、大声で歌う太ったあおじんがいた。太った方は、花や木

の実で着飾っている。オカマみたいだ。

「スベレツエツペ、ツアナイコアアア！パボロワシャアデ、ツエナイコアアア！」

チャイコフスキのくるみ割り人形のような曲が、テンポを落とし、わけのわからない曲になり、時々アラベスクが入って、聞いたことのあるようなないような曲に変貌した。

バイオリンのような楽器には、弦が二十六本も取り付けられていて、様様な音を出す。

「ペペツツイツカア、ツゴイネルアル、アツエ、ディアシャアデ、ツエコリン」

太ったあおじんは悲鳴のような歌声を上げる。体の芯がぼうつとなるような声で、あたしの知らない言葉で。

「るなざの歌姫、流魚だよ“あかじん”の歌だね、コレ」

「ルナ…？」

女性なのだろうか。オカマにしか見えないが。

いや、あおじん達は皆大きくゴツイ人種らしいから、太っているだけでも女性らしいのかも知れない。

「となりのバイオリフはやんちゃ坊主の吾逗、僕の知り合い」

「アズ？ってゆうか、子供なの？」

ゆうに三メートルはありそうだ。

「まだ二歳だよ。ああ、僕達“きじん”に例えると、一五歳くらいだから、体型は大人だね」

「うつそお、二歳？ってゆうか、ふん、あたし達って“きじん”なんだ」

頭に奇人とうかべる。

「…ぴったりだわ」

肌の色で人種が決まっているんだ。青白い肌はあおじん、黄色い肌はきじん、じゃああの蝉の羽のやけに細っこいのは、ちよつと透明だけど、しろじんだらう。歌姫ルナの歌っている曲があかじんのものだというけど、じゃあ肌は真赤なのかな。

ルナは一生懸命歌うけれど、観客は足を投げ出し、つまらなそうに鼻糞をほじっている。これじゃあ、ルナが可哀想だ。時折、花びらが投げられる。

そのように圧倒されていると、アルシオンが肩を抱いてくれた。

「怖いのか？ハイネ」

「ううん、てゆうか、態度悪くないかい？」

眉間に皺の神様。

「しかたないよ、演劇なんて最下層の見ものだもん、見たいって言ったの、ハイネでしょう？どうする？出る？」

演劇が、最下層の見もの？少し、意外。あたしは目を細くすばめて、会場内を見回した。時折、あおじんと目が合う。

「アズくと、知り合いつて？」

「うん、彼の親の最期を看取ったんだ、彼も僕には懐いているようにね」

ころころと、愛らしく笑う。本当に、男の子なんだろうかと思うほど、華やかなアルシオン。どうやら、アズの親と旧知の仲らしい。

「あおじんの寿命はせいぜい六、七年だから、僕は吾逗の祖父の代から知ってるよ」

「アルシオン、何歳？」

「はたち」

「……商売できるわよ」

半分本気だった。それにしても、二十歳とは……。記憶があいまいなため、自分の年齢がどのくらいかはわからない。しかし、二十歳ではないだろう。この美しい少年は、少年ではなく青年なのだ。すごいベビイフェイス。

同じくらいだろうと踏んでいたのに。

「あたし、歌手になりたかったんだ」

本当だった。あたしはしゃがみこみ、両手をすり合わせた。少しずつ、記憶が戻ってくる。あたしは、この人間ではない。違う場所にいた。そこで、歌手になりたいと思っていたんだ。きっとそう。

違うかな？

「ねえねえ、アズくんに話とか聞けるかなあ？上手くいけばルナさん？にも会えたりする？ちよつとさあ、聞いてみたい」

「そうなの？」

ダンスが始まった。期待していたものとは違って、激しく腰を振り、足を高く上げるアメリカンな踊りだった。踊っているあおじんは少し小柄で、頭に葉っぱをつけている。

「アン、アン、ヘエイヘエイ！ア、アン、ヘエイヘエイ！」

そこでバイオリフ（？）と、歌手が交代した。しろじんと、派手な化粧をしたあおじんだった。アズとルナは楽屋に引込む。五人の踊り子は、フラメンコと日本舞踊が混じったような踊りをはじめた。花びらは舞わない。客が半分引き上げる。

どんなに柄が悪くても、客を引き付けていたのはルナだったのだ。

歌姫というのも頷ける。いよいよ、あたしの中で埋もれていた好奇心が頭をもたげ始めた。

「行こうよ！」

「え？うん」

気の進まない様子のアルシオンを引っ張って、楽屋へのテント幕をくぐる。あたしは、歌手になりたかったんだ。テレビに出るようなすごい有名人になりたかった。…どうして、ならなかったんだろう？生きているうちに。

あたしは、自分が死んでいるというコトを思い出した。此処は死後の世界。

楽屋に入ったあたし達を迎えたのは、とても穏やかではない一声だった。

「よくもおめおめ顔が出せたもんだな、アルツェウオン」

ひらり、巨大な身体で実に輕輕宙を舞って、アズが手に持った、銀

に輝く何かを、アルシオンのこめかみにこり、押し当てた。それがピストルだと知って、あたしは「ひいい」硬直する。

「失礼、今はアルシオンっていうんだよ吾逗」

ピストルを突きつけられても、飄飄と言つてのくアルシオン。どうやら、あたしが想像していたのとは違う友情だったらしい。アズの敵意はあたしにも向いている。

「ハッ、きじん気取りの名前かヨオ？女まで作つて」

あたしは、ただ脅える。すぐそばに、歌姫ルナも控えている。顔は険しい。

とても「歌手つてどんなつすかあ？」なんて、間抜けな質問できる状況じゃあない。

「やめたほうがいいよ、吾逗、僕に勝てると思うの？」

「死ぬ気ならなあ、相打ちだ」

アズが不適に笑う。歌姫の顔がみるみる青ざめて、涙を流した。

「？」

彼女は首を振つて、優しくアズの手を包み込んだ。拳銃が下げられて、あたしは、はあ、安堵のため息をついた。

「流魚、とめんじゃねえよ！コイツは、俺とお前の敵だろうが、あ？」

アズはまだ、敵意を剥き出しにしている。ルナは首を左右に振つて、涙を流しながらアルシオンに微笑みかける。脂肪をかき分けて、口が左右いっぱいにかれる。

アルシオンの機嫌を取っているようだが、彼女は何故か言葉を発さない。

「流魚ちゃんはお利口だよ、相打ち？そんなの奇跡でしょ？」

醜くゆがめられるアルシオンの容貌。あたしは、思わず息を呑む。

アズとルナは恐れおののき、あとずさる。これでは、アルシオンが悪だ。

「ここに居るのはハイネ、クモの糸広場には始めて来たんだ、ねえ？ハイネ」

「うん、そう」

いきなり、ふるなよ。

「太っちょ流魚ちゃんみたいなの、歌手になりたかったらいいよ、ちよっと、お話したいのだから、僕はこうなるって……」

ちよんと、アズの手に乗っているピストルに触れた。

「分かっていたんだけど」

ぼう　！

「……！」

突然、ピストルが消えた。煙のように。

その手を顔の前にもつていき、バイバイするみたいに手をにぎにぎした。あたしから、表情は見えないけれど、アズとルナは顔を伏せた。

「ハインを“誰にも知られない老婆”に逢わせたいと思っていただけけれど、彼、不在だったんだ」

ルシアのことだ。彼に会わなければならぬ気がする。

アズとルナは、顔を見合わせた。どうやら、彼らもルシアを知っているらしい。

「あの方は、羊の毛の森に帰ってるぜ？七色の月の砂漠に、異邦人が現れたらしい……、大事件さ」

七色の月の砂漠……それは、あたしが先ほど目覚めた砂漠じゃないの？

「へえ、凄いな」

大きな青い目を、さらに大きく見開くアルシオン。

「二年ぶりに、二時間前に……！」

「そうだが、あの方は新しい異邦人が城を代代継ぐと宣言してただろ？そして、自分の代はあおじん七人死ぬまで続くとも、予言した」

「なのに、二時間前に七色の月の砂漠に、新しい異邦人が現れてしまった！って、わけだね、うふふ、面白いことするねえ、ルシアも」
アルシオンは、顔を歪めて笑った。白雪姫は醜いアヒルの子。それでも、あたしは彼が好きだった。

「ねえ、一体どういふことなの？」

あたしは、彼の黒いポンチョに乗った美貌の顔に、尋ねる。でも、美しすぎてすぐに目をそむける。いつも、そうしていたように。好きな人を、見ない。

「だから、僕の知り合いの“誰にも知られない老婆”っていうのはルシア王のことだったんだよ？ごめんね、内緒で逢わせてあげたかったのだけど…」

「ルシア王、って…？」

恐る恐る、聞いてみる。

アルシオンはきよんとする。アズも顔をしかめ、ルナも口を両手で抑える。アルシオンの変わりに応えたのは、アズだった。

「あんた、ルシア王を知らねえのか？」

「知らないよ？」

「たつまげたあ、こいつあ、驚いた！この国で、しかもきじんのあんたが、あの方を知らないなんて！違う国から来たのか？」

問われ、答えに窮する。あたしは、あたしの記憶は未だ確かじゃない。さっきは自分が死んでいた気がしていたけど、そんなはずないじゃあ、何が真実なの？陳情しても、信じてもらえないかもしれない。記憶喪失ではない気がするのに、頭を殴られたみたいに意識がふわふわする。

自分が誰かもわからずに、今の状況もわからずに、ここがどこかも分からずに、なのに自分は自分だという根拠のないものが、あたしの機軸となっている。

「…」

あたしが黙っていると、アルシオンがにたり、嗤った。

何でも知っているよ。また、あの青い目が言う。

「あたしは！あたしは、その…、違う国から来たんじゃないのよ、そうじゃなくって、あのね…、あたしは」

脆弱な意志を引っ張り出して、明瞭な常識にかけてみる。

あたしは、意を決して告白した。

「あたし、アルシオンに会うまでの記憶がないの……！ハイネって名前も、嘘なの」

顔を両手でふさいで、しゃがみこむ。

感極まったわけじゃない。膝が、がくがくして立っていられなくなつたし、状況を甘受しきれない自分には、吹きだしてしまいそうなセリフだったからだ。

予想していた反応は、二つ。

冗談と思って、笑うか、あまりのことに驚愕して、口を聞けなくなるか。

「うつそお、そうなの？ハイネ、びっくりしちゃったじゃないか」

……。なんか、すつげえ軽いことみたいに聴こえる。

「へえ、記憶喪失ってわけだ」

こちらも含み笑いしてる。あたしは指の間から、三人をのぞき見るルナが、イスにかけて編み上げた白髪をほどき始めたのが見えた。大して驚いた様子もない。

「じゃあさ、土魯のところに行ったら？あのじいさん、記憶喪失とかすぐに治してくれるぜ？なんたつて、きじんとハアフだからね」

「ドロおじいさん？なんか、魔法使いみたいなことできるのね」

今度こそ、二人は驚き、慌てふためいた。

「ええ！何言ってるの、ハイネ、まさかそんなことまで忘れてしまったの？」

「きじんとハアフだぜ？魔法使いじゃん」

「は？え？」

「きじんは、魔法使いなんだよハイネ、生まれながらの」

「じゃあ、じゃあ、あたし……？」

「そう、ハイネも、だぜ」

「くあ……」

あたしは、頭がおかしくなりそうだった。てゆうか、なんかもう、顔はおもしろいことになってるけど。

「あたしが、魔法使い……！」

あたしは、ルナがのぞいてる鏡に映った、なんの変哲もないセエラア服の自分を穴があくほど見つめた。あたしだ。それだけだった。

「しんっじらんない」

「じゃあ、ルシアのこと知らなくても、仕方ないよね」

窓枠のように黒い髪をかきあげて、呆れ顔。少し、胸がずきんとした。

「簡単に説明するよ。ルシアは、二年前に突然“七色の月の砂漠”に生まれつきじんで、もちろん、普通のきじんと同じように魔法使いだった、それも、半端ない魔力を秘めた、物凄い魔法使いだったんだ、彼は“羊の毛の森”に“ルシアの城”を築いた、それも、たった一晩！ばくみたいな気まぐれなきじん達は傍観していたけれど、その他のきじんや、強力な先導者を欲していたあかじんは彼に憧れ、次次に仲間になっていったんだよ、でも、それを良しとしなかったのがペロペロ王という太陽の王様だった、ペロペロ王はルシアの領地に太陽を昇らせないようにした、このクモの糸広場は一日中夜のままなのだけれど、それは、この街が“羊の毛の森”に近しいから被害を受けちゃってるってわけだ、ねえ？難しいけど、ずっと夜のところと、ずっと昼のところがスパアンと、別れているってこと、それでね、ルシアの味方からも夜ばかりじゃ嫌だって人が沢山でたんだけど、なにせ彼は凄まじく強いし、お城は“羊の毛の森”と迷路みたいな“朝日の鎮守森”に囲まれているしで、手も足もでない、でも、さすがに王様だけあって、ルシアは弱者達にも譲歩した「王になるべき御人が、あおじん七代分未来に生まれ、わたくしの圧政を退けて天下を極めましょう、その時、我が親愛なるペロペロは御人を許し好いて、太陽の光を傾けてくれましょう」って、高々と宣言した、みんな、ルシアが言うのだから本当だろうと思った、二十年後か、遅くとも三十年後には太陽の光が射すと信じて、彼の支配を甘んじて受け入れた…、ってまあ、こういうことになってるけどね、歴史上は」

ぺらぺらと喋られても、頭が追いつかない。とにかくこの国には、

ルシアとペロペロという二人の王様がいて、ここが一日中夜のままの街だということだけが理解できた。

ルシアは王様なのに、どうしてクモの糸広場になんて住んでいたんだろう？とか、そんなこと疑問にも思わなかった。ただ、どうも胡散臭い地名に鼻をヒクヒクさせていた。

「で、元の話に戻るけれど、二十年後に生まれるはずの異邦人……つまり、次王の御人が二年後の今日現れちゃったらしいんだ」

「じゃあ、ルシア王は王様を交代しなくちゃいけないじゃない？」

「そう、そういうことだよ、ハイネ」

につこり。無邪気な笑顔に戻る。あたしは、それを見て安心する。

「だから、大騒ぎ、きじんのお人柄かねえ……、予想外のことが起きると、とたん我を忘れっちまう、るなざのオウナアもきじんだからか、異邦人の事件でピリピリしちまって、今日の公演は最悪だね」アズが吐き捨てる。その彼の長く太い腕を押しつけて、白髪を垂らしたルナが、首を振った。大きな瞳でアズを見上げる。諫めているようだ。

おかしい。歌姫はまるで、言葉をしゃべれないかのように振舞う。

「ルナさんはその、声が……？」

ひそひそ、隣のアルシオンに尋ねると、彼はアツサリ頷いて。

「そうだよ、喋れない」

あたし以上の小声で返す。

「でも、さつき歌ってた」

「うん、喋れないけれど歌うことはできるんだ、可哀想な女の子さ」

「どおいうことなのオ？」

「魔法だよ、とあるきじんが、彼女の声帯に魔法をかけたんだ、おかげで、普通のあおじんには発声不可能なあかじんの言葉や、聞いたこともない様な音程が出せる……その代償に、彼女は歌う以外の声を奪われてしまったんだ、悲鳴も上げられないよ」

「そんなのって、酷いわ」

あたしは沸沸とわく怒りを堪え、低い声で言った。

すると、アルシオンも低い声で、

「思惑と過去は、誰にでもある、その善悪を判断するのは本人だけだ、君が酷いなんて思っても、それは僕の存在以上に無意味なことじゃない？」

と、言った。

「ねえ、流魚？」

突然みんなに聞こえる様な大声を出したから、あたしはアルシオンが何かあたしの悪口を言うのかと思って、焦った。何故かそう思った。

「え、ちょ、ちょっと！」

根拠のない杞憂だった。

「世間話をしにきたんじゃないんだ、ルナみたいな歌手になりたいハインを連れてきた、だから用件済ませようじゃないか」

アルシオンがにやつとした。

ルナが真っ青になって、首を振りながらアルシオンに寄っていく。
アズは、どこに隠し持っていたのか、また、ピストルを取り出した。
「てめえはよお、やつぱさういう男だよなあ？」

一体、どういうことだろう。

「速く逃げな、ハイン、歌うこと以外できない身体になっちゃうぜ？」

「あつ」

やっと、アルシオンが何をしようとしているのか、思いついた。突如向けられた男の敵意に、あたしは戸惑う以外のすべを知らない。

ルナはアルシオンを無言で叱りつけ、アズはあたしを庇うように立ち、アルシオンを威嚇する。

彼は、白雪姫のように真赤な唇を曲げて、虚空を睨んでいた。

「なんで？なんでいきなり、そおいうことになるワケ？」

あたしは、アルシオンが冗談を言っているんだと、信じたかった。

「いやいや、面白いんじゃないかと思ったただけなんだ、きじんの歌姫」

「下衆野郎、読めなさ過ぎるんだよ、おめえは」

「読めるだろ？ ぼくは砂漠で女の子を拾った、彼女の名前はハイネ、面白そうだからルシアに逢わせようとした、彼は城にいるけれど、例の事件で逢いにいけそうにない……」

「で？ 面白くなかったから、ハイネに流魚がかかったのと同じ、禁断の魔法をかけちまおうって、思いついた？ 頭おかしいって」
「よくできました」

空気が痛くなってきた。あたしは、立ちすくむばかりで何もできない。アルシオンの性格が、わかってきた。彼は“面白いこと”だけを求めているんだ。敵も味方も、彼の頭には何も無いんだ。彼が、本気だろうと冗談だろうと、こんな人と一緒にいては、駄目だ。

アルシオンのことが好きなのに、一緒にいては、いつ裏切られるとも知れない。

「別に、アズの両親みたく殺すわけじゃないもの、ルナちゃんもアズも、そんな大袈裟しないでよね」
アズの両親を、殺した？

いじけて、小首をかしげる。しかし、アルシオンの背後では紫色の光というか、空気というか渦を巻いている。魔力が高ぶっている。直感した。

「いいじゃないの、ねえ、ハイネ、ぼくに歌声を聞かせてよ」
この人は、冗談で本当にそういうコトをする。

「いやよ、ごめんだわ」
あたしは、あとずさる。そのとき、両手の平が熱くなるのを感じた。吃驚して手の平をよくよくみると、きらきらと何かが輝いていた。白い光。

魔法の光。

かつ、頭が真っ白になった。両手を突き出し、アルシオンに突進する。

「ッワイト・シーブドッグ」

叫んだ瞬間、嵐のように風が吹き荒れ、両手がコレまで以上に熱くなった。

「ぎゃっ」

どんっ

あたしが放った掌態は、アルシオンを簡単に吹き飛ばした。彼は楽屋の戸を打ち破って、地面に伸びてしまった。

あたしの両手は、白い炎のようなものに覆われ、キラキラと輝いていた。これが、きじんの、魔法の力…！

ルナもアズも立ちすくんでいる。あたしは、肩で息をしながら、何とか落ち着こうとしていた。光る手と、仰向けに倒れたままのアルシオンを見比べる。

喋ることのできない歌姫の、ふかふかとした両手が、あたしの肩を抱く。温かくて、優しい、青い大きな両手。指が四本しかないのに気づいた。

「あんた、逃げた方がいいぜ？」

アズが、低い声で言った。あたしは、どうしてだろう…化け物を見るような目つきで、アズを見上げた。彼も、嫌な虫を見るような目で、あたしを睨み返した。

「どうして？」

「どうしてって…、そっか、あんた記憶喪失だったな？こいつ、この男、アルツェウオンはルシア王に続く強力なきじん　本当は、きじんじゃなかったんだがな、そういう男をのしちまったんだ、仕返しが、怖くないのか？」

「仕返し？」

「子供っぽいからなあ、コイツ、絶対仕返ししてくるよ」

あたしは、あどさった。そうかもしれない。アルシオンはそういう人かもしれない。

「何処に、逃げたら良いの…、あたし、自分が誰かもわかんないのよ？」

泣きそうになる。

その時、大きな青い手があたしの両手を引っ張った。右にふかふかした手、左にゴツゴツした手、ルナとアズがそれぞれを掴んでいたのだ。彼らも一瞬間を見合わせる。ルナが、今までの優しい聖母のような容貌を崩し、小悪魔のように微笑んだ。アズも、ニヒルな笑みを口端に浮かべて、アルシオンを睨みながら言う。

「あんたを逃がすのは俺達だ、でも、選ぶのはあんただ」
「どうして、そこまでしてくれんの？」

「アルツェウオンは、あおじんの天敵だからさ、あんたにやスゲエ魔力がある、き　　っと、この男を倒してくれる」

「そんなこと、出来る筈ないじゃん！あたしは、アルシオンに何の恨みもないのよ？魔法だって、ただの偶然なのに…！」

必死に泣くまいと歯を食いしばる。アルシオンは、死んだように動かない。

「記憶を取り戻してあげる」

「え？」

「あんたが誰かを教えてくれる魔法使いの所へ、連れて行くよ、そうしたら、魔法も怨みも思い出せるさ」

アズは確信しているようだった。あたしが、自分の親の仇を討つと本気で。ルナもルナで、その通りだとばかりに微笑む。あたしは、二人に嫌悪感を抱いた。

「選ぶのは、ハイネだ」

「あたしは“アサヒ”かもしれない…？」

一枚の洋紙を前にして、白鳥の羽ペンを遊びながら、あたしは苦悩していた。ハロウインのお化けのような頭巾を被った、巨大な動物がにやあと、鳴いた。ライオンのようだが、背中にカメの甲羅のようなものが付いている。得体の知れない動物だ。

クモの糸広場を後にして、一日が経った。ずっと、夜のままであ

る。

食べ物は、ピンクやグリーンのアイスクリームみたいなものばかりで、料理名も“カナシミ”とか“ネタミ”とか“ユメ”とか、変だった。そういえば、ライオンでカメな得体の知れない動物は、三体いて、それぞれマチモチ、ルリウミ、ヘベルツという名前で、水以外の一切を摂らなかった。アズとルナとあたしを運んでくれる、気性の穏やかな動物だ。あたしは、ヘベルツに乗って移動する。オスカメスかはわからない。

「書けたか？」

「うん、一応ね」

銀のカップに紫色の飲み物を淹れて、アズがあたしの洋紙をのぞき見る。

場所

教室、ステエジ、病室、畳の部屋、イスのある部屋、ベットの
部屋。

人

お母さん、お父さん、友達？友達の親？先生、大人。

自分の状態

死んでいる。

自分

学生、セエラア服、十三から十八歳くらい？女、アサヒ。

「これだけ？」

アズが首をかしげる。これは、あたしがアルシオンに出会う前の、自分に関する記憶を書き出したもので、なんでもいいから書いてみた。ほんの少しの記憶でも、こうやって書き出してみると、自分を
取り戻せるような気がする。

ただ、引つかかるのは“アサヒ”だ。名前なのだろうけど、一体自分とどういう関係だったのかさっぱり思い出せないんだ。もしか

したら、あたし自身が“アサヒ”だったんじゃないかと思ってみたが、しつくりこない。

靄のかかった僅かな思い出の中で“アサヒ”という名前は、何か恐ろしい呪文だった気がするし、何かの拍子に思い出す“アサちゃん”という少女は、禍禍しく呪われたように美しかった。顔は良く、わからないけれど。

「まあ、いいさ、土魯があんたの記憶を取り戻してくれる」

「こんな砂漠生活、三日ももたないわ」

「弱音吐くなよ、しかたないだろ、クモの糸広場からきつちり三日分はなれたところに、土魯の家はあるんだから、そもそもあんたが魔法を使えば、こんな辛い思いしなくて済んだんだよ」

魔法は、あれから一回も使っていない。というよりも、出そうと思つてでるものではないらしい。出来損ないのきじんなのだ。あたしは、アズの軽口にも取り合わず、ぼうつと月を見上げた。夜は一日中続いている。

ペロペロ王の太陽を、見てみたい。明るい朝陽を拝みたい。

今、あたし達は砂漠を縦断している。太陽が昇らないし、時計の類もないので（似たようなものはあったけど、デタラメだった）正確な時間は解らないが、食事と食事の合間にこうして数分岩ノ下でくつろぐ。他の時間は全て移動。アズによると、これで一日分移動したことになるらしいが、未だに睡眠はとっていない。

「あたしは、誰なの？」

悲嘆に暮れる。そもそも此処は、あたしの居るべき世界じゃない。此処は、この場所は、あたしが本来生きていける場所じゃあない。コレだけは確信するわ。

環境に自分を合わせるという考え方は、間違っている。満足して歩いていけない人生なんて、世界なんて、くたばっちまえ。

眉根がよる。

「飲むか？」

紫色の飲み物は、うつすらと湯気を立ち上らせる。香ばしい匂い

が、鼻腔をくすぐる。

「……」

反射的に受取った、不気味なホットドリンクは苦くて、温かかった。その静かな水面にあたしの顔が映る。ぷつくらとしたさくらんぼ色の唇に、つぶらな瞳。赤味の強い黒髪が、黄色い肌にかかっている。クモの糸広場に来た頃は、愛嬌のある顔立ちだったはずが、いつのまにか冷たい雰囲気になっている。

水面が、一瞬歪む。

あたしの顔も歪む。

刹那、そこにアサヒが現れた！

あたしのいたその場所に、大粒の宝石のような瞳を潤ませ現れたのだ。理知的な輪郭、鋭利な鼻筋、あどけなさで美しさの融合した芸術的なバランス。黒曜石のようなその瞳は、長く柔らかな睫毛に縁取られている。その一本一本が、確実に上を向き、濡れたような艶かしさをもった、豊かな髪の毛に触れそうになっている。少し太い眉は、意志の強さを感じさせ、めくれ上がった唇から覗く、真白くて可愛らしい二本の前歯はリスを連想させる。頬は見事な桜色で、黒子一つない陶磁器の様な肌を明るく照らしている。

十二、三歳のその少女は、銀のコップを目をパチクリさせながら覗き込んでいた。と、耳の脇から長い長い黒髪がさりりと垂れる。コップの中に入ってしまった。

「ハ！」

有り得ない、有り得ない、有り得ない！目を見開いた美しい少女はコップを取り落とし、紫色の飲み物を砂漠の砂にぶちまける。

あたしは無心で自分の顔や髪の毛を確かめた。

シヨオトボブの茶髪に、横に育った丸顔。発達しきった胸は、もう大人のものだ。

だが今、水面の揺らぎに見えた姿は、長い黒髪を垂らしたではないか！あの一瞬、あたしは湯に浸かって重くなったロングヘアを感じたし、その黒髪もしっかり見た。

あれは、アサヒだった。

では、あたしはアサヒなのだ。今こうして、自分だと思っている不細工な女の姿は、きつと誰かを模した偽りの姿なのだ。有り得る魔法も使える世の中だもん。

あたしは、記憶喪失になって、自分を忘れてしまった。だから、記憶に残った独りの人間に魔法で変身したのだ。

「おいおい、どうしたんだハイネ？」

地面に転がったコップを拾って、微笑みかけるアズ。その向こうに、同じく吃驚した様子のルナが首を傾げて立っている。

あたしは、肩の震えを抑えきれずに、両腕で身体を抱く。まるで、自分を守るように。

あたしの記憶に一番残っているのは“アサヒ”だったけれど、目覚めた直後に、一番に思い出した人物がいるはずだ。“ハイネ”がいるはずだ。

あたしは、自分を抱え込む。涙が出てきた。この姿は偽りだった。頑なに否定してきた、アサヒが自分であるというその現実に、打ちひしがれて……。

ハイネと名乗るその前に、思い出したその人物は

！

「お姉ちゃん……！」

「ちよつと、xxxくん……？」

「xxxと、同じ匂いがする」

言ったが最後、xxxくんの両腕が視界いっぱいに広がって、一瞬の無重力を感じた。

彼は、あたしに顔をうずめるようにして、あたしを抱きかかえた。ただでさえクラクラして、夢見心地のあたしだったのに、そんなことされて、頭は真っ白になった。二人の息遣いだけが廊下に響く。彼があたしに、彼女を求めているのはわかった。それでも、体が熱

くなつて、慰めの言葉でもかけてあげればいいのに、ただ小刻みに震えるだけだった。

こんなとき、抱きしめ返してあげられればいいのに。

言葉も出なくて、頭がぐるぐるしだした。ようやく、渴いた口を開けたときにはもう、数十秒間抱きかかえられた後だった。

「うわ、あ、あのちよつと、ちよつ」

「……ごめんね、×××さん」

浮いていたかかどが、そつと冷たい床に触れる。春風のように、ふわりとあたしの栗色の髪の毛をさらつて、彼ははなれた。湿気の多い午後だというのに、首に巻かれていた彼の細い左腕はさらさらしていて触れ合うのが気持ちよかった。でも、すぐく男臭くて女所帯のあたしには耐えられないものがあつた。

男臭さに咽ていると、あのニヤという笑顔をして、

「×××に嫉妬されちまうかな」

で、飘飘と嘯く。白いズックに割りと大きいサイズの両足をねじ込んで、おじやましましたと、振り返りもせず玄関を出て行った。彼は、少年と男の間の年齢なんだナアと、こんな時思う。

それが、彼を見た最後。この世で、彼に会つた最後だった。

「！」

意識が覚醒する。冷たい甲羅に身体を密着させて眠っていたようだ。四肢の先まですつかり冷え切っていた。

すぐ横にルリウミに揺られながら、ヘベルツの綱を引いていてくれるルナ。右前方にはマチモチとアズの陰。絶えず吹く砂吹雪に、思わず見失いそうになる。

眠っているあたしを起こさないでいてくれたんだ。

ルナとアズの優しさに感嘆する。前傾姿勢になつて、巧みにルリウミ、ヘベルツ二体を操作するルナ。そのままでもいるのも悪いので、

声をかけようと身を起こした。

その時、ルナが自分の胸元を見て、微笑んだ。

いや、胸元ではなくて、その視線の先にある自らの腹部に向かって、微笑んだのだ。そういえば、肥満した身体を何とか浮かせて、冷たい甲羅に押し付けられないように腹部を守っている。アズのように、うつ伏せにしがみ付いたりしない。

「ルナさん？」

あら、起きたの、とでもいうように、こちらを振り向き微笑む。ヘルツの綱を、渡してくれた。あの表情を、あたしは知っている。

「妊娠してるの？」

女の勘、というやつだ。案の定、彼女は躊躇いなく頷いた。

「ほんとにいい？ 怖いじゃん、おめでとう！」

あたしは、無邪気に喜んだ。ルナも、これまで見たこともない様な愛らしい笑みを返してくれた。はにかみながら、嬉しそうに微笑んで、お腹をさする。

「ねえねえ、赤ちゃんのお父さんって誰なの？ もしかしてえ？」

ちらつと、アズに視線をやる。青い肌は、さすがに赤くはならなかったが、彼女は綱をもっていない方の手で頬を覆い、上唇を下唇で隠して、押さえ切れない喜びを表す。

「キャー！ やっぱりそうなのねえ？」

きよろきよろとした瞳が、アズとあたしを交互に行き来。からかうのはやめて、とばかりしかめ面を試みせるが、すぐに相好が崩れて、なんと女の子らしい顔になる。

「アズくんって二歳なんでしょ？ ルナさんは何歳なの？」

指が三本突き立てられた。

「わお！ 年上女房？ あたしのお父さんとお母さんも……年上……女房？ だった気がした、かな？ あんまりハッキリしないわ」

コツコツと、頭を叩く。此処に来て四日が過ぎた。記憶は未だにハッキリせず、昨日辺りにたどり着くはずだった土魯の家にはまだ、めぐり逢えていない。アズによると、あたしとルナが遅いせいなの

だそうだ。

「ん？あたし？」

ルナがあたしを指さす。年齢を、聞いているのだろう。だが、生憎年齢に関する記憶が蘇っていない。十三から十八歳程度の見た目なのだが“アサヒ”はせいぜい十二、三歳だ。お姉ちゃんの姿は、特徴がありすぎて年齢不詳だ。

わからないと、ジェスチャアした。

少し、がっかりした後、あたしを気遣うように背を叩くルナ。

「おい！土魯の家、“七色の月の沈む丘”が見えてきた、すぐ其処だ！」

少し舞い戻って来て、アズが呼ぶ。あたしとルナは、顔を見合わせお互いにやにやしなながら、それぞれの車を蹴り上げた。ルリウミもヘベルツもにやあと悲鳴を上げて、駆け出した。

「ずいぶん、辛気臭いところ住んでんじゃないの」

壁にびつしりと並ぶホルマリン漬の、不可解な生物達。誇りを被った分厚い洋書、骨組みだけが残っているカラクリ人形。薄暗く、今だ全貌を把握しきれない部屋の、中心と思われる箇所には大きな壺。砂漠のと真ん中に聳え立つ、不気味な砂山、その急斜面に突き出た、タイル張りのトンネルを通ると、悪魔の巣窟のような場所に出た。地面は湿っていて、とても砂漠とは思えない。鉱物や植物もあたりに散らばっている。何より異様なのは、壁の一角に山積みになされている人形達。それぞれ小奇麗な格好をさせられているが、球関節の人形は、あたしの知っているお人形などとは程遠く、あおじんやしるじんやきじんの形を、実に精密に再現していた。

お決まりの、得体の知れないあぶくを吹く装置やら、干からびた虫の死骸なんかも吊るされていて、恐ろしいことこの上ない。いつだって夜のはずのこの地域なのに、電気らしいものも見当たらない。

不思議と、カビとか埃の匂いはしなかった。

「土魯じいさあん！」

アズが壁をドン、叩く。サア　と、砂が舞い落ちる。

あたしはそこで、巨大なコオムを見つけた。あたしの身長ほどもある、でっかい櫛。プラスチック製なんだろう、半透明の赤色で、星の模様がついている。

なんとなく、手にとってみる。意外と軽い。髪の毛を梳かす部分が、何故かガラガラと、この暗がりの中で光を放っていた。ただのプラスチックではないらしい。

「ちよつと、かわいいかなあ……？」

我ながら変な感性だが、あたしは巨大コオムを気に入った。

「じいさん！」

イラついたアズが、真ん中の壺を蹴っ飛ばす。

「ほっほほい、五月蠅いのう、そんなに呼ばんでも今行くわい」

陽気な声がしたと思ったら、あおじんにしては小柄な人影が現れた。

「へえい、流魚ちゃんじゃあないか、よう来たのう」

軽く会釈するルナ。完全に無視されたアズは、首から上をどす黒く染めてその老人を睨んだ。

「この人が、魔法使いのドロおじいさん？」

バツタのような頭部に、捻じ曲がった腹。手足は妙に細くて、節がボオルのようにがちんとしてる。あおじんときじんのハアフと聞いていたはずだが、正体不明のエイリアンのようだ。なるほど、肌の色は青と黄色の間の緑だけど。

「むむ、見慣れないお嬢さんじゃのう、いかにも、わすが土魯じや」

腰の辺りを長く伸びた爪で引っ掻きながら、よく聞き取れない声で鳴く様に名乗った。殆ど機会音といっていい、普通のきじんには出せない声だ。

「あの、あたしは……」

アサヒと、名乗るのは気が引けた。

「ハイネ」

「なんじゃと？」

とたん、バツタ星人みたいなドロが無数にある目をぎらり、光らせた。

「ううむ、どこかで聞いた、その響きは…、ううむ、………ああ！確か、どなたか存じ上げないご夫人て意味だったかな」

その後もしばらく黙考する。ノリは良いのだが、テンポが掴めない。

「ハイネはね、アルツェウオンが連れてきたきじんなんだけど、記憶がないらしい」

「ほほう、そいつあ…」

ドロは、音もなく近付いてきた。がに股で、てくてくと。

あたしは、得体の知れない昆虫に近付かれている感じがして、一歩あらずさった。

「難儀ですねえ、ハイネさん？」

「うんそおな…あ、いえ、ハイ！そうなんです、自分に関する記憶ってゆうか、今まで何処で何をしていたのか良く思い出せないんです」

昆虫の瞳でじいつと見られていると、具合が悪くなりそうだ。目をそらすようにするが、彼はそれを許さない。あたしが右に動くと、彼も右に。左に動いても同じ。

「土魯、ハイネの記憶を、取り戻してあげてくれないかな？」

「そりゃ良いけど、それよりお前さん、アルツェウオンと逢ったのか」

「ああ、四日前にハイネを連れて、のこのことね」

忌忌しげに、アズ。

と、ドロがこめかみ（がありそうなあたり）をゆっくりと揉む。

頭から生えた触角が、気味悪く上下して、何かを探っているようだ。

「なるほど、なるほど、このお嬢さんがねえ、アルツェウオン……ははん、やっときじんの名前を？ほうほう、アルシオンを気絶させ

ただね、ううん、よしよし、なるほどねえ……難儀だったね、流魚ちゃんも吾逗も、仕事どうしたの？夜逃げ同然じゃあないか……

……」

なにやら、独り言。アズも瞳をとろんと潤ませ、ドロの独り言に頷いているようだ。

「何？何してんの？」

ルナは小首をかしげる。今まで気が付かなかったけれど、彼女の両手はしっかりと下っ腹を支えている。いつも、こうしていたんだろうか。

「ふうん、じゃあハイネさん、大体の事情も吾逗から聞きましたから、記憶を取り戻して差し上げましょう」

バツタ星人があたしの肩をとんと叩いた。

あたしは、恐ろしさと期待の入り混じった、複雑な表情で頷いた。初め、ドロが隠れていた（？）奥の部屋に招き入れられた。先ほどの壺の広場で、ルナとアズは待っていてくれるという。奥の部屋は小さく、また一段と暗かった。

入口に、さつきから手にもっていた巨大コオムを立てかける。金属音がちいんと、響いた。やっぱり、ただのコオムじゃないみたい。部屋には、見たこともない動物の標本や、薬品がたくさん入ったビンが、直接地面に置かれている。何度も踏みそうになった。

「今まで、白昼夢のように思い出した記憶はありますか？」

「え？あ、はい、あります」

あたしは、るなざのテントに入る前に思い出したものと、カップに本当の自分が映ったことと、ヘベルツの上で居眠りしてた時の夢。男の子に抱きすくめられた記憶のことを話した。自分がアサヒかもしれないというコトは言う気には、なれなかった。

「ふうむ、じゃああなたの今の姿は、あなた自身による魔法だ……？」

あたしたちは、不思議な模様の書いてあるカアペットにそれぞれ座った。

「そう、思ってるんだけど……?」

恐る恐る、ドロを見上げる。彼は、こめかみに両手をやって揉みだした。

「じゃあ、とりあえず、ハイネさん自身が誰なのか探って、できれば姿も元に戻して差し上げましょう心を開いて、そう、開放じゃ」

「あ……」

渋い緑色の光が、渦を巻きながらあたしの胸に入ってくるのを感じた。ちくりという僅かな痛み。体中がだるくなり、目がとろんとしてきた。

意識が暗転。あたしはそれからのことを、覚えていない。

(さあて、お前の本当の名前は?)

あ・た・し・?

(そうじゃ、ハイネと名乗っている、お前は誰だ?)

や・ま・ぐ・ち・は・る・の

(やまぐちはるの、お前は どうしてこの世界にきたんだ? 此処はお前のいるべき場所ではない、どうやら、お前は未だ生きている) し・ん・だ

(死んでいない、お前の心を読む限りでは、お前は死んだと思い込んでいただけだ、この世界は、死後の世界、生きた人間は来てはいかんよ)

あ・さ・ひ・は・こ・こ

(朝日? 日の光は、ここには入ってこんぞ?)

れ・い・も・こ・こ

(れい? ハイネからは何も聞いていないのう、一体何故、死者の町に、生きている人間のやまぐちはるのが来たんだ? どうして来たんじゃない?)

お・ね・え・ちゃ・ん・が・た・す・け・に・き・た・よ

やがて、全てが身体から抜ける。光は、煙のように荒い分子になつてゆき、最後は虚空の彼方に消えた。緑の昆虫男は、膝をつき、荒い息をしている。

コイツは、本来“光”を使える人種ではないのだ。無理が見え見えだよ。

こういう成り上がり者には、教育してやらないといけないなあ。

「ホワイト・シーブドック」

真つ白な風が吹いた。薄暗い洞窟の中だというのに、太陽がさんと降り注ぐ。生い茂った草花の命が匂い立つようだ。光の洪水に気圧されて、昆虫男は尻餅を付いた。そうだ、もっと怖がればいい！そしてその身に刻み込め、自分がどれほど愚かだったかを反省し、あたしをもっと怖がれ！

「コンタクト」

強い強い風が、乱暴にあたしの髪と、服の裾をかきあげる。白い光が全身を覆い、あたしの姿が変わつてゆく。進化した姿に。

栗毛のシヨオトボブは、風に弄られながら色を落とし、光り、逆立つ。白いセエラ服は粘土のように、自由自在に形を変える。首や肩に巻きつきながら、肌の上を蛇のように移動している。肌は白くすけるようになり、ぽつちやりしていた体型は、すらりと伸びて、美しい。

獅子を思わせるオレンジの毛髪に、神秘的な女裸身。その回りを、衣服だったものが這いまわり、背後には大きな円形の光。身体は渡り鳥の落とす羽一本より軽く、漲る力は指一本で人間の首の骨を粉碎できるほどだ。

「……………」

見る、昆虫男はただ呆然とするばかり。あたしの心を覗こうとしたんだ、まだまだ、報いは足りやしない。

この老人の“光”では、とうていあたしに及ばないだろう。フェアでなくちゃ、おもしろくない。あたしは、戸口に立てかけてある巨大な櫛を見つけた。

にい、自然と、顔がほころぶ。

「遊んであげるわ、おじいちゃん」

「ひイツ」

昆虫男は裏返った悲鳴をあげて、戸口に這った。助けを求める氣らしい。あたしは、宙を舞って先回りをした。ゆたっていた白い粘土の先端が、勝手に男の頬を打った。

反対の端っこが、あたしの裸体にしっかりと巻き付いているもんだから、あたしのおしりも少し、引っ張られる。

「あんっ」

これは厄介だな。この白い粘土は好戦的なようだ。あたしの意志とは関係なく、敵を撃ってしまう。あたしの愉しみ、盗らないでよ。お。

「吾逗！流魚ちゃん！に、逃げるんじゃあ」

「だめだよ、おじいちゃん、よそ見しないでえ」

あたしは、巨大コオムを手にとって、勢いよく振り上げる。昆虫男は、偉く脅えた。

いじめたい、かわいい！

「アハハハハハハハハハハ！逃げて、逃げて！可愛いバツたのおじいちゃん」

「く、狂っておる……」

赤い櫛は、昆虫男を串刺しにした。予想に反して、緑ではなく、赤い血が吹き出た。

3・彼岸会に誰殺

彼岸会に誰殺

彼岸会に誰が殺がれたのだろうか。お線香の匂いが心地よい。

この煙の向こう、きつとアサヒが待っている。ああ、そうか“誰か”でなくて、あたしが死んでしまったのか。良かった。嬉しい。あたしは煙をたどってく。

妹が死んで四年目。

その妹の彼氏が死んで、二年経ち、母と父が離婚して一ヶ月が経った。今でも、アサヒのお葬式の日のことから離れない。

あたしはあの日、やたらとカヲルちゃんと、サクラちゃんを意識していた。親の仇と、でも言うような目線で射抜いていたに違いない。姉妹らしい姉妹に嫉妬していたし、従姉妹の葬式に喪服を着てこない非常識さに、爆発しそうだった。

考えてみればカヲルちゃんなんかは、今のあたしと同じ十七歳で、高校三年生だった。まだまだ、子供だった。あの頃は中学三年生だった大人に見えていたのに、今では二十歳の人を見ても“自分と変わらない”と、思えてしまう。

自分は、歳を取った。

大人が見ればまだ子供だろう。でも、あたしの心は老婆のように荒みきり、心の声はしわがれて、腕は何も抱かない。頭も悪いし、状況も良くない。老いゆく一方。

「山口さん、今度間違えたら本気で怒るから」

「はい、すみません」

あたしは、どうでもいいやって思った。一週間前から、少しでも家計の助けになればと始めたバイト。たかがバイトで、たかが80

0円で、人使いが荒すぎる…！

ファーストフードは、もう厭だな。今度は既製品を売るところに
しなくっちゃ。接客業は、すぐに客が怒るし、こつちだつて急いで
るのに、更に混乱させようとけしかけてくる。洗い物なんかやった
ことない。トイレ掃除なんかやらせるな。客の声が小さい。

バイトに行く前は、胃が痛くて痛くて仕方ない。向いていない。
でも、これが本当の仕事だつたら、就職したらこんな感じの所だつ
たら…。そう思つて、自分を鍛えようと思つて、一週間続けた。で
も、もういっぱいいっぱい。

来週から、行かない。絶対に、行かない。

毎日が、こんな感じ。何かしようとしても、続かない。高校も、
楽しくない。

毎日が、気持ち悪い。

進路も決まらず、だらだらと無意味に過ごす。蝉が五月蠅い夏の
午後、薄情モノのあたしは、忘れかけていたアサヒの言葉を、突然
思い出した。それが、運命の始まりだった。本当は四年前のあの葬
式の日、回り始めるはずだった歯車がやっと、噛み合った。

タッチを見ながら、カップらめんができるのを待っていた。お
母さんは、仕事。昔は服飾といつて、ファッションデザイナーのよ
うなことをやっていたらしいが、今は福祉の仕事をしている。学童
保育の子供達の面倒を、見ているのだ。

それだけでは生活できず、社会保障と、あたしがお父さんから毎
月貰う援助金でなんとかやっている。実は、あたしの学校では奨学
金を受けられない。個人の『あしなが奨学金』を利用してなければ
ど、貸し制度なので何年か後に学費を返済しなければならない。

苦しい生活。

それ以上に、あたしの家が母子家庭で社会保障金を受けていると、
いうのをクラスの人たちが知っているのが、死んでしまいたいくら
いに厭だった。いじめられたりはしていないけれど、皆と対等に立
てていない気がする。

「アサヒ、あんたがいた頃は、幸せだったわ」

薄暗い台所。カップ麺タイマアは、未だ鳴らない。昼下がりのア
ニメ番組は退屈で、何度も見た十四話目。あたしは、麦茶を飲み干
す。台所に、萎れかけたポピイの花が生けてある。強い陽射しを浴
びて、灰になってしまいうそう。あたしは、なんとなくポピイを一本
抜き取って、ポケットの中に入れた。

かったるい。バイトも学校も進路も、家族もお金も、なにもかも
がかったるい。

生きている意味なんて…。

「ブラック・シープ！」

稲妻が、あたしの体の芯を貫いた。アサヒの声だ。
思い出した…。

記憶をどんどん失ってゆく病気になって、死んでいったあたしの妹。
彼女の病気になる前の言葉。一体どんな場面で、どんな表情での言
葉だったか。

「ブラック、シープ…？」

黒い羊という意味だ。そういえば、お葬式の日に畳に座っていたの
は、黒い羊達ではなかったっけ…？あたしは、突然混乱した。
なんだったっけ、なんだったっけ。アサヒ、黒い羊って何よ。

ふらふらと、あたしは和室に向かった。昔、おじいちゃんの部屋だ
ったところに、アサヒのお仏壇はある。美貌の少女がヘラヘラ笑っ
ている白黒の写真が、天井付近に掲げられ、カビたご飯が供えてあ
った。

頭がぼうつとする。

「アサヒ、ハルノはどうして連れていってくれなかったの？レイク
んは連れていったじゃない？ねえ、ブラック・シープって何さ？」
アサヒは何も応えない。死者は何もしてはくれない。

仏壇に、薬があった。アサヒが死ぬまで飲んでいた、精神科の薬だ
った。火葬する時、入れ忘れたからとお母さんは、仏壇においてい

るのだ。ご飯と、お茶と、薬。

「ブラック・シープ」

あたしは、全ての薬を体内に流し込んだ。何故だか、解らない。ただ、面倒くさかったんだ、なにもかも。バイト先に連絡するのも、勉強するのも、息をすることさえ。

黒い風が吹いて、あたしの頭を覆った。

悪夢の始まりではない、現実への旅立ち。

八月三日、午後2時半。高校三年生の山口春野は、四年前に病死した妹、犬童朝日の薬を大量に摂取し、死亡。日記の内容から、自殺と推定された。

「ここは、どこ…？」

ハルノは、現実に目覚めた。

「はあっ」

肺に大量の空気。ねっとり絡みついた汗が、急速に冷めてゆく。蘇芳色の月が、赤赤とあたしを照らしている。砂の上だ。

ここは、七色の月の砂漠。あたしたちは、魔法使いのドロの家に居たはずだが…？

「よっこらせつと」

我ながら、年寄り臭い気合の入れ方だなと思いつつも、何とか身を起こす。側にはヘルツが、ビニルの袋から水を飲んでいた。ライオンの頭部をもっているのに、牙を使わないなんて、ナンセンスな生き物ねえ。

「やあ？」

あたしを見て、首をかしげる。

「うふふ、なんか、考えてることバレちゃったみたいだね」

ぽんぽんと、わき腹を叩いてやる。ヘベルツは、気にも留めずにまた水袋に首を突っ込んだ。

「目が覚めたみたいだな、ハイネ」

気づくと、すぐ側にアズが立っていた。彼は何故か、憔悴し切った様子で棒立ちしていた。そして、その後ろにルナも控え、彼女の手につかれたルリウミも、水を飲んでいた。

「それで、記憶は取り戻せたのか？」

「ううん」

そこで、あたしは巨大な赤い櫛を発見した。確か、ドロの家に入った時に見たような気がするが、記憶がハッキリとしない。櫛は、ヘベルツの肩にしっかりと結わえ付けてある。一体何故だろう。

「ねえ、てゆうか、ドロおじいさんの家に入ったあたりから、また記憶喪失なんですけどお……、つて、あ、笑えない？」

アズが、とんでもなく怖い顔をしている。まるで、あたしに死んでくれと言っているような目だ。まずいことでも言ってしまったのかと思い、おろおろする。

「覚えてないのか…、まあ、しかたないのかもな」

「え？しかたないって？」

「アルシオンさ、アルシオンが仕返しにやって来たんだぜ、ありやあ……」

そう言つて、アズは目を細めて遠くを見やる。

「アイツの仕業だろうサ」

「何？アルシオンがもう追いついてきたの？」

「違う、土魯に会った直後、土魯がひどい目にあったんだ、お前は気絶して泡吹いてるし、流魚の身体の具合が芳しくなかったからな、急いで引き返してきた」

「そうなの……」

あたしは、しゅんとなる。折角記憶を取り戻せそうだったのに、あたしはドロおじいさんの顔もちゃんと覚えていない。それより、

なにより、子供っぽいとは思ってたけど、こんな砂漠の辺境まで仕返しにくるなんて、アルシオン。よっぽどあたしを憎んでいるのね。好きなのに、結ばれない運命ってやつかしら？

……泣いちゃいそう。

と、ルナと目が合った。あたしは微笑んで、言った。

「あ、ルナさん体平気？」

びくっ

脅えた顔。ルナはあたしに、懷疑と恐怖を向けていた。不思議に思いながらも、あたしは優しく、もう一度、平気なの？と、尋ねた。ルナは答えない。

「ああ、マタニティブルウだよ、気にすんな」

アズがしょうもないあと、ルナをこずく。彼女は、泣き出しそうな顔でアズを見つめた。その瞳は、白を黒だと言われた時のもので、諦めと怨みが混沌としていた。

彼女の藍は、こんなに濁っていたかしら。

「マタニテ？マタ…？ん？何、それ」

「マタニティブルウ！お前女だろ？赤ん坊がお腹に来た時に、一時期女がかかる精神病だぜ？なんか、不安になって、怒りっぽくなって、男には理解不能な行動を取るようになったと、しかたねえから、気にしないでやってくれな」

そっけなく、アズは言う。彼は何を見てきたんだろう、翳りを隠せないようだ。

「大変だね、ルナさん、あたしが力になれることがあったら、何でも言うて」

ルナは、頬の脂肪をぶるんぶるんさせて、首を横に振った。何か、不安なんだろう。赤ちゃんをかかえていると、確かに色色心配だろうから、ノイロオゼ気味なのかもしれない。しばらくは、放っておいてあげるのが得策だろう。

しかし、あの態度は何だ。どうしてそんなに陰しい目であたしを見るの？

「ちつ、だから、子供なんか…」

二人に聞こえないように、嫌味を言う。そうでもしなきゃ、気がすまない。そうよ、子供が子供なんか、生むもんじゃないわ。不潔だ。無責任だ。気持ち悪い。

どすどすと足を踏み鳴らすあたしに、アズが声をかけた。

「これから、どうしたい？」

あたしは、振り向かないままハツキリと答えた。

「アルシオンに然るべく、報復を…」

上唇を、ぺろりと舐める。何故か、血の味がした。

「あげちゃうわあ」

アサヒの声が、あたしの口からこぼれた。

「ふ、ふはは、よおし、いいぞ、いいぞ」

アズは突然笑い出した。堀の深い顔立ちは、下から見上げるとかなりの迫力がある。深く暗い瞳の奥がきらりと光り、アズは悪役みたいに笑った。

体中から、疲れというか、諦めというか、そんなものがじりと立ち上っているのに、アズの顔から笑みが消えることは無かった。怖い。

「ふははは、ははは、そうこなくっちゃなあ、あいつは化け物野郎だ、アルツェウオンは！然るべき報復か、はは、よおし、いいぞ、くくく……」

ルナが、下唇をかむ。

アルシオンに恨みを持つらしいアズには、嬉しい申し出だったのだろう。あたしは、何故そんなことを思ったのだろう…。白雪姫のように美しい王子を羨んだとしても、憎しみなんて持てるわけが無いのに。陶器の人形のようなあの青年が、例えどんなに幼くて非情であっても、誰もが必ず、せめて一度は恋をする。

胸が締め付けられる思いがした。

「あんたは、俺達の仲間だ、きじんだけど信用できる、その上強くて、アルツェウオンに立ち向かえる、心強いよ」

「そんなこと……」

「とにかく、砂漠を抜けよう」

「え？あの、その前にドロおじいさんは？あたし、記憶取り戻したいんだけど」

ルナが、あたしの肩を二回叩いた。上背があるため、表情はわからない。

今はやめろ、というコトか。

「そうか、アルシオンに襲われた後だもんね、出直するのが当然だよね」

折角、こんな砂漠の辺境まで来たのに……。あたしは、口を尖らせて喉を鳴らした。ずうつとこの薄暗い国にいるせいで、人を思いやる心をなくしたみたいだ。もともと、あたしには無いかもしれないけど。

今も、偽りの姿で在るこの身体など、信用できないけれど。

生暖かい空気と、冷え切った砂。ヘルツ達にまたがって、駆け抜ければ亜鉛の匂いがする。あたし達は、一番近くの町“蚕の繭市場”へ、向かうことになった。

「町はもうすぐだぜ、戦友よ！」

遙か遠く、砂埃の向こうからアズの怒鳴り声が聞こえてくる。紫色の変な飲み物や、緑のアイスクリームばかり食べていたからか、腹が痛い。元元居たあたしの世界では、一体どんなものを食していたんだろう。

「待ちなさいよお！お腹痛いんだよ！」

怒鳴り返すが、

「イエエエエイ！境界だあ」

とかなんとか、歓喜に打ち震えた声が返ってくるばかり。何がイエイよ、何の境界よ。

「ルナさんの旦那、妙にハイテンションね」

ルナは、お腹を庇いながらもルリウミの手綱をしっかりと握っている。視線だけをあたしにやって、すぐに目を伏せた。失望と拒絶。

彼女は元元喋ることの出来ない運命だけれど、今までこんなに“無言”だったことがあっただろうか。ルナは何かに脅えているんだ。「流魚、ハイネ、早く来いよ、月と太陽の境界だぜ？ヒュウ、やばいよ、超綺麗だ…、吸い込まれるみてえ…」

勝手に吸い込まれてる。アズの背中を蹴り飛ばしてやりたい衝動を堪え、あたしは手綱をさばいた。この数日間で、ヘベルツを上手く扱えるようになった。姿勢を低く保っていなければならないので、腰が痛くなるけど、それだけだ。

「なんなのよ、とつとことつとこ自分ばあつか先行っちゃって、あんたはとつとこハム太郎かつての、お腹痛いって言ってるじゃないの、それに何よ、その………」

あたしは、我が目を疑った。

「その、月と、太陽の、境界線……？」

ヘベルツの甲羅を指ではじき、腰を浮かせて体毛の中を滑り落ち、地に足をつく。砂漠はくるぶしより少し上まで、あたしを飲み込む。サラサラの、細かい粒子がほんの少し舞い上がった。

アズの背中の方こうには、七色のカアテンが引かれ、その向こうは灼熱の砂漠が広がっていたのだ。

ぶるぶる、にゃあ！

マチモチが鋭く鳴いて、ライオンの尾を揺らす。

「これは、一体……？」

「綺麗だろう」

得意そうにアズ。巨人で、しかもマチモチに跨っているのだから高い所から声が聞こえてくる。大木と会話してるみたいだ。

「月と太陽の境界線、ペロペロ王 昔このあたり一体を治めていた方 は、そう呼んでいるらしい」

「もしかして、ここから向こうは一日中昼なの？」

「ご名答」

肩をすくめて、マチモチから飛び降りるアズ。どしん、と大地が震えて、砂埃が起こった。砂が目に入って痛い。

「一日中夜のルシアの国と、一日中昼のペロペロの国、か……」

「俺達はるなざってという旅劇団だから、両方の国を行ったり来たりしてきたけど、どっちがいいってことはなかったね……」

彼は、腰に手をやって、七色のカアテンを吸い込もうとしているかの様に、息を思い切り吸った。後方から、ルナのルリウミの足音がする。早歩き、程度で、急いでいる気配はない。

ドロの家で体調の良くなかったというルナは、大丈夫なんだろうか。

まもなく、長い銀髪をぎゅちり編みこんだ、太ったあおじんが姿を見せた。顔面蒼白なのは、いつものこと。だって肌は青いのだから。

「なあ、流魚、ペロペロの国は、あおじんやしるじんには向かなかったよな、酷く日焼けしたよな、ほらこの前の……お前がちゃじんの歌を歌った公演で」

ルナは頷いた。表情が硬い。

うんと、満足そうに頷き返して、アズはたぶん、あおじんは夜の国に向いているんじゃないかと、付け加えた。

「でもな、」

と、あたしに向き直って、

「暗闇は、味方も敵も隠しちゃうんだよ」

月と太陽のカアテンは、ゆらゆら揺れた。

あたし達は、神の御業ともいえるほどに美しい、輝くカアテンを飽かず眺めた。どのくらいそうしていただろう、あたしとアズは、何か重いものが倒れるような音に忘却の彼方へと飛び立っていた意識を取り戻した。背後に、砂に埋もれるようにして倒れ込んだルナと、そして見知らぬ人影が一つ。

アズが息を飲む。

今までどうして気が付かなかったのか、ほんの二、三メートル後の見知らぬ人影は、砂を巻き上げ倒れ込んだルナを、不思議そうに見下ろしていた。

もしかしたら、アルシオンか、血の気がスウツと引いて膝がひとりでに揺れ出した。人影は、なにか動物の皮らしいものを頭から被った髪の毛の長い人間だった。

背はあたしよりも少し小さいくらいで、斑点のある動物のロウブの裾からは、真っ黒な棒のような足が一本と、銀の甲冑で覆われた太く異様な足が一本それぞれ突き出ていた。

「アルシオンじゃ、ない」

それでも動悸は早まるばかり、いよいよ膝はガクガクと、立っていることすら困難なほどに震え出した。それは、人影がアルシオンとは似ても似つかない背格好だったために得た安堵と、そして砂嵐の向こうからぞろぞろと姿を現したあおじんの群への驚きと恐怖の為だった。あたしは、気を失いかけた。

そんなあたしを現実に取り戻したのはアズだった。彼はいつもの、かすれた少年の声で彼らに問い掛けた。

「流魚に、何しやがった？」

あおじん達は奇妙にも、みな揃って首を振った。ルナのすぐ側に立っていた小さな人影は一步こちらへ踏み出した。

「野郎……！」

やめてアズウウ！ 只ならぬ気配に、あたしは膝を折って懇願した。アズの懷に、鈍く光るピストルを見たのだ。すぐに血の惨事を連想した。

もう嫌だ、怖いことは嫌だ。

「いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、……」

気が付くと、あたしは耳をふさいで、砂漠に伏していた。先ほどまで、月と太陽の美しいヴェエルに心を奪われ、貪るように感動を噛みしめていたのに。

背の低いその人物は、僅かに狼狽した気配を見せた。が、銃を構えたアズの手前、その意識はピンと張り詰め、すぐにはあたしの許に返らなかった。

「流魚に、何をしたんだ、てめえらは、何もんだ」

アズはしかし、質問の答えなど、どうでもいいかのようにだった。泣き喚くあたしを突き飛ばすようにして、人影に対峙した。完全に、頭に血が上っている。それは、境界線に心奪われるあまり、自分の妻を砂漠に伏させる羽目になったことへの自責と、恥辱。そのはけ口への憎悪によるものだった。

早くこの苛苛を、誰かにぶつけなければ、アズの心底がこの時、なぜか理解できた。

あたしは、自分の身体の制御装置をもう一度握りなおし、みっともなく泣くだけでも抑えようとした。溢れる涙、洩れる嗚咽。今まですつと、緊張していた。人見知りもしないかわりに、いささか礼儀にかけていると自負するこの性格では、悪くも良くもない沢山の驚くべき出来事の中で、満足に動くことが出来なかった。

今更、悔やむなんてしない。でも、肩肘張ることもなく、でも安らぐこともなく、あいまいに、ただあいまいに緊張してきた。それに全く気づかなかった自分は、愚かだった。

その愚かさが、こうして溢れ出ている。

引きすぎて、呼吸困難に陥った自分の胸を両腕でしっかり抱いて立ち上がった。ぶるぶると、頬を左右に振る。

記憶喪失で、自分の年齢すら確実には解らない。けれど、もう子供と呼ぶには相応しくない外見をしている。それなのに、ちょっと怖いというだけで、神経がおかしくなってしまったのだ。性格なのか、大人になりきれないのか。

アズは一触即発の状態だった。ルナが身じろぎしたことに、気が付かない。

やはり、側に立ちすくんだ人間に、何かされたのだろうか。ルナは、苦悶に顔をゆがめる。その大きくふっくらした両手で下腹部を

抑え、藍色の瞳で真っ直ぐアズを見つめているが、時々引きつったように顔面が捻じ曲がる。相当状態が悪いのだろう。

大勢のおじんを背後に、人影は己の被った、動物の皮を脱ぎ捨てた。

腰まである長い髪の毛は砂だらけ。ドレッドヘア風、とても形容したらよいのか毛糸の様に幾本ものアッシュブロンドの髪の毛が束になって垂れ下がっている。顔は小さく整い、男性なのか女性なのかわからない。絶世の美夫アルシオンとは、流石に比べようもないのだが、あたしはその人物の顔立ちの清楚さに嘆息した。肌は口オストアンバア、焼け焦げたように真っ黒な四肢は細く、短い。背は、あたしの胸ぐらいいしかなかったが、鍛えられた筋肉と、どこか拗ねたような瞳は、幼い少年少女のものでは決して、ない。

「俺、違ウ、流魚、何モシテイナイ」

たどたどしく、彼は言った。その声は地面から直に震動を与えるような深く低いものだった。人語を操るのが難しいらしく、頭から汗を噴き出しながら、それでも真摯に、アズを説得しようとしているのだ。

低いその声からすると、浅黒い肌のそいつは男性らしい。

「落着く、良イ、俺達ノ目的ノキジン、ソレ」

彼は、細い指をあたしに向けた。

「キジンノ怨ミノ、ソレ、犯ス、罫ル、玩ブ、殺ス、キジンノ見セル、仕返シノ魂ノ浄化、魔法消エル、俺達ノウウ……俺達ノ……」

男は、上手く喋れないことに苛立ち始めたらしい。地団駄を踏みながら、彼は後ずさり始めた。背後に控えていた十数人ばかりのおじん達が、どすんと足を踏み出した。

「くそっ」

アズが悪態つく。もう、ルナなど目に入らないのだろう。ただ一点だけを睨んでいる。

「ちゃじんは、お前たちきじんを憎んでいるんだ、こんな砂漠のと真ん中で賊に遭うなんて……アルシオンからも怨まれて、土魯も

あんな風になっちまって、まったく、お前は不幸のニュータイプだなあ」

「本当ね、でも、軽口叩いちゃいらんないよ」

「ははん、涙ぐらいぬぐってからいいな」

「…無理だあ」

怖くて、止まらない。拭いても拭いても。

周りにいるあおじんも、黒褐色のちゃじんもけして、友好的ではない。ここで死んでしまうのだろうか？ふと、悪い予感がよぎる。

「自分が何者かもわかんないで、死ぬわけにはいかないわよ」

脆い意志を金槌で打ち裂いて、あたしは両手を前に突き出した。

この前でた不思議な力が、あたしの内から溢れ出てくるのを感じたのだ。

あおじんたちが悲鳴をあげた。震え上がり、一步步後進してゆく。その間にも、あたしの両手の平は発光し続け、魔法のフォオスを溜め込んでいく。

ちゃじんの男が、砂の上に倒れ付していたルナの肩を素早く抱いた。自分の三倍は軽くある、彼女の体重、身長をもともせず、抱えあげた。

「？」

「キ、キサマ、歌姫ノ流魚ノ命ノ道連レニナルゾ？イイノ力？」

「ルナ！」

あたしは、息を呑んだ。あんな乱暴にしたら、お腹の赤ちゃんが流れちゃう。

「糞め！女を盾にしゃがって！」

アズが激昂する。完全に頭に血が上っているようだ。

「そうよ、やめてちょうだい、じゃないと、走って行って一人づつ首を刳ってやるからね！あたしは、アルシオンをも倒したきじんですよ？」

「ナニ…！アルツエウオンノ？」

茶色い肌のちゃじんは、あたしの挑発に、狼狽をあらわにする。

「そうよ！ぎったんぎったんにのしたのよ？ぎったんぎったんよ？」

「オイオイ」

あたしの虚勢に思わず失笑するアズを尻目に、あたしはさらに魔力を高める。もちろん、ぽっちゃり体型で足の遅いあたしには、とてもじゃないがあおじん一人一人に走り寄っていつて攻撃するなんてできない。最後の手段はルナとそのなかに宿った命を犠牲にするしかないのだが、そんなことアズが許さないだろう。

なんとか、なんとかならないのだろうか。

周囲のあおじん達も色めき立つ。

目立つた装飾具を身につけた、青白い巨人達。男か女格別の付かない、ごつごつとした大きな身体。彼らから、いいしれぬ恐怖と憎しみを感じる。取り巻いていたあおじんのなかから、細くて一際上背のあるあおじんが、人垣を分けて前に歩み出てきた。

「そのきじんの言っていることは本当だろう」

声優のようなハッキリとしたアニメ声で、あおじんは言い放った。周囲は水をうつたように静まり返り、あたしやアズもそいつに注目した。

「近く、クモの糸広場でアルツェウオンが気を失っていたと聞く、生憎我々が畜生の男を捕らえるには至らぬ口惜しい事件だったが、ヤツが発見される前に奇妙な異国の服を着た女と一緒にいるのを、何人ものひとが目撃しているのだ……そこにいる、きじんの服と同じさ」

アニメ声はあたしを真っ直ぐ指さした。ちゃじんは、驚きに目を見開き、あおじんたちはまた、騒ぎ出した。

アルシオンはあの後、気を失ったまま誰かに発見されたのだ。しかも噂になつて、あたしのことまで……。彼がそれを屈辱としなければいいのだけど。あれは正当防衛だったんだから、気に病むこともないのだけど、やっぱり申し訳なく感じる。

「偲夜Ⅱ 落蟲、彼女は我我の敵う所ではない、許しを乞い、そ

うそうに立ち去るべきだ！でなければ、我我に未来はない」

ウバヤ「フキラと、呼ばれたちゃんは盾にしていたルナを、ゆつくりと放した。そして、よろよろと膝をついた。分厚い唇が小刻みに震えている。ルナは、弾かれたように走り出し、アズの胸に飛び込んだ。

「…………悪かった」

アズは銃をしまつて、彼女を抱きしめた。彼女の足であるルリウミも、敵陣から気取った足取りで戻ってきた。何が起きたのかわかっていないのだろう、にやあと、上機嫌になく。もしかしたら、沢山人がいるのが好きなのかもしれない。

あたしの緊張は解けた。瞬間、魔法の煌きは失われてしまった。両手を下ろし、ルナに寄り添う。彼女はあたしの緊張を理解してくれていたらしく、大きな手の平であたしの頭を優しく撫でてくれた。ルナもあたしも、顔が涙でべちょべちょだった。

「何故、こんなことをしたの？」

あたしは、興味本位で聞いてみた。自分の襲われた理由ぐらい知っておきたい。

「俺八、偲麼夜「落蠡トイウ、チャジンノ反ルシア派ノ、キジン大嫌イダカラ、キジン、沢山、沢山、殺ス目的、砂賊ダカラ、貴女襲ウノ、俺ノ信念ダツタ、曲ゲル氣ノナカツタ、デモ、悪イ思ツタ、ダカラ心カラ謝ル」

ブロンドアツシュを地面に擦り付けて一生懸命謝るウバヤ「フキラ。つまり、きじんだったら誰でも良かったんだ。次第に、視線に寒いものが入り混じり始める。

「我我からも謝罪させて欲しいミス…」

先ほどのあおじんとは別の長い銀髪のおおじんが前に進み出てきた。考えあぐねているようだが、あたしは名乗った覚えはない。しかたなく“ミス・ハイネよ”と助言しようと思った瞬間に、

「ミス・ハイネ、すまなかった」

「ええ！な、なんであたしの名前を知ってるの？」

吃驚仰天だ。しかし、もっと吃驚したのは他のあおじん達で、

「ハインという名前なのですか？」

アニメ声が素っ頓狂な声を上げる。良く考えてみれば、ハインってどなたか存じ上げないご婦人って意味だったんじゃない。そうだよ、たしかアルシオンに聞いた。

うう、なんて馬鹿な名前乗っちゃったんだろう…。

「不思議な名前、奇妙な服装…もしかして」

アニメ声が、長髪のあおじんにこしょこしょと話す。ウバヤッフキラは何のことかわからない様子で、首をかしげて、あたし達と仲間のあおじんたちを交互に眺めていた。

「ミス・ハイン、貴女はもしかして、ルシア王の探している異邦人ではないのか？」

シアは弱者達にも譲歩した「王になるべき御人が、あおじん七代分未来に生まれ、わたくしの圧政を退けて天下を極めましょう、その時、我が親愛なるペロペロは御人を許し好いて、太陽の光を傾けてくれましょう」って、

年後に生まれるはずの異邦人…つまり、次王の御人が二年後の今日現れちゃったらしいん

「あたし、アルシオンに会うまでの記憶がないの…！ハインって名前も、嘘なの」

「あたし、月の砂漠に突然現れたの、それまでのことは、断片的な記憶でしかわからないの、自分が何者か、知らないの、もしかしたら、アサヒという名前かもしれない……違うかもしれない、歳も良

くわからないの二十は過ぎていないけど、太っているから、若く見えるのかもしれない、異邦人だ、あたしは本当に、周りから見ても、そして自分から見たって、突然訪れた人間でしかないのよ、なんなのさ、あたしは一体、

何？

「と、一気に喋りたてると、ハイン（ハルノ）の人格は深層心理の奥へと潜ったわ。ふふん、でも残念。あたしはアサヒじゃない！ヤマグチハルノの妹ではあるけれど、あたしは、ホワイト・シィブドッグ。引き締まった頬に切れ長の瞳、細いうなじから足の指のピンクの爪まで、何一つハインとは違う。人に恐怖を植え付けるための神秘的な顔立ちと、匂い立つ色香はアサヒにはない。

あたしは、ホワイト・シィブドッグ。

「ヒィヒィアヒィ…」

「うわぁ、気持ちわるうい、大丈夫う？バツタのおじいちゃぁん」

「う、くうっ」

緑色の肌から、粘りのある真赤な血液を滴らせ、バツタ男はあとずさる。手にした真赤なコオムの歯、一つ一つに剃刀のようなものが仕込まれているので、あたしがぶんぶん振り回せば、バツタ野郎の糞汚え血しぶきが舞うわ。

ビロオドのカアテンのように、しなやかに噴出すの。ああ、興奮する！

「あん、いやぁん」

あたしの身体を取り巻く純白の粘土のようなモノが、バツタ男を殺したがる。もうん、せっかちさんなんだからぁん。厄介なのは、この子が動くと、あたしの身体も引っ張られちゃうつてところだ。女の子の大切な部分を衣服の替わりに覆ってくれちゃってるのだから、この子に逃げられちゃうと袋と同じになる。

「大人しくしてえ、ハニィ」

「お前は、お前は一体なんなんじゃ…！」
息も絶え絶え。

「んう、ナンセンスな質問だわあ、おじいちゃんに大事なものは、これから自分がどうなるのか、でしょあ？」

サイデイスティックに嗤ってみせる。それだけで、バツタ男は恐怖に顔を引きつらせた。ああ、なんておもしろいのかしら！

あたしの中で、更なる好奇心が頭をもたげた。殺してあげるわけにはいかないわあ。

「あなたわあ、罪を犯したのあ」

あたしは、冷酷な裁判官のように、足元に這いつくばっているそいつを見下ろした。胸に真赤なコオムを抱いた、オレンジの逆毛で全裸の美女裁判官！

「ハインの中にあるアイデンティティを呼び起こそうと、彼女の心の聖地を荒らした、そこにはあたしがいたのよ、折角眠っていたのに、あなたの穢れた緑色の光りが射した、辛かったわあ」

あたしは、ぐつとバツタ男を引き寄せた。彼の爬虫類の瞳に、美しいあたしが映る。

「それが、わしの仕事じゃ」

「ふうん、じゃあなんでハインの心の部屋を見つけただけに留まらなかったの？」

「何…？」

とぼけるつもりだ。そうはいかないわよ。

「名前も、生前の記憶も、彼女がどうしてこんなわけのわかんない世界に来たのかもう、分かっていたじゃなあい、どうしてそれ以上を知らうとしたのあん？」

「知らなければ、ならなかったのじゃ」

嘘。興味本位の何ものでもないのだわ。汚い欲望、穢れた魔力。

「彼女の記憶は、この世界に落ちた際に、偶然喪失されていた、じやが、おぬしの立ち塞がっていた“心の部屋の中”の奥に、故意に消された記憶を感じたのじゃ、それが引き出されねば、生前の記憶

自体戻らない…！」

この期に及んで、見苦しいいわけ。生前の記憶はすでに引き出され始めてたのに、バツタ男は、あたしの記憶が必要だ何て…。そんなの、信じられないわぁ。

「あんまりオイタが過ぎると、チヨメチヨメしちゃうわよぉ？」

あたしは宛ら女王様のように、コオムを鞭の様に操った。真っ直ぐなはずの“ダアリン”は、渋柿の汁でなめしたように艶やかに、しなやかに風を切った。フワフワと浮かせていた身体に、重みを加えてみる。すると、何も命じていないのに白い“ハニイ”が変形して、真珠貝のハイヒールに変化した。

コツ

足が地面につく。今まで辺りをゆたっていただけの、煙のようなコスチュウムが、光を失い実体化して、はちきれそうなヒップや、たわわに実った両方のバストにフィットする。髪の毛は逆立ったまま。この星の無力さが、あたしの純粹魔法を汚しているのだわ。空に浮かばあれほどまでに豊かで美しい魔法のインスピレーションがあったのに、地に足をついただけで、何も感じない。汚い汚い、この星は。

「ゆ、許してくれえ、頼まれたから記憶を呼び戻そうとしただけなんじゃ、お前のような強力な人格を秘めているとは思わなんだ…」
「じんかく？やだぁ、あたしわぁ、ホワイト・シィブドッグちゅわんなのよぉ？」

「人格に、名前まで…？いや、兎も角だ、二重人格とは知らなかったのじゃ、だが今後ハイネと共に生きてゆくのなら、二人で一人の人間に、戻るべきじゃ」

バツタ男は、息も絶え絶えに吐き捨てた。

「人格を、統合しなくては」

あたしは、コオムを振りかざす。一本ずつ、手足をもぎ取ってやりたい…！それが、あたしのしたいこと！

『違う！』

稲妻が、体の芯を突き抜けたわ。ヤマグチハルノ、いいえ今はハイネとなった、哀れで安っぽい女の声だわ。あたしは、突然混乱した。

『あたしがしたいことは、あたしを救うことだわ』

「ハイネ……！」

あたしは、驚きに目を見開く。その視界の端で、バツタ男が床に転がった水晶玉に額をあてがうのが見えた。ナンダラ、ナンダラ、ハイネの二重人格を戻したまえっ、唱えている。あたしは、コツ、前に進むわ。あの野郎をぐちゃぐちゃの肉塊にしてやるんだからあ。この身体の支配権はあたしが握っているのよ？ハイネにだって、邪魔はさせない。

『してやる、してやる、してやる、あたしの身体をハイネに返してちょうだい！土魯おじいちゃんを殺したりしないですよ！』

ふふん、あんたには何もできないわよお、あんたは何も知らないでしょ。

『知ってるわよ、今なら分かるわ、お願い、ホワイト・シィプドッグ、貴方の守っているその記憶と魔法は、一人で抱え込むにはあまりにも悲しすぎるよ、土魯おじいちゃんに任せてよ、そしたら、あたし達二人で一つになれる、朝日が死ぬ前の山口春野に戻るんだよ？』

アサヒが死ぬ前のあたし……。ふふん、本当におもしろい子だわん、あたしはホワイト・シィプドッグ、ヤマグチハルノの妹で、彼女が忘れた彼女の魔法。むしろあたしは、ケンドウアサヒと同化する方をのぞんでいるのだわあ。

あんたは間違っているのよ、ハイネ。

あたしが誰かを知らないのね？

『あなたの方が、狂っているんだ』

いいわ、ハイネ。認めるわ、あたしは狂人です。では、その狂人振りをとくと、ごらんあそばせえ。

『何をするの？』

おじいちゃんは、アサヒを蹴飛ばすでしょ？彼はアサヒを、裸で外に投げ飛ばすでしょ？彼はアサヒに、お前はウチの孫じゃねえって言ったでしょ？彼はアサヒの、日記を道路に広げておいたでしょ？彼はアサヒが、酷い孫だって親戚中に噂するでしょ？

おじいちゃんはアサヒを、狂わせたでしょ？

『土魯おじいちゃんは、関係ないわ』

だって、年老いた糞爺さんでしょ？同じだわ。同じおじいちゃんじゃない。

『何をする気か知らないけれど、やめたほうがいいわ、彼はあたし達に必要な存在だわ、彼がいなければ、それこそルシア王の魔力でしか、あたし達もとに戻れないのよ、あたし達、救われなくなるわ』

「死後の世界に、たった一人でいるのはアサヒだけなのよお、ハインに救いはいらない…、むしろどうか、銀白に輝く鋭利な牙を！あたしは、サイディステックにコオムを振るって、地面の土をこつそり抉り取って、その威力を見せ付ける。“ドロおじいちゃん”は、脅えて丸まった。

「ホワイト・シィブドッグ」

身体から白い光りが立ち上る。コレこそが魔力、死後の世界できじん以上の上流亜種に与えられもつた諸刃の剣。肉と、血の代わりに、あたし達を構成しているのだわあ。

「デ・ボオテ」

ひゅんっ

「あっ」

バツタ男は胃の中身を全て吐瀉したわ。うへえ、きちゃないいん。彼は感じているはずだわん、あたしの魔法が自身の体の芯を蝕んでいるのを。それは一瞬の出来事ではあったけれど、か弱い命の一生分だったのね。

心の防御は一方的で、外からの刺激には異常なほど強固なのに、内から広がった癌には太刀打ちする術もないのね。彼は口からヨダレ

を滴らせ、焦点の定まらない瞳であたしを見つめる。両手を胸の前で組み、うふふうふふと、はにかみする。そうそう、そうそう、魔法にかかった哀れな老人！

「足をお舐め、仔犬ちゃん」

あたしが命令すると、

「わん」

バツタ男は、あたしの言葉の意味を理解しないようで、気味の悪い笑みを浮かべたまま、わんわん吠えて、床に這いつくばったわ。

「オホホホホ！アッハッハッハ！そうよ、あんたは仔犬ちゃんですよん、オホホホホ！」

「わん、わん、わん、わん」

「おすわりしてえ、よおし、よおし、ちんちんは？ウフフフ、かわいいこちゃん、しゃぶしゃぶは？ああん、いいわあ、ほら、もつと早く……」

あたしの命ずるまま、されるがまま、バツタ男は飛び回り、駆け回った。

『酷い、ドッグお願い、止めて』

ハインが懇願する。哀れな男の姿に、彼女の精神力は弱っていった。その時だったわ。

がたん

物音がした。あたしはすぐにその正体に気が付いた。

「どうしたの、青く醜い巨人さん？」

横顔で睨んで、男だったらヨダレを垂らしてむしゃぶりたくなるような、色っぽい声で囁いてあげる。もちろん巨人は女だから、寒気を感じただけだろうけど。

「黙っていたら、わからないでしょ？ほらみてえ“ドロおじいちゃん”はこんなに素直に悲鳴を上げてるのよお？キモチイって、タノシイってえ」

「わんわん、わん、わん」

「……！」

青い巨人は両目から涙をこぼした。どうしてかしらあ？

「うふふ、お互い、不便なものねえ、その声と、あたしの魔力…」
銀の髪を乱して、彼女は震える。あたしは、静かに下を向いて、
魔力を高める。

「おおじん、あなたの声を奪ったのは、あなたを守るためだった
んだと思うわあ」

首をかしげる。

「ハイネ ヤマグチハルノが、そう言ってくれて、彼女アル
シオンモルシアも好きなのよ、彼らを怨んで欲しくないって、そう
願ってるう」

巨人は、震えながらも、力強く頷いた。どうやら、彼女は真実を
知っているようね。でも、あたしが誰かは分かっていない。

魔力が、全身を満たす。ちゃりん、鍵がかかるような音がして、
あたしの意識が引きずり込まれるように遠のく。心が、とても安ら
ぐわあ…。

「おい、何の音だった？流魚」

巨大な彼女より、さらに巨大な男が入ってきた。

莫迦な男。

彼女の宿した命は、あんたの血なんてただの一滴も入っちゃいない
のに。薄れゆく意識の中で、あたしは嘲笑した。次にこの男に会っ
たら、本当のことをぶちまけてやろう。

「…え？い、一体、なんだよこれ」

んわんあwつうえあんなわんなwwwつわwwwつわqwwwwん！

「……………土魯？ハイネ！」

大きな青い手の平が、あたしの身体を支えたのが分かった。
意識が、暗転した。

「ルナ、どうしたの？眠れない？」

「……」

彼女は二重顎を震わせて、頷いた。奥まった藍色の瞳に、灰色の月が輝く。昼間は硬く結い上げられていた銀色の髪が、今は彼女の腰で扇に開いている。

あれから、丸一日。

あたしの中の時間的感覚はすっかり失われ、アズに「半日」とか「五日」とか言われて、それを鵜呑みにするしかなくなっていた。太陽は一度も昇らず、空気があるなのないのか、疑いたくなるようなザラついた砂漠ばかりを移動していたから、当然だろう。その間に良いことと、悪いことがあった。

「今日、たくさんいっぱい、わけわからんことばかりあった……」

彼女は、じつとあたしを見つめる。四角い無機質に切り取られた窓の下に、彼女はちょこんと座っている。ここは“蚕の繭市場”の宿屋。まだ、町の入口だから、“クモの糸広場”みたく、本物のクモの糸の上に町が築かれているとか、そういうことは分からないんだけど、確かに虫独特の籠った匂いがする。あまり気持ちの良い感じはしないけど。

「良いことは、ルナがマタニティブルウやめてくれたこと？ みたいな、あと、フキラ達が、仲間になってくれたこと……かな？」

ルナは微笑む。彼女はウバヤ「フキラ達に襲われてから、不機嫌な所をひとつも見せない。体調が戻ったのかもしれないし、まあ、あたしにとつては嬉しいことだ。

そうしてそのフキラ達は、あたしに同行することを強く望んできた。どうやら、あたしに次期王になった上で、アルシオンを倒してもらいたいらしい。そのためにはどんな協力も惜しまないとまで言ってきた。しかし、交渉は決裂。数人のあおじんたちによる、無理難題な交換条件。アズのプライド、彼らによる理不尽なまでの歌手迫害それに、砂族：砂漠のヤンキイみたいな少年たちに行えることは数限られ、砂漠を出たら右も左もわからなくなるあおじんも数人。

心強いけど、あんまりいらぬカンジだった。一応好意で名乗り出

てくれたので、ちゃじんのウバヤ「フキラと、アニメ声のおおじん
スズと、厳つい四歳ゴワは、連れてゆく事にした。その他のおおじ
ん達も何人かは、此処まで送ってくれた上に、こうして宿屋まで提
供してくれた。基本的にきじん用に作られているこの建物の天井は、
おおじんの胸ぐらいまでしかない。

しかもアンダア。太ったルナも、おおじんのなかでも大きい方のア
ズも、外で寝ると言い出したほどだ。で、アズとスズとゴワは本当
に外で、テントを張って眠っている。

ここにいるのは小さなフキラと、あたしと、ハイハイで移動するル
ナだけだ。

「悪いことは、ドロおじいちゃんと会えなかったことと、あたしが
次期王らしいってのが判明したこと……うつん、もつといっぱいあ
るよね、アルシオンのことも気になるし、記憶も戻らないし、ルナ
がフキラの仲間に愛想笑いすることに、アズ拗ねるし」

くすくす

ルナが、目を細めて笑った。もしも彼女に声があったら、どんなに
可愛らしい声で笑うんだろう。仕草も女性らしいし、優しいし、素
敵。

「あはは、本当にアズってヤキモチやきだね、羨ましいぐらいだ
よ」

彼女は、膨れたお腹に両手を当てて、窓の外を見やる。あたしも、
彼女の隣に立って、窓に乗り出す。外の風は、蒸し暑い。砂漠では、
身も凍るような夜を過ごしたというのに、不思議。

あたしのハッキリしない記憶では、砂漠はもっと暑くって、町は涼
しいはずなのに。

「とにかく、ルシア王に会わなくっちゃ」

あたしは、決意を固めて、拳を硬く握る。

「ソウダ、ソウシテ、成り代ワレ、ハイネ」

「…あんたも起きてたの、フキラ」

モップの先っちょみたいな薄汚れた頭髮に、近付くだけで臭うボロ

をまとった男。

年齢は、自分でもわからないらしい。きじんと、くろじんの混色のちやじんだ。と、いつても、遙か昔から増え続けた混色人種なので、一人種として確立しているらしい。数はとても少ないが。背は低く、髪色は決まって銀髪だという。

身体に傷害を持つ者が多く、フキラも生まれた時から半身が不自由なのだと話してくれた。言葉も発音が難しいらしい。

「俺、アマリ、睡眠イラナイ、ナク、イイ、カラ、聞コエタンダ、ハイント歌姫ノ声」

「歌姫の声は聞こえなかったはずだよ？」

「ム……」

眉根を寄せる。

「うざったい髪の毛だね、切っちゃおう？町に入るんだし、その汚いボロ切れも、ずええつたいなんとかしたほがいいってバ！」

「ムウ、シカシ」

髪の毛と、洋服を交互に掴み、途方にくれたように棒立ちする。綺麗な瞳だけが、月明かりを浴びて浮かび上がる。意見を求めるようにルナを盗み見るが、彼女の旦那の短髪を見ればわかるもの、彼女は早く切りなさいと指示する。

フキラはしょんぼり肩を落として、

「ワカツタ、名誉ノタメダ」

と、呟いた。

ルナはにつこりと笑み、あたしの頭をひと撫でしてから、突然歌いだした。

「エルベイ、ソルツツエ、リヒ、パ、ナアヴェルウォンツエ、パロオナリツヒ、エグ」

いつか聞いた力強く重厚なものではなく、流れるような旋律に、小さな小さな囁き声のような歌だった。あのとき、アルシオンが言っていた。ルナはあおじんには不可能な音域、発音を歌のみで表せるんだと。そのために、歌う以外の目的で、声を上げられないと。悲

鳴すら、あげられないと、聞いた。

「アアム、ロツツエティ、パパアン、アカルガナオン、ワ、レッツエ」

心が表れる、美しい歌。蜂蜜がそのまんま音楽になったら、こんなカンジ。甘くて、危険で、優しくて、おいしくて、綺麗なカンジ。

「ハジメテ、俺聞イタ」

フキラも、窓際によつてきて、ちょこんとルナの足元に座る。ルナの歌が、お気に召したらしい。あたしも、瞳を閉じて、彼女の美声を存分に楽しんだ。

「フウ、ウフ、アア、レエミセイツツエル」

歌い終わると、彼女はあたしの頬を撫でてくれた。そして、フキラの肩をぼんぼん叩くと、中腰になって、寝室に移っていった。後に残されたあたしとフキラは、何をしてもなくぼおつとしていた。ルナは、子守唄として歌ってくれたのかもしれないのに、逆に目が冴えてしまった。いろんなことを、考えなきゃいけない…そんな思いに、取り憑かれた。

まるで、明日が期限切れだと、宣言されたようだ。焦る気持ちと、立ち塞がる想いと、深まる謎。何かしていないと、落ち着かない。

「髪、切ルカ？」

そのとき、黙っていたフキラが突然、そんなことを言い出した。これ幸いとばかりに、あたしは頷く。だって、無言のまま時を過ごしていたら、胃の中で鳥が何羽も羽ばたいているような不安感だけが募るから。

ちょうど側にたてかけてあった、巨大なコオムを片手に、フキラの背後にまわって、丁度いい長さで髪の毛を掴む。コオムは剃刀の刃みたいなのが仕組まれていて、かなりの切れ味だ。いったい、何でこんなものがあるのか。

「よし、んじゃあ、バサッといっちゃうぞ？」

「ワカッタ」

エクステや髪飾りもろとも、首が見える程度までバツサリ削ぎ落と

す。

「俺、苦シミ、知ッテル」

「苦しみ？」

もう一房、バツサリ。

「生キル苦シミ、ハイン、無理強イスル気俺ナイ、嫌ナラ、ルシア会ウナ」

「どうして？今更、あたしがルシア王と接触することで、あなたたちにはなんらかの利点があるんでしょ？それを促したくてしかたがないんでしょ？」

「ソウダ、デモ俺、キジン皆嫌ウ、ハインモ、嫌ウ」

前髪：らしきところも、つまんでコオムを引く。ザア、髪の毛が地面に落ちる。

「デモ俺、苦シミ、知ッテル、ハイン、ウマク……ウマク、伝エラレナイ、俺ノ、気持チノ、ナニヨリ、ハイン、心配……」

綺麗にというわけにはいかないが、幾分かましになった。しっかりした顎、横に広がった鼻に、堀の深い目元。骨格がしっかりしている割に、肉付きが悪い。

出逢った時に感じた、胸惹かれる精悍さは感じられない。髪の毛を切ってしまっただけで、平凡な少年に変わってしまった。黒目がちで、捨てられた犬みたいな顔だ。

「言いたいことが、よくわかんないや」

「ムウ、ツマリ、無理、シチャイケナイ」

彼は、無表情のまま親指をつき立てた。誰かに教わった行動を、機械のようにトレエスしているだけみたいだ。ただ、元気付けたがっているのは分かった。彼はあたしに、何も強要したくないと、考えているようだ。

目をしばたいて、頭を振る。

「モウ、イイノカ？」

「うん、オツケエ、なかなかの好青年ってカンジ？」

「ナラ、モウ、寝ル」

「ああ、ちよつと、ちよつと待って」
「？」

この宿屋の部屋の間仕切りは薄い。どうやら寝間着にすら着替える気もないフキラが、隣の部屋で眠ると思うと耐えられなかった。彼の衣服は信じられないほど臭いのだ。シャワアを浴びるとまでは言わない。けど、せめて着替えて欲しかった。

「洋服！」

「着替エロ、ト？」

彼は険しい顔で、あたしの用意した麻の上下を睨んだ。アズの着物だが、裾を折ってベルトで締めれば、なんとかなるはずだ。

「そうよ、じゃなきゃ外に追い出すわ」

「カマワナイ、外二八素逗や後輪ガイル」

ふふん、髪の毛をかきあげて、彼をびしっと指さす。

「どうかしら？あおじん三人のテントの中なんて行ったら、明日の朝には踏み潰されて死んでるわよ？フキラちっちゃいんだから」

「クツ、ナルホド」

脂汗を一零したたらせながらも、無表情にうなづく。

「着替エヨウ」

彼は不気味な色に変化した衣服を苦勞して脱ぎ捨てた。細すぎる。確かに胸板はがっちりしているし、筋肉も十二分にはついているんだろう。しかし、タンクトップのようなもの一枚で、目の前に立っている男の細さは尋常ではない。

フキラはあたしがいるのも構わずに、上半身裸になった。やつぱりだ。切り詰められた身体に余分どころか、必要な肉も付いていない。あるのは極太い骨と筋肉だけ。野生のハイエナのようにしなやかで、痛痛しくて……。死と隣り合わせの身体。飢えた腹と、それを満たす為の牙、それだけの身体だった。

彼は上にすっぽりアズの麻の上着を着てから、異臭を放つスカートを脱いだ。麻の上着は彼のくるぶしまである。ナイト・ガウンのようだ。あたしは、用意していた帯をわたし、剥がした身包みを、

シャワールウムにつまんで投げた。

「……」

振り返ると、すでにフキラは寝る体制だった。ガリガリの一本足と、ゴツイ義足を交互に動かして、身体をうまく横たえる。あたしは、フキラを悲しいと思った。

生きるために食べて、食べるために鍛えて、鍛えるために喪失した。彼とあたしは同じ人間じゃない。なまじ、あおじんなんかよりも近い姿であるからこそ、違うんだ。

少なくとも今は、あたしにとって、フキラはかわいいそうだった。

永遠の夜の中、あたしは目覚めたわあ。まぶしい太陽が恋しいの、だつて、起きるのが辛いんだもおん。ギラギラと燃え盛るあの光りの飛礫が、まぶたを押し上げて無理やり起こす感覚う。はあ、痺れるわ。

少しはなれたところに、小さすぎるタオルケットに包まって、スウスウ寝息を立てているルナがいた。可哀想な少女、お腹に巣くった悪魔を追い出せないままにいる。赤ちゃんなんて、産めるはずがないのに。彼女は、気付いたのかしら。あたしが誰なのか。

「あなたの声に戻ったら、あたしは消える…、しばらくは、黙っていてもらうわ」

あたしは、細く白い手を彼女の喉にかざし、床から足を離れた。身体が浮かび上がる。とたん、ピッタリと張り付いていた白いハニイが、水中に投げ出されたようにふわふわと身体から離れ、宙をゆたい、あたし自身は白く発光する。すぐ側に赤いダアリンをみつけて、手にとったわ。

“お姉ちゃん…”

「……！」

その時よ！背後からあ、幼い少女の声が聞こえたのよ！あたしは

思わず振り返ったわ。でもお、そこには青白い巨人が横たわっているだけだったの。

何か不安だったわ。いったい、なんでかわかんない。ただ、ただ、あの声に聞き覚えがあったの。お姉ちゃんなんて呼ばれたことないのに、どおしてえ？

あたしは、穴が開くほど巨人を睨みつけていたけど、彼女は会話することが出来ないのだから。彼女ではないはずだわ。

きつと、空耳ね。

「……まあいいわ、また会いましょおねえ？ルウナア？」

目を細め、微笑みかける。あたしは、部屋を出た。ハイネが此処へ来た目的は、ただひとつ。アサヒへの懺悔。死者への熱烈な後悔の独白。

薄情モノ。

今さらだわあ。何一つ、かわりはしなあい……。お馬鹿なハイネは、記憶喪失でチャンチャラのキチガイ女。でも、このホワイト・シブドッグ様の唯一安息の地でもあるの。万一、彼女のアサヒへの後悔が、癒えてしまう様なことがあったら……。あたしはもう、こんな風に表へ出ることが叶わないかもしれないわあ。

そう思うと、やっぱり怖い

出る杭は打ってゆつかあ、備えあれば愁えなしってゆうしい。

ハイネの傷に、塩を塗っちゃうぞ。みたいなあ？そうして、あたしはずつと彼女という。うふふ、それどころか、乗っ取っちゃう？さあつて、それにはどうすればいいか……。

答えは明白。アルシオンよ、ハイネはアルシオンが好きなんだもん。たった数時間一緒に過ごしただけのお綺麗な女男に惚れるなんてえ、理解できないあい。でも分かっている、恋って理屈じゃないのよねえん。ハイネの深層心理で眠っている間にも、彼女の中で愛情がどんどん膨らみあがるのが分かった。そして、同時に憎悪も……。

もしかしたら、あたしを目覚めさせたのは、アルシオンへの押さえ切れない恋心と、憎しみだったのかもしれない。強く、強く、彼

を思っていたものお。きっと、ハイネが思っているよりずっと。

アルシオンに会わなくちゃならない。ハイネを心の檻に閉じ込めるには、彼女自身が、慈しみと怒りでいっぱいにならなければなら
ないのよお。

「うふふふ、まってえん、アルシオンちゃん、そしてハイネ
……！」

あたしは、蒸し暑い空気を切り裂くようにして、窓から飛び出した。後ろを振りかえると、小さな人影が、じっとあたしを見ていた。美しい、月夜の晩。彼岸会に、会いたいの少年の死体…。

4・綱の意思(1)(前書き)

前回までよりも読みやすくする為に、四等分してございます。

4・鋼の意思(1)

鋼の意思

鋼の意思を持つて、あたしは追い続ける。絶対、何にも惑わされるものか。

恨み辛みが、絶対の信念となつて、あたしを突き動かしていく。行く所々で、野に枯れた薔薇が一本。アイツの証だ。美しい緑の野原に、一輪の乾涸びた薔薇がほおつてある。アイツが通つた証だ。

あたしは、ボウボウになつた髪の毛をかきむしつて、悔しがる。また、先を越された。

たつた一つの荷物である、真赤なコオムの柄を握り締める。巨大なその櫛は、あたしの背丈ほどで、寂しい夜にあたしの話を聞いてくれる。ポケットに手を伸ばす。赤い花びらが一枚だけ。といつても、もう渴いた血の色をしているけど。ああ、枯れた薔薇はだめなの。アイツの証は、お金にはならない。一度試してみたら、商人たちはあたしを怒鳴つてきた。青白い肌を、色濃くして、噴出す怒りに喉を鳴らして。

「出ておゆきよ！この売女」

薔薇は駄目。どんなに腐つたポピイは良くても、鮮やかにしな垂れた、薔薇の花びらは無意味以上。アイツはあたしに何もくれない。お腹、空いたな…

ポピイの花びらをポケットの中で、握り締める。追いつけない、男。アイツに玩ばれている…。アイツ、ルシアに。

茶色に染めた髪の毛は伸びきつて、すっかりプリン。身体は痩せて、あ、でも元元がデブだったから、普通くらいの細さになって、肌は乾涸び、目は落ち窪み、見る影もないくらい。腹をすかせ、記憶は戻らず、ここ数ヶ月他人とは、言葉を交わしていない。

ルシアは、大勢の魔法使い達と、魔法のホウキに乗って空をすいすい。小柄な身体に似合わない厳ついマントに、黒いサラサラの坊ちゃん刈り。瞳は輝く黒曜石、肌は煌めく真珠。この国の王で自由と、富と、名誉の男。

酷いな。すごい差だわ。

ルシアは、あたしとのかけ離れた対比を埋めるために、わざと枯れた薔薇を置いてゆくのもかもしれない。早くおいでよ、ちっぽけなお嬢さん　考えすぎかもしれないけど。

あたしは、顔半分をマスクで覆って、フードを被る。

何故かは知らないけれど、あたしは素性を隠さなければ、下手に出歩けない身分になってしまったんだ。もう一年近く前だったか、それとも十数年前か、百年経っていないことぐらいしか、確信が掴めないほど昔、あたしは素顔で歩いていた。“白鳥の羽屋上”は、真っ白で、ふわふわで、誰もが誰をも知らないような場所だった。ふらふらと、迷い込んだあたしを迎えたのは、どよめきだった。

“蜘蛛の糸広場”とは違って、商店街があるわけでもないのに、たまたま道を歩いていただけの住人達の割には、大きなどよめきだったと思う。悲鳴を上げた、しるじんもいた。上品なピンクのワンピースを身につけた、女のきじんは走って逃げた。

みんな、あたしを見ているの？

水路を走っていたトンボの羽の車たちが急ブレーキをかけた。若いあおじん達が顔を覗かせている。白い羽を浮かせただけの歩道に、数人のあおじんが駆けて来た。あたしは、何がなんだかさっぱり身に覚えがないから、どうしていいか分からなかった。ただ、言いようのない不安が広がるばかりで、立ちすくむしかなかった。こんな気持ちを、かつても味わったことがある。あたしは、あるときから前の記憶がない。

その上、強力なきじんだから、自身の姿すら、魔法で作り出された幻影ではないと保証することが出来ない。随分昔に、アズとルナという旅芸人のあおじん達と行動を共にし、記憶と姿を追い求めた

ことがあった。あれは、いつのことだったろう。

あたしは、水に浮かんだ“白鳥の羽屋上”を、まじまじと観察してみた。建物はみんな背が低く、ふわふわした何かで作られている。ランプは、乳白色の液体で満たされた、まあるいガラス。ルシアの夜の国なのに、驚くほど明るい。あおじんとしろじんが多く、数人きじんがいる。寒い国の住人のように、厳しい面構え。

彼らみな、あたしに注目しているんだ。

あたしの顔を必死に見ている。まるで、指名手配犯でも見るような顔つきだった。

「シイプドッグ」

誰かが、呟いた。

「犬だ」

「イヌだ」

「羊飼いの狗戾だ」

波紋は広がり、町中がざわめいた。みんな囁きあっていた“シイプドッグだ”

「？」

あたしは、そもそも何故こんな場所に突っ立っているのかもよく分かっていなかった。気後れし、後ずさったが、振り返っても、もはや道などなかった。青白く巨大な人たちが、うごめきあっているだけだった。

「ルナ？アズ？……フキラ？」

太ったルナにしても、少年アズにしても、あおじん達は大きすぎるようだった。そして、どんなに目を凝らしても、小さな黒褐色の少年は姿を現さない。

「スズさん？ゴワさん？」

アニメ声のスズみたいなお洒落さんはいない。みんな、灰色の外套を身につけている。ひときは大きかったゴワも、ここのおおじんたちよりは、小柄だった気もする。

「アルシオン？」

藁をも掴む思いだった。大勢に囲われて、囁かれて、なのに孤独だったから、彼を呼ぶしかなかった。彼が出てくるとは、ほんの少しも期待していなかったのだ。

ところが、人の運命とは数奇なもので、あたしは大いなる孤独の中で、黒く光る少年の強烈な気配を感じた。それは心臓を打ち砕き、あたしをぐらつかせた。

「アルシオン……」

「やあ、久しぶりだね“どなたか存じ上げないご婦人”」

ぎんねずのフアアに、漆黒のレザアパンツ。ゴツゴツの飾りがついた革の手袋と、お揃いの飾りがついたネックヲオマア。セレブなんだか、ジャンキイなんだか区別がつかないファッションのきじん。その呼び方、やめてよ」

見間違うはずはない。深くミステリアスな黒、天然パアマの頭髮に、たまご型の滑らかな輪郭線。白い陶器のような肌に、濡れたような血色の唇。少し上を向いた鼻、扇形の眉、長い睫毛、大きな瞳。

窓枠のように黒く、雪のように白く、血のように赤い、男の子。眉目秀丽、この世のものとは思えない、絶世の美夫、アルシオン。彼を間違うはずがない。そう、それは、もちろん彼がどんなに平凡極まりない顔立ちだったとしても、あたしの自然。だって、あたしは彼を美しいと思う前に、いとおしいと思うから。

アルシオンが、好きだから。

「うふふ、相変わらず不思議な人、ぼくにそんな顔するなんて、ルシア以外には君しかいないよ」

「ねえ、あんた怒ってないの？」

「何を？」

「この前の……」

ちらつと、目の前に立つアルシオンをのぞき見る。

「この前の、こと、あたし魔法で押し倒しちゃったから」

「ああ、怒ってたよ」

なんでもないかのように、彼はさらつと言った。あたしはびくつきながら、足元に目線を落とした。あたしはまだ、魔法をうまく使えない。一時的には、彼よりも多くの魔力を放出できるらしいけど。

「でも、そんなことよりも、もっと大切なことがあるんだ」

アルシオンの手が、いきなりあたしの肩を掴んだ。

「ひゃあ！」

「おっと」

あたしは反射的に跳ね除けた。アルシオンは拒否されたことに驚いたらしく、しばらく目をパチクリしていた。瞬きのたびに、睫毛がゆれる。うわあ、マジ長え。

「ご、ごめん」

赤面する。

「別にいいんだ、気にしてない、でも、ハイネ、ぼくが触るのそんなにイヤ？」

子供がおやつをおあずけにされた時、そんな瞳でみつめてくるアルシオン。あたしはいつたい、どうすればいいのよ。

アズと、ルナと、アルシオンの報復を恐れ彼から逃げていたというのに、あたしは今、彼を抱きしめたい衝動を抑えるのに精一杯だ。

拳動の一切が、あたしの胸を高鳴らせる。

「イヤじゃ、ないよ、びつくりしただけ」

渴いた喉を押し開いて、絞り出すようにそれだけ言う。

「よかった、とにかくハイネに伝えなくっちゃならないことがあるんだ」

「何？」

「そうだな…、まず君の今の状況からだね、回りを見てご覧よ」
促されて、首を回す。

「……なんで…？」

目に映るもの全てが、あたしの不安をかきたててゆく。

「なんで、どうして？」

興味心身といった様子で、あたしを眺めていた人だかりが随分と後

退し、みんなの表情も、もつと硬く険しくなっている。明らかに、あたしとアルシオンを警戒し、憎悪している。あたしが一人一人に視線を合わせていっても、誰もそらそうとしない。

まるであたしを、檻の中のライオンかサルでも見るかのように。

「ハイネ、君はホワイト・シィブドッグと瓜二つなんだよ、だからみんなハイネを嫌っちゃうの、仕方がないけど、辛いよね」

「ほわいといふどつぐう？何それ、新種の犬？」

「数日前に現れた、恐ろしい女の子のこと」

「その子と、あたしが似てるの？」

「いいや、似ているというのは、ちよつと違うんじゃないかな？顔立ちは良く判らなかつたらしいし、ナイスバディだったんだって、明らかに君じゃあないけど、うふ」

「ひつど…！それって、あたしのこと遠まわしにナイスバディじゃないって言ってるじゃん！その通りだけど、そんなこと付け足さなくっても……」

「あははは、怒りん坊さんだね、ハイネは」

「もうっ、からかわないでよ」

「ごめんごめんと、言いながら、悪びれた様子もなく、アルシオンはまた、淡淡と話し出す。少し歩こうか、促されて、足を踏み出した。

「瓜二つって言うか、カラアが同じなんだ」

「カラア？」

「きじんのもっている魔法の色のことだよ、マジックカラア」

「ふうん、それが同じだからみんなあたしを、ホワイト・シィブドッグって勘違いしてるってことでしょ？変なの、色なんて七色しかって、こりゃ虹か…！だいたい二四色ぐらいじゃないじゃん、同じ人もいるわよね」

あたしは、一人で納得して腕を組んで唸った。その横で、アルシオンが目を細めた。

「そつだね、ハイネは記憶喪失だもんね」

「ん？」

「知らないんだ、カラアは一人一人違う…そしてきじんは、三千人しかない。死んだきじんもいなければ、生まれたきじんもないんだこの世界には」

背中が、ぞわつとした。きじんは生まれず、死なない…？そんなばかな。

「ホワイト・シィプドッグは間違えなく純粹なきじん…土魯みたいな混じり物じゃない、ということは、その三千人のうちの誰かなんだ」

「そんな…でも、あたしは突然この世界に来て…！」

「そんなこと、誰に吹き込まれたの？ハイネ、君は元からここにいたさ」

アルシオンが、微笑む。あたしの頭に浮かんだのは、フキラ達反きじんの砂族たちだ。彼らが、あたしに“あなたが異邦人ではないか”と、言った。

あたしは考えた。考えれば考えるほどその言葉が正しく思えてきた。「あおじん達に、吹き込まれた…」

言って、口をおさえる。アルシオンが満面の笑みを浮かべ、こちらを覗きこんでいた。

怖い！

身体が硬直し、心が揺らいだ。

そうだ、彼らに吹き込まれた。

彼らが、あたしを異邦人に仕立て上げた。元元いたきじんなんだ。三千人三千色のハイネだったんだ。記憶を失っているが、あたしは高貴なきじんだ。今も昔もこれから、生まれず、死なない純粹なきじんだったんだ。

その時あたしは、気が付かなかった。

アルシオンの両腕から滲み出している紫色の魔法の光りに。あたしの中で、黒い炎が燃え上がった。

「そう、酷いことをする奴らだね、ハイネ」

「うん、あんまりだわ…酷いわ…」

「もしかしたら、記憶を消し去ったのもあおじんかもしれないね」

「どうして、そんなことを？」

「彼らあおじんは、ルシア王に退位させたかったんだろう、だから即席で異邦人のきじんを用意したのさ、記憶を消してしまつて、砂漠に置き去りにすれば、いいだけだからね。あとは他のきじんが“異邦人”の魔力を発見して、騒ぎ立てるだろうしね」

「あたしじゃなくつても、いいじゃないの」

「じゃあ、きみの強力な魔力を恐れたのかなあ？一石二鳥だよね」

「強力な、魔力？そんなもの持っていないよ」

アルシオンは、口の端だけを持ち上げて嗤った。

「そんなはずないだろう、ホワイト・シィプドッグ！君の魔力は、ルシアの城を半壊させ、城にいた、多くのあかじんときじんを犠牲にしたほどじゃあないか！ルシア王は、手足のもげた哀れな同胞達と共に、君に恨みを晴らそうと飛び回っているよ！さあ、シィプドッグ、言つただろう？ハイネなんて都合のいい名前乗ってるんじゃないよ。二九九九人のきじん達が、君を呪っているんだよ、純白の魔法を持つのは君だけだ、ハイネ！」

君は、ホワイト・シィプドッグなんだよ

4・鋼の意思(2)

顔を白いマントで覆い、あたしは赤いコオムを杖代わりにして、野原を進んだ。

空は依然暗い。数ヶ月前にふと思い立って、ペロペロ王の太陽の国へ向かうことを決めた。道行くあおじん達に方向だけを尋ねて、ただひたすら歩く。

まだか、まだ闇は止まらないのか…

疲労や、孤独を感じなくなるなんてこと、絶対ない。何度感じて、耐えることのない嫌な感情。汚いものだけ、辛いものだけあたしの心を掴みとってゆく。いつしか星を願うこともやめてしまった。

黒 闇 錆 滅 辛 酷 涙 泣 悲 痛 喪 亡 怒 哭 腐 シ

あれだけ輝いて見えたこの世界。闇の中だからこそ映える、オレンジ色の堤燈。黄色いテント、白いビルに、落ち葉を縫い合わせた屋台。身体が恐ろしく大きく、男か女か、区別の付かないあおじん達に、ひしゃげた羽根と透けそうな肌をした、細く弱いシルエツトのしろじん達。はじめて出会ったきじんは、青く大きな瞳の、美しい白雪王子様。

記憶の混乱と、アイデンティティの崩壊に心を乱されながらも、あたしを取り囲むものは素朴で、豪奢で、不思議だった。

ねちよねちよした食べ物も、通貨代わりの花びらも。白いセエラア服も、全て。

今、あたしの黒い瞳に映るのは、神出鬼没のアルシオンと、魔法で交信しただけの王、老婆のルシア。

アルシオンは、あたしにとって、恋の相手ではなくアガペを捧ぐべき人となっている。彼はあたしを監視し、おもしろがり、ルシアに

ついて教える。あたしの仄かな恋心を知って、あたしを遊ぶ。あたしはすっかり、彼のオモチャ。

「君は、ルシアに呪われているんだよ、ちゃあんと謝って、魔法を解いてもらわなくちゃいけないんだよ？」

「どんな、呪いなのか？」

「君が僕を殺すように」

「嘘ばかり」

「うふふ、嘘だと思っていたんだろう？僕がいなくなったら、君には何も残らないものね、僕を愛することしか、できない身体だものね」
「そうしたのは、あんただよ」

尖った葉先が、素肌に痛い。脱いだ衣服を地面に敷いても、野生の野原はあたしをうがち、苦しみを与えた。懐かしい思い出。

常にアルシオンの身体からは、紫色の光りが立ち上り、あたしを優しく包み込んでいた。野生の草花よりも深く、あたしを衝きながら、アルシオンは目を開いた。

大きな青い目で、見つめてくる。

何でも知っているよ。

「嗚呼、どうしてえ、こんなことになったの？」

涙を流し、叫びながら、あたしは何もない自分に気が付いたものだ。莫迦な女と、嗤うがいいさ！あたしは事実も真実も、何も知らないベイビィだったんだからね。何十時間も抱き続けたかと思えば、ここ最近のように、何ヶ月も現れないアルシオンのことも知らない。枯れた薔薇の花を落としながら、逃げ続けるルシアのことも知らない。記憶が途切れたすぐ後に、苦楽を共にしたアズとルナの所存も、反きじん砂族のウバヤフキラ達の安否も、何も知らない。

「あ、はあ、モドリタイよお」

「どこへ？」

「あつ、あつ、あつ。ア！」

どこへ？

どこへ？

どこへ？

頭の中は混乱。明解になりかけた思考と、自身を貶めようとする思考とが、衝突しあっている。ヘッドヴァアンしたみたい。考えなくちゃならないことを、考えたくなくなってしまう。思考の迷宮。

少しばかり夜が明けている。

白んだ空。

ペロペロの世界が近いのだ。歩き続ける。足が痛い。

会話を忘れた喉が乾涸び、上下左右の筋肉が衰えている。長い髪の毛が風邪にさらわれる。もう少し、もう少し。

見晴らしの良い大地、その向こうに森が見えた。背の高い真っ黒な木が、肩を寄せ合っている。その向こうに光りのヴェエルが見えた。迂回するのも面倒だ。目測では、何時間もかからずに通り抜けられるほどしかないモリじゃないか。だけど、“白鳥の羽根屋上”で手に入れた、白い僧侶のような洋服が、これ以上ボロボロに、汚れてゆくと思うと残念だった。真赤なコオムを地面に突き刺し、あたしはその森に挑むことにした。

空を見回してみても、アルシオンの気配はない。彼に伝えなくてはならないことが、あるというのに。どうして、何ヶ月も姿を見せてくれないの。

あたしはやはり、純粹なきじんではないと、告白しなければならぬのに。

きじんは、生まれず、死なないのならば。三千人三千色から、変わるはずがないというのなら。あたしはやはり、異邦人だったのだ。そうでないのなら、誰がこの坊の父親であろうか。

「かあさま？」

あたしのお尻にも届かない、小さな人。天使の産毛をもった、黒い髪と青い瞳の、アルシオンの生き写し。股のところにボタンのある、赤ちゃん用のズボンをはいている。

他人との会話は一切ない。あたしは、息子と話をする以外の口をもたない。

「くさがいっぱいよ？こあいのお？」

「怖くないよ」と、あたしは答えようとしたけれど、声が出なかった。喉がからからに渴いて、接着剤で固められたみたいに、口の下が閉じていた。

唾液が出ない。巨大な瞳をぎよるぎよる動かすだけだ。あたしは唇を震わせる。

どうやら、唯一の肉親であるこの坊との会話も、随分怠っていたらしい。かばっと、閉じていた口が上下に開いた。それは激痛を伴った。干からびて、くっついてしまっていた皮膚と皮膚が、ペリペリ剥がれてしまつて、唇が二つに割れた。

やっとの思いで、吐息のような声を出す。

「怖くないよ？森さんはとっても、優しいのよ？」

「そおなの？」

「なっちゃん、怖いのか？」

坊の名前は、夏男という。夏という季節に生まれた、男の子だったからだ。当然のことながら、純粹なきじんの赤ん坊というものは、夏男以外には、この世に絶対存在しない。

あたしは、あおじん達の子育てを真似して、数ヶ月、なんとか幼児と呼ばれる程度の大きさまで育て上げた。あおじんと、ほぼ変わらない速度での成長だ。

「こあくないもん！かあさまは、こあいい？」

夏男は、魔力の方も目覚しく発展し、薄紫色の光りを、自由に操るようになった。紛れもなく、あたしとアルシオンの間の愛息子なのだ。

「森さんとは、お友達なの、大丈夫だよ、怖くなったら、なっちゃんのお父様が助けに来てくれるからね」

夏男はきやつきやと手をたたいて喜んだ。

人のいない川べりで、一晚苦しんで産み落とした坊や。生んだその瞬間から今まで、この坊の父が如何に美しく、気高く、聡明か、耳元で囁いて育ててきた。夏男にとって、父は神も同然だった。そし

て、あたしにとって夏男は天使。父親譲りの愛くるしい外見に、強力な魔力。母の言い付けを守り、父を信じ、ルシアを憎む。

八重歯が覗く、オレンジの唇。ちっちゃな、あんよとおてて。牡丹雪が降り積もってできたような、サラサラの肌に、どこまでも深いブルウのお目目。漆黒の頭は、母に似てストレエトだが、髪の毛をかきあげる仕草は、アルシオンそのもの。

服も好んで、派手なものを選びたがる。動きにくい上に高額だ、という理由で、あたしは赦しはしなかったが、夏男は与えた服に、花粉を擦り付けたり、昆虫の羽根を結び付けたりして、工夫しているようだ。

「かあさま？」

「なあに？」

可愛い我が子に、励まされる。

迷いなど、初めからあるものか。あたしはただただ、突き進むのみ。

「忍び込んだんですよ。去年の夏に」

右手の人差し指を唇にそつと当てて、秘密だよでもいいだけ。でも、他人の家に忍び込んできたとは、聞き捨てならない。このマンションのセキュリティはそんなに甘いものじゃないから、誘ったのは×××のほうか。

しばらく忘れていた彼女への憎しみが湧きあがる。まさか、あたしのゲームであそんだりしてないでしょうねえ……。

あたしは慎重に、言葉を選んで真実を聞き出そうと考えをめぐらせる。しかし、もとより目の前のこの少年に、何かを隠すなんて気は皆無だったのだから、あたしのその努力は、全くの無意味であった。それどころか彼は、懺悔をしに来たのだ。

「×××さん、俺、ここで彼女を抱きました」

「……………」

一瞬「抱く」って、意味がわからずに、首をかしげる。

そして、首の筋肉が伸びきる前に、はたと気が付く。そのまま、硬直して、全身が熱くなった。あんまりびっくりして、シヨックで噛みしめた唇を、そのまま噛み切ってしまうところだった。

あたしの動揺に気付かなかったはずは無いのに、少年はそのまま話し出す。

「去年の夏にご両親が小旅行、あなたが剣道部の合宿なのをいいことに、お邪魔しました。たしか、七月の二十一日か、二十二日だったと思います…。その節は、大変申し訳ないことをしました。彼女にも、嘘を付かせてしまった…」

「そう」

あたしは、ごくりと唾を飲み込む。一年近くまえに、×××はこの家でセックスを…。本人の口から語られると、なんだか…。

「あの時はまだ、ああいう、ああいうコトを…」

淡淡と話していた少年が、わずかにはにかむ。目をそらし、言葉を躊躇いによって結びつけたままにいる。

そこで、あたしは気付いたのだが、×××が死んだことを思うと人は悲しむのに、死んだ彼女のことを思い出す人は、いつも穏やかなんだ。お父さんも、お母さんも、あたしでさえも。懐かしがってそうなる時もあるのだけれど、普通に、生きている人のことを話すと、寸分たがわぬ表情をする。

「特別なことだと思っていていまして、好奇心から手を出したんです。でも、違っただんですね。×××のこと、もつと好きになったけど、でもそれだけで。別に、他には何も変化をもたらさなかった…。何かが、劇的に変わると思っていたけど、何もなかったんです。×××を抱くってコトは、普通のことだった。好きな人に触るのは、普通のことだった。キスも、手を繋ぐのも、愛撫も…。何も変わらないうで続く、日常的なことでした。子供の俺がそう感じるんだから、人間の…動物としてってゆうか、本能ってゆうかみたいなものなんでしょうね」

「あたしには、解らないわ」

少年は、畳の染みを撫でた。茶色い、親指ぐらいの大きさの染み。なにか、嫌な予感がした。

「そんな染み、あつたかしら？」

「ごめんなさい。でも、去年からありますよ。その、これは…血です…ね。汚しちゃって…。焦りましたよ、畳、汚しちゃったから…」

やっぱり。なんで血が出るのかはわからないけれど、生理現象のイメジがら、なんとなく彼女の汚物だろうと想像がついた。ひどく大人びた顔で、何度も茶色い染みをなぞる。とても、エロティックな手つき。

「あたりまえのこと、もうできないんです」

陰鬱に、かえるが鳴くような声で、彼は言った。

4・鋼の意思(3)

「なっちゃん！」

気付いた時には、夏男は空中で大開脚をしていた。次の一瞬では、べちゃつと、小さな体を泥だらけの地面にめりこませ、半べそをかいていた。

身体を横たえていた朽木に、足をすくわれたらしい。

「いちゃいの」

「お馬鹿！もう、ほら立ちなさいよ、男の子でしょ？」

夏男は、両手について、よたよた立ち上がると、魔力を高めた。

「ラベンダア・ウイグナ」

体中に付着した土くれが、燃え上がるように消えうせる。

視界も悪く、真っ黒な森の中だ。何度も同じ場所を通っているような錯覚を覚える。なんて、気味の悪い…！

夏男は、自分の魔力では治せない、衣服の破損に舌打ちした。よっぽど眠いのだろう、イライラしているのが、よく分かる。母親のあたしでなくとも、坊やのピリピリとした居住まいに、そのことは簡単に見抜けるはずだ。

しかし、あたしは彼に休養を取ることを赦さなかった。

胸騒ぎがするのだ。

なんとしてでも、この胸騒ぎを静めたい。だから早く、原因を突き止めねば。

「かあさま、あれ、なあに？」

「ん？」

！

辛うじて、夏男の為に浮かべていた微笑も凍りつく。あたしの心臓は、この事を警告していたのだと、瞬時に理解する。

そこには、山があった。“数固体”が折り重なって出来た、巨大な山。この世界では、くろじんの次に巨大で、最もポピュラーな種

族。

青白い肌と、堀の深い顔、銀髪の巨人、あおじんで出来た山が。若草色の月の光りが丁度、木木の間を貫き、真っ直ぐにその腰をすえているあたり。闇夜になれた目には、殊更に慄然として映る。悪趣味なオブジェだった。

「ううっ」

胃が締め付けられ、中身がでそうになる。今、あたしの体内から何か出るとしたら、それは胃酸以外にはないけれど。しばし忘れていた吐き気が、あたしの背筋を撫でつけ、頭から酸素を奪い取る。数日前から折れていたあばら骨が、内臓に食い込む。

もしも、あたしが完全なきじんであつたら、折れたあばらも瞬時に治し、空腹など感じず、ペロペロの国までテレポトしていたに違いない。そうすれば、このような映像を見せられることもなかったのだ。

「あ！うごいちゃよ　？あおじんねっ」

鼻の穴を膨らませ、指を全部広げ、山を指す（まだ、一本指だけを動かすことが出来ないのだ）。

見れば、死体と決め付けていた、あおじんの山の一部がもがいている。

「生きて、いるのかしら？」

あたしの顔色が悪いのを見て、夏男は首をかしげる。

「かあさま、たしゆけゆ？」

「え？うん、たしゆけるよ？」

あたしは、全神経を集中させたが、白い魔法の光りは宿らない。しかたなく、赤い巨大なコオムを持って、死体の山に近づく。

とてとて、小さな足音。夏男は、ひしつとあたしにしがみ付き、あおじんたちを食い入るように見つめた。その小さな瞳に、一体何が映っているのか、あたしにはわからない。

生きているらしい山の一角を、注意深く観察する。少し奥の方だな。あたしは、あおじんの折り重なった死体の斜面を登って、その

付近にまで到達した。

夏男も、あたしに引きずられる様にして、登ってきた。そしてまた、ひしつと服の裾を掴む。愛らしい坊や、可愛い坊や。本当は、目を瞑ってほしいのだけど。

「フツ」

スパアッ！

櫛の部分に、剃刀の刃のようなものが仕込まれている、このコオム。死体は上下にきれいに寸断される。とたん、びちゃっ、生暖かく青い血液が、白い僧侶服を汚す。

音もなく、内臓が溢れて膨らみ、広がる。長い巨大ソウセイジを、恐ろしさで好奇心の入り混じった顔で観察していた夏男が、悲鳴を上げた。

「きやつ」

ぱっくり割れた、死体の中から、小さな少年が踊り出たのだ。ザンバラの長髪に、ギラギラとひかる目をもった、小さな少年が。

あたしは、それが誰か分かっていた。

だって、今あたしが分断した腹は、かつての友人の顔をもっていたのだから。おそらく、今まで行動を共にしていたのだろう。どんな不幸に見舞われたのかは知らないが、少年が、その友人の下に隠れていても、不思議はなかった。

「フハア、ハアア　、う、ハア　！」

息も絶え絶え。黒光りする肌を持ったその男は、青黒く染まった自身の身体と、たった今、あたしが切り裂いたあおじんとを、見比べていた。

「久しぶりね、ウバヤッフキラ」

「ハイネ…！」

覚えていてくれたのか。あたしは、小さな驚きをもって、少年を歓迎した。

「そして、残念ね、せつかくの再会を、喜ぶ暇もなく真つ二つだなんてね」

あたしは冷笑した。身体が半分になつてしまつたあおじんの男は、壮年だつた。もしかしたら、老人と呼んでもおかしくないかもしれない。髭と、眼鏡で主代わりしてはいたが、これはかつての少年……アズだ。あれから、2、3年は経っているというコトだろうか？どうもしっくりこないが、そんなものだつたんだろう。

アズとはかつて、共に旅をした仲だ。そのときは、懐妊中の姉さん女房、歌姫のルナを連れていたが。この山の中にはいないのだろう、ふと、そう思った。

夏男は、懸命にフキラから目をそらそうとしていた。しかし、フキラは死体から這い出ると、真っ先に夏男に注目した。首をかしげている。

ヘベルツが、はじめて与えられたおもちゃを観察するのと同じだ。頭巾を被つた亀ライオンは、にやあと鳴きながら、毬で遊ぶ。

フキラも、唸りながら夏男を手繰り寄せた。

「ハイネ、殺シタ、吾逗ヲ、殺シタ」

真っ二つに裂かれた、アズ。

その腹の中にいながら、フキラは抗議の声を上げる。

「殺していない、初めから死んでいた！」

あたしの剣幕に押されたのか、フキラは夏男を両手に抱え上げながら、あとずさつた。

「こあいい！こあいい！」

金切り声を上げ、必死に助けを求める夏男。男に抱かれたことなど、あるまい。

「死ンデイタ？」

「そおよ、あんたを助ける為に、仕方なくアズの身体をぶつたぎつただあけ！そうでもしなきゃ、あんた窒息してたよ？」

「ミンナ、死ンダ？俺ノ、同志、死ンダノカ？」

「そうね、ゴルゴタの丘だわ」

「クウ……」

伸びきつた白い髪の毛で、顔を覆つて、男泣き。

昔よりも、いささか精悍さを増した顔つき。両手に抱えられた夏男は、なす術もないようだ。突然泣き出した、見知らぬ男に戸惑うだけだった。

「えんえん、してゆの？えんえんだめよ　？おとこのこでしょっ」

あたしの口ぶりを真似して、フキラの頭をぽんぽんしている。

「綺麗ナ、子供、優シイ、子供、ハインノ授力ツタノ？」

「うん、そうよ」

「父上八？」

「…いないわ」

あたしは、アルシオンと答えるのが苦しかった。いずれ夏男本人の口から飛び出るのであるうけれど、フキラに知られたくないと、強烈に思った。たとえ知られても、あたしを見せしめに葬ったり、夏男を人質にしたりする“反きじん”勢力のほとんどは、死体の山。そういつた恐ろしさとはまた別に、あたしはアルシオンとの関係を否定しなければならぬのではないかという、理由のない義務感を感じた。

フキラは、同情したらしく、夏男の頭をよしよしと撫でると、まだ消えぬ涙を泉のように湛えながら、告白した。

「俺モ、両親イナカツタ、コノ子供ノ歳カラ、アオジンニ支配サレタ、ソシテ、今モ、大勢ノ家族、失ツタ、ハインモ、俺モ、子供モ、痛イ、辛イ、可哀想、ダカラ、俺、コノ子供ノ父上ニ、ナリタイ」

あたしは、久しぶりに腰を抜かした。

笑い飛ばそうにも、フキラは真剣で、真摯に受け止めようにも、夏男には、立派なきじんの父親がいる。困惑したあたしに、フキラは気付かない。

「ちいうえ？」

「ソウダ、ソウ呼ブ、良イ」

「ちいうえってなあに？かあさま？」

「……」

父様だよとは、言えない。夏男にとって、それは神の名だ。

「パパ、ノコト、俺ハ、パパ、才前ノ名前ハ？」

フキラが、あたしに代わって答える。夏男は、もじもじしながら、上唇を舐めた。眠い証拠だ。もう少しすると、あたしの手の甲をつねつねする。

「なっちゃんは、なっちゃんよ？」

「ナツチャンヨ？」

首をかしげるフキラ。

「ああ、夏男よ、暑い日に生まれた、男の子という意味」

訂正するあたし。フキラは、今までに見たことのない、好意的な微笑を浮かべて、

「夏男、偲麼夜」夏男」

と……！あたしは、目頭が熱くなるのを感じた。

「フキラ、あなた本気でこの子の父親になるつもりなの？」

声が震える。視界が揺れる。

「かあさま、えんえん？」

「しないよ、えんえんしないよ？ね、なっちゃん、ここから降りよう」

あたしは、フキラから顔を背けて、夏男の手を引き、死体の山を降りた。地面に足をついてすぐ、握っていた夏男のちいぢやなお手が、手の甲にするりと回ってきて、親指と人差し指でつねつねしはじめた。

「イタッ」

あたしは、注意のつもりでわざとらしく痛がった。夏男はやめない。しかたなく、十五キロの体を両腕に抱き上げる。自分から擦り寄ってきて、苦しそうに呼吸する。

いとおしい、あたしだけの坊や。

今日はいっぱいお喋りしたね、いっぱい歩いたね。おやちゅみなちやいね。

「ハイネ」

自称パパが、後からひらりと降りてきて、馴れ馴れしくあたしの腕に手を置く。

もしもフキラの身長が、あたしの胸くらいでなかったなら、彼のガリガリに痩せた手の平は、あたしの肩を撫でていたのだろう。そういう馴れ馴れしさだ。

「俺ト、結婚シテ」

「え？」

「君ノコト、好キダツタ、本気、俺、本気」

拙い言葉で、一生懸命に訴えてくる。あたしはただ、啞然とするだけ。…うつん、また、目頭が熱くなった。顔の筋肉が醜く歪み、クウルにやり過ぎそうとしていた自分が失われ、嗚咽が出そうになった。冷静が、抑える。

「何言つてんの？あたし、あんたらを裏切ったのよ？」

「裏切ルハ、ホホワイト・シィブドッグダロ？ハイネ、悪イ、ナイカラ」

「…なんですって？」

「俺、見テイタ、町、入ル前夜、ハイネガ变身シタ、流魚ニ、声カケテ、白イハイネ空飛ンデ、闇夜溶ケタ、俺、ジツト見タ、窓カラ、見テタ、スグ後、ルシア王ノ城ガ陥落シタ、ホホワイト・シィブドッグ、噂アツタ、俺、信ジタ、ミンナモ信ジタ、デモ流魚ガ裏切ツタカラ、ミンナバラバラ、吾逗ト、一緒シタ、デモ今、俺庇ツテ、死ンダ」

「ルナが、裏切った…？」

「子供、産マレナカツタ」

フキラは、夏男の頭を撫でた。夏男は、すっかり眠りに落ちていた。

「流産でも、したの？」

あたしは、恐恐尋ねた。自分に置き換えたら、耐えられない。しかし、フキラの口からは、それ以上に恐ろしい真実が飛び出した。

「初メカラ、子供デキテイナカタ」

「う、嘘よ、だって…そんな」

膨れた下っ腹を、大切そうに抱える彼女。優しく語りかけ、お腹の子のために子守唄を紡ぐ彼女。その愛情に満ちた行動は、決して演技ではなかったのに。

「想像妊娠」

4・鋼の意思(4)

……！

鉄槌をくらったようだった。黒い肌に汚いボロをまとった少年の、分厚い唇から、あたしの呼吸を完全に止めてしまふような、魔法が飛び出した。

しばし、呆然とするしかない。

「流魚、吾逗ノ子供欲イ、欲イ、本当ニ、妊娠シタ、思ツタ、デモ、産マレナイ、過ギタ、時期、想像妊娠ダツタ」

言葉の不自由な少年は、それでもいくらか流暢に、感情を交えながら言った。

若草色のお月様は、そんなフキラを邪悪に照らす。黒い森が覆い隠した真実を、あたしは必死に受け止めようとした。でも、そんなそんなばかな。

ギイ、フキラの義足が耳障りな音を立てる。

「誓ツタ女、子孫残サナイ、アオジンノ男、不名誉、吾逗、彼女、捨テル以外、ナイ、歌姫、売レタ、高く、売レタ」

「売ったの…？ルナを？」

半信半疑で聞く。だって、アズはあんなにもルナを大切にしていたのに。フキラによると、あおじんの男の名誉を傷つけられたらしいが…。でも、そんなのってない。

「ルシア王ノ一派ガ、買ツタ」

「ルシア…」

もしかしたら、あたしへのあて付けかも知れない。昔、あたしを匿ってくれたのはルナとアズだったのだから。それとも、単純に歌姫としてのルナが欲しかったのだろうか。

「モウイイ、忘ル、楽」

と、フキラはため息をついて、しゃがみこんだ。目にはまだ、先ほど流した涙が、涸れることなく浮かんでいる。そうとう堪えてい

るようで、それきり立ち上がる気配もない。

「どうしたの、あんたそんな気弱な男じゃなかったでしょ？ねえ、ちよっと、こんな所で休憩なんかしないかね？」

眉根を寄せて、あおじん達の死体の山を見上げる。グロテスク。

「ドウセ、死又、家族一緒、イイコト」

「はあ？あんた、何があつたか知らないけど、アズとかに守られて生き残ったんでしょう？なんでいきなり死ぬ気満満なの、ほら、立つてよ、行くんだから」

「ハイネ、コノ森、誰も生き続ケル、無理」

「え？」

創傷も癒えぬ、三日月形のおでこを引つ掻きながら、白髪の少年は呟いた。

「“朝日ノ鎮守森”ダカラ」

お城は“羊の毛の森”と迷路みたいな“朝日の鎮守森”に囲まれている

いつかの、アルシオンの声。

アサヒ、どこかで聞いた名だ。アサヒ、懐かしい名だ。

いや、そんなことはどうでもいいのよ。空が白んでいたはずなのに、ペロペロの太陽の国が近かったはずなのに、どうして、そんな場所に？

ルシアの城を、守る砦のその中に。

その疑問の旨を、黒褐色の肌を持つ、少年に伝える。

「朝日ノ鎮守森、ドコニデモ、アル、ドコニデモ、現レル、入ッたら最後、モウ誰も死ヌマデ過ゴス、コレ、運命」

「……入らなきゃよかったあ」

気の抜けたあたしの声に、フキラはへなへな肩を落とす。それにしても、随分と変わったものだ。以前のフキラは、接続詞を“の”しか使わず、表情も、ボディランゲイジも、覚えたばかりというようだった。

身体は、未だに不潔そうだけど、あたしは彼の変化に好意を抱い

た。

「問題、ソコ、違ウダロ、俺八、家族ト死ヌノ、決定シタ、ココカラ、動キタクナイ、動ク、無駄」

「ばか！」

「？」

一瞬、フキラがむつとした。あたしは、構わず続けた。

「ばかフキラ、ばか！あんた、夏男のパパでしよう？自分からそう、夏男に言っただでしょう！夏男を幸せにすんのよ、パパは、そういうもんなのよ、こんな腐った死体の山の傍らで、何日も過ごせるわけがないわ、なお更病気になっちゃうよつ、死ぬかどうか、そんな問題じゃない！あんたら男はいつもそうだ、結果ばかり重んじる、経過が結果を作り出しているんだと、ねえ、なんで認めようとしないの？経過によつては、終焉の方向が変わるんだって、信じてよ、何？どうせ死ぬから、夏男を退屈させてもいいっての？どうせ死ぬから、病気になるうと何しようよと、ここから動きたくないって言うの？ばか言ってるんじゃないやねえよつ、生きていく意志が脆弱で、どうして生き残れるの？意志をもつてよ、夏男を一番に愛してよ、ほら、まだ未来はあるはずよ、どうにかなるはずよ、生きようよ、生きようよ、生きようよ！家族が離れてしまうことなんて、あたし達が生きてゆくための妨げにはなりはしない、独りきりでも、なんでも、生きようよ、つてゆうか、行くのよ！とにかく、こんな場所からは離れなさい、ほら、立って、もたもたしない！何してんのヨ、夏男抱っこして、落とさないでよあ？あつちよ、あつちの方向に進みましよう、見て、ね？泥よ、地面が湿ってるわ、地下水か、河か、絶対何かあるはずだわ、さあ、付いていらっしやいな」

あたしは、フキラを振り返らずに、ずんずんと進んだ。

夏男を手渡された彼が、あたしを追うのは必然だった。打ちひしがれた、野良犬は、重そうな義足を引きずって、地面を這い始めた。

「コノ森入ッテ、生キル、思ウ、普通ナイ、変ダ、ハイネハ」

「個性的と言ってちょうだい？」

軽口を叩きながら、あたしたちは朽木を飛び越え、土を潜り、永遠と歩き続けた。

途中、夏男のお漏らし騒動があつてからは、フキラは夏男を抱いて歩くのを嫌がった。胸から、わき腹にかけて、夏男のオシッコでべちよべちよになつてしまったのだ。おねむの坊やは、かわいそうに歩かなければならなくなった。

「ちゆかれたあ、だっこお、だっこお」

「しょうでしゅかあ、よしよしなっちゃん、パパに頼んでみな？」

あたしは、意地悪くフキラを顎で指す。彼は、ギョツとして、首を振った。濡らされた衣服を、絞って腰に縛り付けている。痩せたハイエナの上半身が、露だ。

ああ、アルシオンの身体だったら、程よく脂肪と筋肉がついているのに。滑々の白い肌は何よりも柔らかく、熱いだろうに。あたしを包み込んで、私たちが人間であることを確かめられるのに。あの少年の素肌を、この目に焼き付けること……それこそが、最大のセクシャリティだと確信する。完璧な、裸のアルシオン。

あたしは、フキラの裸に、アルシオンを重ねて一人おぞましく興奮していた。

「イヤ ア」

ふと、我に返ったのは、夏男の金切り声のおかげ。いやらしい妄想から、頭を振って目覚めると、夏男の身体を持ち上げる。

どうやら、結局抱っこはしてもらえなかったらしい。傷つきやすい坊の歳だ。拒絶に敏感なのだろう、なかなか泣き止まない。あたしは、非難の目でフキラを見やった。

しかし、彼はあたしの注視に気付かない。どこか虚空を睨み、鼻をひくつかせている。

「どうしたの？」

「イヤ、俺ノ勘違いカモシレナイ……“ツラ”ガ、匂ウ……？」

くんくん、何も匂いはしない。“ツラ”というのは、あおじんの

言葉で、火打石のことである。石と石を激しくぶつけ合つと、火花が飛び散り、土くれや燃料に引火する。ストロヴェリイ色の鮮やかな炎である。

この世界では、きじんの魔法による紫色の炎、あおじんやしろじんが一般に利用するマンダリン色のホタル堤燈。そして、あかじんが体内から放出する血色のマグマの三つが、主な“光り”として、利用されている。

ツラ石の火炎を利用するのは、最も野蛮なヒト達だけである。

「匂ウ、気ノセイ、違ウ、匂ウ」

フキラは、横ッ跳びに走り去った。まるで、鉄砲玉みたい。風を切る音はしたが、駆ける足音はしなかった。あたしは、大慌てで彼を追ったが、ゴマ粒みたいなボロ布が、夜空に舞ったのを確認できただけだった。

少年を追うことはその瞬間に諦めたが、しばらく止まれなかった。

「パパ、ばいばいよ　？」

ぴたつと、泣き止んだ夏男は、呑気に彼を見送った。どうしよう、フキラを追わなくちゃ。魔法、使えるかな？

あたしは、念じた。フキラが見えなくて、怖いよ、彼のもとに行きたいのよって。

死体の山を前にした時と違って、今度は手の平に確かな感觸。額に玉の汗を浮かべながらも、久しぶりの魔力の高ぶりに浮き立つ心は抑えられない。白いキラキラしたマジックカラアを振りかざし、あたしは全身全霊を込めて唱えた！魔法の言葉を！

「ホワイト・シィプドッグ！」

ぶわっ

風が、あたしと夏男を包む。あたしの容姿に僅かな変化。髪の毛がオレンジ色に光り、白い僧侶服が鼓動を始める。足が地面から少し浮き、全身が軽くなる。大丈夫、これならまだ、コントロオルできる……！

「エンゲイジ」

キンッ

空気を切り裂く音。身体がぶれる、切り刻まれる。手の中にあつた夏男も、共にバラバラになっている。やがて、収縮し、再構成し始める。

目の前に、歳若い女と小さな男の子。母と子にしては、歳が近く、姉弟にしては離れ過ぎている。歪んだ母親とその息子。

えくぼの可愛い坊やの毛は、カラスの濡れ羽色。一方、痩せた女の毛はぼうぼうに伸び切っている。いわゆる、瞬間移動。この最中、術者は自身の姿を見つめなければならない。魂と、体がバラバラに移動しているからだ。と、その瞬間、目に痛い衝撃。耳は風を受け続けたように、麻痺して何も受け付けない。少しピンクの混じった、赤い炎。

「それ、ツラの炎…？」

あたしは、暗闇に突然浮かんだそれに向かって、つぶやいた。曖昧になっていた全ての境界が、稜線を取り戻して現実になる。そこは、元いた森の中ではなかった。

表面がぬらぬらと怪しく光る川と、乾いた大地。少し拓けたオアシスだった。

「！」

驚いたのは、フキラ。きじんの魔力を知らないのか、化け物でも見るような目つき。

「魔法よ、魔法、あたしこれでも、少しは使えるようになったのよ？」

あたしの意思とは関係なく、ホワイト・シィプドッグの気がむいたときだけね。付け加えるのを躊躇った。そう、使いたい時に使えるわけじゃないし、極たまに、魔力が暴走してしまう。不完全なきじん。子供まで産んでしまった、気味の悪いきじん。

そうね、フキラ、そのあんたの目は正しいよ。あんたの目の前に立っているのは、きじんでもないのに、瞬間移動してきた女だよ。

「んん　、きれいなえ」

夏男は、あたしの腕の中から飛び降りると、素早くフキラのもとへ駆け寄った。

「ツラノ炎ダヨ、ナツチャン」

「うん、うん」

夏男は、よだれが垂れるのも気にせずに頷いた。肉にうずもれた首が、唾液でべたべたになっっているに違いない。こちらから見ると、後頭部のハゲが良く分かる。仰向けに寝かせるから、坊の頭の毛が薄くなってしまっているのだ。

「あちゃい？」

「アア、熱イ、サワル、ダメダ」

「ううん、うん」

「なっちゃん、おいで、フキラそれ、どうしよってのよ？」

ストロベリイ色の明かりが、土くれに引火して燃え上がる。香ばしい馨が鼻孔をくすぐる。胃が、きゅんと縮んだ。

「メシ、作ロウ、ツラデ焼ク“キオク”ナカナカ」

「わあ、ご飯食べられるってこと？」

ここ数日何も口にしていない。それでも、どうにかしてしまわな
いのは、夏男のラヴェンダア・ウイグナのおかげである。人体の細胞を活性化させ、傷と病を癒してくれる。

「“朝日の鎮守ヶ森”から、なんとか抜け出す方法を考えないと

……」

でなきや飢え死にしまっわ。周囲を見回し、口をつぐむ。黒いヒジキの群れみたいな鬱蒼とした森。フキラの言う“キオク”は、木の根を切って吹き出る、ゼリイ状の樹液だが、栄養素が極端に少なく、小さな子供に与えてはいけないとされる、イブプロなんとかって、成分が含まれている。夏男は、あたしのおっぱいしか、食べるものがないのだ。

あおじんの子供なら、もう離乳食を終えている頃なのに。

こんな森には、いつまでもいられない。

と、頭に先ほどのあおじん達の死体の山が浮かんできた。ふふ、

別にいつまでも生きられると、決まったわけじゃないか……。アズ達のように出てゆくこともできるわね。

自嘲。

ぶしゅっ

“キオク”があふれだし、ツラの炎の中へ投げられていく。あたしは、“キオク”を回収する際に生じた、木の根の皮を丸めて、簡易コップをつくり、小川に水を汲みにいくことにした。すぐ向こうに見える、オアシスへ。

背の高い葉を避け少し行けば、目的の小川。予想に反して澄んだ水を湛えていた。おいしそう…。

あたしは顔を直接小川につけて、清水を飲んだ。

「……………あはあ」

袖で口をぬぐい、コップ二つに水を汲み、あたしは立ち上がった。

「！」

その時、あたしは背筋が凍るような怖気を覚えた。

振り返り、恐る恐る小川に身を乗り出す。そこに移っているのは、プリン頭の薄汚れた女。吹き出物だらけの顔に、しわしわの手をした二十数歳の女。

女の深く切り込まれたつめの先から、にじみ出る血が、水面に触れるか触れないか。其の時だった。黒くぬらぬら怪しく光るだけの、其の水流が目を焼くほどの光を発した。

あたしの顔が、あたしのものでなくなっゆく。

生暖かい風にもてあそばれていた毛髪が、黒くつややかに首筋にたれた。思った瞬間、水の中に曇りのない肌をした、この世のものとは思えない少女。突然に、現われたのだ！

ここまでの美貌、ここまでの理知的さ。アルシオンとは、全く別格の聖女的美しさを溢れんばかりに湛えた美少女。まさにマリア、百合の聖霊だ。あたしは、驚き、慌て、胸がつぶれるような苦しさを味わった。懐かしい女の子。

水の中で、恍惚とした笑みを浮かべていた少女は、あたしに向か

って白く細い手を伸ばす。あたしも、手をのばし、小川の中の彼女の柔らかな頬に触れた。少女の手も、水面から突き出てあたしの頬を触った。全く同時だった。あたしは驚き、彼女も眼を見開いた。

少女のさくらんぼ色のぷつくらとした唇が、動く。そして、あたしの口から涼やかな声が漏れた。

「アサヒ……！」

あたしたちは同時に手を引き、水面を激しくたたいた。身をのけぞり、その衝撃で川へ落ちそうになった。何とか足をふんばる。あたしは慌てて、自分の手と髪と顔を確認した。いつものあたし。いつものまにか、肩で息をしていた。手に握っていた木の皮のコップは投げ出され、激しく舞い散った泥と水で、白い服は汚れていた。

それから、二、三度小川を見つめたが、何も起こらなかった。あたしは、何度も振り返りながらも、コップを持ってフキラの元へ戻った。

5・白雪姫にキス(1)

白雪姫にキス

「ハイネ、見ロ！直シタゾ」

「おうおう、よおつく頑張ったじゃなあい、雨漏りしなくなっただわ」
言って、頭上を指差す。ついさっきまでテンテンとしたたっていた雨が消えて、代わりに鋭い石の釘が刺さっていた。この家で一番背の高いあたしは、注意しなければならぬが、まあいいだろう。フキは器用だ。

「ごはん出来てるよ、食べましょ？」

「アア、魚好き、才腹スイタ」

フキは、ゴツゴツした石を体から取り外し、木の皮で作った外套を脱ぎ捨てた。

玄関には石と木の蜜で積み上げた水桶に、奇怪な魚がうねっている。あたしが川から捕ってきたものだ。

粘土質の泥と木の皮で、盛り上げた机には、大きな葉っぱに寝かされた魚の成れの果てと、べちょべちょしたお団子状のキオク。そして、青虫の絞り汁と、トンボの羽の揚げ物がならび、木の枝を削って作ったチヨップスティックが家主を待っていた。

「パパ、おかえりなさい」

小首を傾げて、夏男が愛らしく出迎える。ちいさな彼を抱えあげて、フキはあたしにキスをした。

「俺、イナイ時、ナツチャン、守ツテクレタ、アリガト、愛スル、奥サン」

「んふふ」

あたしが覚えさせた言葉だ。毎回毎回、律儀に忘れない。普段は

ただの朴念仁だが、こういうところは可愛くつてお得だ。言えばなんでもやるが、けて彼にいやらしい思いがあるわけではない。真剣に、素直に受け取ってしまうんだ。その辺の腑抜け男と一緒にされては困る。

フキラのこういうところ、本当に好き。それでも、あたしはアルシオンが忘れられない。

「アアア、ナツチャン、箸使ウ、手ツカミハ、ダメダ」

「え、あん、ごめんなさい」

「持ち方！」

フキラが夏男の小さな手を、軽くはたく。零れ落ちた焼き魚と、転がり続ける箸を拾い上げて、すぐるような目で、夏男はあたしを見る。あたしは、箸を持っているほうの手を上げてみせて、しかめっ面。

夏男は目に涙をためて、しゅしゅあたしの持ち方を真似し始める。見た目が六、七歳にまで育った夏男。おそらく、彼が生まれて一年ほどたつのだろう。あおじんの子供を思い出してみる。あたしとアルシオンとの間の子供なのだから、もう少し成長が遅くてもよいはずなのに、どうもおかしい。きじんは生まれない人種であるため、私達がどのように成人していくのかは誰も知らない。しかし、それにしてもこの速度は異常だ。

フキラもそのことに気づき始めている。

あおじん達と半生を生きてきた彼だから、夏男の異様な成長については何も言っては来なかった。それで普通だと思っていたのだろう。

しかしここ最近、黄色い肌のままの坊やの父親が、気になりだしてきたらしい。夏男は何じんなのか、そしてそのピースを当てはめるには、この育ち方がネックになる…そういったことを疑問に思い始めたようだ。

「ハイネ、水」

「あ、ええ、はいどうぞ？」

いけない。考え事に夢中になってた。木を彫って作った水瓶から、水を汲み取る。この水瓶は、少し前にフキラと夏男が共同で作ったものだ。夏男がほどこした、ヘタクソな彫刻。かあさま、パパとぼく、そしてとうさま。

フキラに、申し訳なくて、辛い。夏男は“とうさま”を絶対神のように崇めている。打ち明けなければならないと、責め立てる声。あたしは、罪悪感で、死んでしまいうそう。年老いて、あっけなく死んでいたアズの顔が、思い浮かぶ。

この鎮守ヶ森に入ったとき、あたしは冷酷にアズの腹を切り裂いた。それは、アズへの憎しみも、少なからずあったからだ。アルシオンを否定し続けていた、若かったアズに反感をもっていた。ホワイト・シィプドッグ事件のとき、側に居てくれなかったアズを、逆恨みしてた。それは、ルナに対しても同じ。

正直、こんなふうには他人と過ごす時間がくるなんて、思ってもみなかった。拒否していた。フキラがいて、夏男がいて、おだやかで平凡な時間。はじめは、戸惑うばかりだった。食べ物がキオクしかなかったんだもの。でも、魚も昆虫も木もあたしたちの味方をしてくれた。森からは抜けられないけど、フキラの超人的嗅覚が、色んな出会いをもたらしてくれた。滝の裏に、洞窟に、花畑。

探検をして、物を作って、食べて、寝る。薄暗い森の中で、親子三人ただ生き続けるだけの毎日。今もほら、目の前に大好きな男の子と、かわいい坊やが、あたしのつくった料理をほおぼってる。

「ドウシタ、食べナイノ？」

「かあさま？」

こうして、いつも気にかけてくれる。

「平気、雨、強くなってきたなって思ってたの」

「アア、ソウダナ」

綺麗な瞳をしばたいて、フキラは天井を見上げる。あたしが散髪してあげている髪の毛は、いつも通り艶やかな銀。太陽の昇らないこの国では、瞳や髪の色素が薄い人が多い。

きよろきよろと、絶え間なく視線をめぐらせる夏男。家鳴りが怖いのだろう。この家も、フキラとあたしの手作りだから、いつ崩れるかわからない。

あたしのこの幸せも、いつ崩落するんだろう。

これだけおだやかな日々、その上脱出不可能な鎮守ヶ森の中だ。この後どうこうなってしまうとは、考えられないのだが、でもやっぱり、いつかは終わってしまうのではないかと、不安に思わない日はない。砂で作った城のように、ツギハギだらけの家族ごっこは、波や風にさらわれてしまう。いつかは、絶対崩れ去る。でも、崩れる一歩手前まで、しがみ付き続けるしかないのも事実。あたしはとも恐れている。

たぶんそれは、アルシオンのことをフキラに告げていない、うしろめたさからも来ているんだろう。筋が通っていない。自分でも、そう思う。

告げるべきだし、フキラには知る権利がある。

わかってている。わかってるんだ。

あたしは、箸を握り締め、俯く。二人は食事を済ませ、後片付けを終えたところだ。この家では、自分の後始末は自分でやる決まりだ。あたしも立ち上がり、片づけをはじめ。胸がときどきする。のどが渴く。

秘密にし続けるのは、とても辛い。

それでも、彼に告げないのが、あたしなりの彼への愛情。

俯くあたしを、夏男と遊ぶフリをしながら、無骨で細いフキラの悲しみが、静かに頭をもたげていた。

「……スルト、才姫様、サラッタ、三匹ノ犬、帽子屋ノトコロニ、帰ッテキタ、才姫様目覚メルト、帽子屋イタ、ビックリシテ……」
フキラお得意の御伽噺。彼を支配していたあおじんの女が、子供

のときに沢山教えてくれたのだという。これを聞くと、夏男はすぐに寝息を立てるのだ。今日は、ずいぶん早めに話し出した。いつもは食後しばらく、プロレスごっこをしてからなのに。

夏男は話の中盤に、すでに夢の中だ。フキラの膝にべっとりしなだれて、間抜けな顔をして寝入っている。

あたしは、先程までの葛藤を忘れて、彼の愛らしい寝顔に見入っていた。

「今日はずいぶん早くに寝かしたね？」

「……」

「…何、どうしたのフキラ？怖い顔して」

フキラが、あたしを見上げる。こげ茶色の肌と銀髪。のぞく双眸が、暗い光を帯びているように感じられた。彼は、そっと夏男を寝室に運び、帰ってきたかと思うといきなり、あたしに迫ってきた。

「誰ダ！誰ダ！」

だれだ？だれだ？だれだ？何、何、いやだ、怖い！

「逃ゲルナ！ハイネ、ナツチャン、誰ノ子供！」

あたしの肩を強く引き寄せて、低いうなり声を上げる。あたしの胸くらいしかない、背の低い少年だが、力はおじんの男と変わらない。あたしは、壁に押し付けられた。

彼は本気で怒っている。今までも、きつとずっと憤っていた。

あたしは、力が抜けて膝を折る。フキラよりも頭の位置が低くなる。

「ドウデモイイ思ツタ、デモ、オカシイ、アノ子、何者、納得デキナイ、誰ニ生マサレタ？誰トノ子供？」

「い、い、言えないよ」

「言エナイ？何故、俺ハ怒ラナイ、デモ、秘密サレルハ嫌」

フキラは顔を近づける。動物のような眼光に、あたしは怯む。壁を背にし、逃げ場のないあたしに、じりじりとにじり寄るフキラ。

「ど、ど、どうして、今更、そ、そんなこと聞くのよ！か、かっ関係ない」

「関係？俺達ハ関係シテル」

とたん、顔面が熱くなる。真剣なまなざし、その深い部分に、あたしが映っている。うろたえている、もうすでに、負けを認めたあたしの姿が。其の通りだ。フキラが知らないでいて良い道理など、どこにも見当たらない。それはわかっていたことだ。覚悟してきたことだ。むしろ今、彼がこうして問い詰めてくれているのだ。打ち明ける絶好の機会じゃないのだろうか。潮時だ。引き時だ。つまりないプライドは捨てて、吐いてしまえ。

あたしの口からアルシオンの名が出て、この家族ごつこを揺るがす程のことではない。フキラはきつと許すだろう。あたしも、心が軽くなる。

筋は通る。でもそれは、逃げではないのか。

「好キダ、俺」

「え？」

「二人ノコト好キダ、ダカラ、秘密サレルハ嫌、ナツチャンノ体モ心配、パパダカラ」

フキラは、自分がパパだから、しっかりしたいと思ってるんだ。それは十分わかっていて。彼には、どうしてあたしが今まで、自分から打ち明けなかったのか、理解できないのだ。あたしが言い出すのを、ずっと待っていてくれたんだろう。

あたしだって、フキラを愛してる。だからこそ、伝えられなかった。自分の保身とかじゃない。本当に、フキラのことを思いやっていたんだもの。

彼に理解できないこの愛を投げ出して、アルシオンと一言言ええすれば、フキラは落ち着き、あたしの不安も少しは解消される。

「……ごめん、今まで黙ってた」

あたしは、覚悟を決めた。彼が傷つきはしないかと恐れながら、とうとうあたしは言ってしまった。

「アルシオン……」

言った直後に後悔。フキラはひどく混乱した。そして、その動揺

をあたしに悟らせまいと、必死に押さえ込む。薄笑いを浮かべて、何度もうなずく。

どうして、怒鳴りつけてくれないの。そうでもされたほうが、全然良いのに。

弱いもの虐めをしているような気分だった。可哀想で、自分がムカついて、しかたなかった。フキラを、守りきれなかった自分に腹が立った。

どうして、秘密を打ち明けてしまったんだろう……。いや、でも、フキラが言えって言ったんだもん。あたしは悪くない。あたしは、守ってあげようとしたんだ。彼自身がそのことを分かってくれなかっただけじゃない。

だめ、責任転嫁。

「ソウ、ソウカ」

辛うじて、そううなずくと、強くつかんでいた手を離し寢床へ引き上げていった。ふらふらと焦燥露に。何かを考え込んでいるようにも見える。

やっぱり、ショックだったんじゃない。反きじん派砂族のフキラの嫁は、きじんの中でも最強の魔法使いアルシオンの子供を連れていきますって。世紀末のジヨオクみたい。

「フ、フキラア！」

「？」

「待つて、よ……！あたし、あたし、別にアルシオンとは……過去のことだし、今はもう何とも思ってないの」

嘘だ。

「今は、あなたが好きだよ」

「……」

「本当よ、信じて、そのことを疑われるのが一番嫌なの、心が半分に分けられるみたいで、すごく痛い、今まで黙ってたのは、信じてもらえなくなると思ったから、けしてあなたを侮ったわけじゃないの、そんな悲しい顔しないで？」

必死な抗弁。フキラに対して恋愛感情はないのに。あたし、また嘘ついでる。

「不誠実だったと思う、すげえ反省してる、つか猛省？うん、まあ、だから…」

深い静寂の、フキラの瞳を、じっと見つめてあたしは体が、宙に浮くような錯覚を覚えた。皮膚がじわじわ疼く。

「嫌わないで」

打ちのめされたようなフキラの顔、急速に熱が下がってゆくあたしの体。ふたりはこの狭いプレハブで、違う世界に立ち尽くしてる。あたしは、自分に言い聞かせた。彼に従おう、と。“嫌わないで”それは、自分に対してのメッセエジ。

「俺ハ、ソナコトヲ言ワレル、ナイ、俺ハ、君ガ俺ヲ、嫌ウ心配バカリデ、ハイネ、不安サセタノカ…？スマナイ、君モ信ジロ、俺ヲ」

フキラは、懸命に言葉を搾り出して、あたしに優しく対応する。もう頭には、アルシオンのことなどない様だ。男って単純。

「わかった、信じる」

あたしは肯く。右脳と左脳が、それぞれ別々のことを考えていた。曰く、これで信用挽回、見捨てられる心配もなくなったぜわあい。曰く、あたしはこの先、ずっと本心を隠して生きていかなきゃなんないんだ…。

誠実さを取り戻し、何か別のものを喪失したようだ。あたしは、これ以上悩むことはやめようと、心に決めた。この先死ぬまで、森を抜け出すことはかなわない。幸い、夏男もフキラも上手くいっている。あたしは、彼らに従って生きていけばいい。魚を捕らえ、料理をし、微笑んでいればいい。

「ハイネ」

「？」

顔を上げると、すぐそばにフキラの顔。座り込んだあたしを、覗き込むようにして見ているのだ。話は終わったと思っていたあたし

は、少し驚いた。

緊張した面持ちで、少年が告げる。

「目ヲ、閉ジテクレナイカ？」

「は？」

怪訝に思う。だが、その雰囲気から、すぐさま、フキラがキスしたいのだと思い当たった。忘れかけていた、アノ感じ。今まで“ナツチャンノパパ”というだけだったフキラは、あたしと手を繋ぐこともなかった。ろくな挨拶もしないまま、獣のように襲い掛かるアルシオンとは全く違っていた。一緒に寝ようが、風呂に入っようが、フキラが欲情することはなかった。全くの無関心だったのだ。

其の彼が、精一杯の勇気を出して、あたしにキスしようとしてる。察しはついたけど、でもなんか変な感じ。あたしは、彼に従うと、決意したばかりだったのを思い出し、そつと瞳を閉じた。

フキラは、両手の平で優しくあたしの頬を包み込み、肌と肌が触れ合っただけのような、つまらないキスをした。ちゃんと、触っただけみたい。

心臓の高鳴りが一気に引いていく。

あたしは、子供みたいな口付けしかできないこの男と、一生を過ごさなければならぬのか。なんてこと。嫌だ。アルシオンの、罪の果実の一口の様な、濃厚なキスがしたい。

体の奥深くまで、蜜を垂らす様なあの口付けを。

だが、フキラを落ち込ませるわけにはいかない。あたしは、微笑む。一方の彼は、恍惚としていた。普段、あまり表情がない分、不思議だった。

あたしは、彼の背に手を回し、抱きしめ、ささやく。

「もう、寝る時間みたい」

「アア」

其の時、あたしは気づかなかった。あたし達を嫉妬深い目で睨む、ちいさな影に。サファイアの瞳が、ぬらぬらと炎に包まれてゆく、そのちいさな坊やに。

5・白雪姫にキス(2)

あたしとフキラは、いつものように寝て、いつものように起きた。夏男を起こして、いつものように朝食を食べ、同じ日々が繰り返された。

いつものようじゃなかったのは、夏男の心中だけだった。

ぼくのかあさまは、とうさまのものなのに…ひきさいてやる、と。

おかしいことが、立て続けにおきた。川に棲んでいた魚たちが、姿を見せなくなり、自然発火が頻繁に起こった。それだけではない、あれだけ野生的だったフキラが病気にかったのだ。始めは湿疹が手足に出てくる程度だったが、半身が傷むといって、何日も寝たきりになった。解毒効果のある土や、草を試しても一向に快方しなかった。

フキラ自身が言うには、義足の交換時期をとくに過ぎてしまっているから、もしかしたら健康な肉体自体を腐食し始めているのかもしれない、らしい。何かの伝染病のようにも感じたが、不明だ。彼が不安がるので、義足と固定器具ははずしてしまい毎日殺菌している。赤錆があるだけで、とくに彼の体を蝕むようなものは見当たらない。

「ナツチャン、ナツチャン…?」

「はあい?」

幼く愛らしい夏男は、お絵かきに夢中で寝たきりのフキラに見向きもしない。

フキラは寂しいらしく、ふんと鼻を鳴らしあたしに当たる。

「オイ、メシハ?」

「キオクしかないわよ、それでもいいなら支度しましょうか?」

「魚タベサセロ」

「言つたじゃない、ここんこマジでいないんだよ？」

彼は唸る。仕方ない。ないものはない。

あたしは、わがままな亭主に構わず針作業を続ける。フキラと夏男にお揃いのシャツを作つてやるのだ。雑草の筋を干した糸を、粘とした樹液で煮立てて、更に干した、手作りの布だ。木の皮よりも通気性がよくて、心地よいのだ。

「うふふ」

自然に、鼻歌がもれていた。

おかしいことばかり起こるのは、今に始まったことではない。ここに暮らし始めたときも、其の前も、ずっとおかしいままだった。

ホワイト・シィブドッグ事件の後、あたしはそれまでなかった過去の記憶にひとつの確信的仮説を立てた。アルシオンのいうように、あたしは元元この世界の住人であったのだ。突然現れたという、時期王ではなかったのだ。そもそも幼年時代のないきじんは、コレが過去だと、言える思い出を持ち合わせやしない。あたしが異常なのは夏男を産み落としたことだけだ。

あたしは、錯乱を捨てて安らぎを得た。

「うふふ」

「？かあさま、うれしいの？なにうれしいの？」

顔を上げて、夏男が首をかしげる。透けるような美肌、漆黒の髪に青い瞳。唇はマンダリンオレンジ。おさなごころの君も真つ青なこの美しさ。ああ、なんて愛らしいの。あたしだけの、可愛い坊や。日々お父様の面影を追ってゆく姿見に、あたしは震え立つような興奮を覚える。あたしに全体重を預けて、寄り添う坊や。

「ねえ、なにうたつてるの？うふふ、うふふふ？」

真似て、リズムをとる。首をふり懸命にあたしの真似をする夏男。あたしは、どうしようかと迷いながらもなんとなく口ずさんだ。

「んふふう　ふふふ　ふふふ、　んふふ　ふふ　ふふふう　ららら、　らんら……」

僕を待っている　あの人の町に　足を運ぶ
少年だった頃とは　変わってしまった　僕を　ゆるして
なつかしい　やさしい　ハナミズキの校舎
いつだって　戻れたのに

まだ　待っていてくれるだろうか
少年がいた　町

……ら、らら」

夏男は、眉根を寄せて一生懸命にリズムをとる。ワンフリーズの短い歌だが、歌詞に苦戦している。それに、音も良くない。

あたしは、歌が上手いほうだから、もしかしたらアルシオンは音痴なのかな？

それにしても、と思った。それにしても、何の歌だったろう…？いや、恐らく何の変哲もない普通の歌だったのだ。ただ、ある瞬間より以前の記憶が途欠しているあたしが、思い出せたのが不思議なだけだ。

「キイスノ歌二、ニテイル」

その疑問を、素直にフキラに告白すると、そういう答えが返ってきた。あのあと、夏男にせがまれるままに、なんとなく思い浮かんだ曲をいくつか歌ったのだが、どれもが、ああ、あつたねそんな歌程度で概念に付着するほど強いイメージがあつたわけではない。

「きいすう？何よ、それ」

半身を、木の皮のベッドに起こし、よく煮たキオクを口に運びながら、フキラはもごもと言った。夏男はあたしの膝でキャッキヤと戯れている。

「儀式ノ時ノ歌、普通ノ歌八庶民ノ楽シミ、ハイネノハキイス、儀式ニ似テル」

「ほう、ふん、マジで？」

庶民の歌というのは“るなざ”の披露するような、起伏が激しくたたみかけるような歌で、頭が痛くなるようなやつのことだろう。

「マジデ、単調デヤサシイ、キジントクロジンハ知ッテル、ダカラ、知ッテル、違ウカナ？俺、キジンノコト勉強シタ、ダカラタブン」

「うん、そうかもねえ」

生返事。聞きたかったのはそうじゃない。とはいっても、フキラに分かるはずはないもの。初めから期待なんかしてませんよ。

「きじんって、ことあるごとに儀式しそうだね」

なんの気なしに言ってみた。

「イヤ、儀式スル特別」

「へえ意外、木の実食べる？ツラで炒ってみただけど、けっこウケルよ？」

「ウン、食ウ、……ウマイ」

「でしょでしょ？あ、で？なんの時に儀式すんの？」

「生マレ変ワル時」

「は？」

全部あたしの想像だけど、あたしはきつと、どんな子供でも愛してしまう。どんな不完全な子供でも。手が無くても、足が無くても、目も耳も利かなくても。頭が悪くても、犯罪者になっただって、自分の子供であつたら守ってあげる。

でも、妹は？

妹は守ってあげられない。あたしは、親じゃない。みんながみんな、自分を愛してくれているなんて、思い込まないことだ。あたしは姉だから、あんたを愛してはいなかったんだ。だから、守ってあげられない。だいたい、妹でもなきや、誰があんたなんか…。

あんたなんか、生まれてこなきや良かった。

「……そんなこと、ゆっっちゃダメなんだよお？」

ああ、ふうん、そう。何泣いてるの？そうやってさ、またさ、お母さんにあたしのこと悪く言っただろ？ずるいよね、弱虫。

「うっ、うわぁん」

うわぁん、うわぁん、うわぁん……

泣いたら何でもいいって思ってるの？ばかじゃねえ？

「ちっ、ち、ちがつっ」

ひっく、ひっく、ひっく……

あああ、嫌になるなあ。お話にならねえっての。

「ご、ごめんなさい」

誤ってすむならケーサツはいらないんだぞっ？ベイベー泣くだけなら、あたしもう出て行くからね？あんたの部屋、辛気臭いもん。

「まって、まってよ、謝るからあ、怒らないでよう」

気持ち悪いんだよ、てめえは。だから友達出来ないんでしょ？納得できんよね、やつぱりってかんじ。性格悪い顔してるから、気持ち悪いから。あんたは。

「うっ、うっ、う、うちだってえ、こんな顔に生まれてきたくて生まれたんじゃないもん、気持ち悪いなんて、そんな酷いこといわんといてえよお、許してよお」

絶対許さない！そおねえ、あんたみたいな恥な妹、持ってるなんて最低だから、あんたが消えたら許してあげてもいい。

「ああああい！ムカツクッ」
ぱんっ

いったい！何すんのよ、嫌われ者！

がんっ

ごっ ばちゃあっ

「ヒィアアア！熱い、熱い、熱い」

ばっか、あ、あんたが悪いのよ？早く冷やしておいで。ほら、早く！

「い、いたいよ、熱いよ」

あたりまえでしょ？本当に、ドンくさいんだから、大丈夫かよ？

「あたし、あたし、死ねばいいの？」

其のほうが、幸せ。

「そう、死ねばいいのね」

だからって、生まれてこなきゃ良かったとは思ってたけど、死ねばいいなんて一回も思ってたことなかったのに！

死ねば、幸せ。

なかったのに！

「じゃあ死んでやるよつ、遺書書くからねえ？あんたのせいで自殺しますって書くからな、呪ってやるわあ、春野！」

春野？犬童春野…？春生まれの女の子だから、乃よりも野のほうが色を感じさせると思っのよ。華やかで、誰からも愛される女の子になるように。

「かわいそうな、アサヒ…神様の下に、いけたかな？ごめんね、アサヒ」

朝日？犬童朝日…？死んじゃったお祖母ちゃんの朝子の朝と、明弘の明のお日様の部分、ちょうど早朝生まれだしね。少しでも、僕ら家族に近づけるように。明るくて、清楚な女の子になるように。

「は、る、の…？あ、さ、ひ…？」

あたしは、涙で顔をべたべたにして飛び起きた。これは、忘れていた記憶の断片だ。

そのなかで、あたしは“ハルノ”と呼ばれていた。頭痛がする、気持ちが悪い。夏男を身籠っていたときに度度感じた不快感に近い。あたしは、青白い自分の両手を凝視した。キラキラと、魔法の輝き。おかしい、寝ている間に魔法を使っていたということか。だとしたら、今見た記憶の断片は魔法によって引き出されたのか。いや、あたしの魔法じゃない。あたしは、斜め後ろで、あたしの記憶をまさぐっていた人影に気づき、硬直する。

「何をしてるの？ なっちゃん」

「……」

出来上がったばかりのシャツを羽織った、小さな坊やが両手を下ろす。彼の腕とお腹から出ていた、赤紫色の光りが縮む。あたしの体に入り込んでいた、魔法の光りがずるりと抜け、夏男に返る。

「かあさまに、何をしていたの？ 答えなさい」

怒りで、顔が真っ赤になってゆく。以前、あたしがドロという魔法使いにやられたのと同じことを、彼があたしにしていたのだ。あたしの白い魔法が疼いているのは、夏男の魔法を跳ね返そうと抵抗したからだろう。

「なっちゃんは、とうさまをみたかったの」

抑揚のない声で彼は言う。

その理由が本当であろうと、なかろうと……。なんて、すごい魔力だろう。相手の深層心理にもぐりこみ、記憶を引っ張り出す魔法なんてドロ以外に使える奴はいなかったのに。あの、アルシオンでさえ使えないのだろう。でなければ、出会った当初にあたしの記憶は甦ったはず。

あたしは戦慄した。

「いまのひとたち、ひとりしかあさまでしょう？ ながいかみの、おめめのおおきなほうは、だあれ？」

愛らしい顔に、翳りが見える。一連の物語が、あまりにも悪意の突出したものだったのに、記憶を引き出した張本人が怯えている。あたし自身も混乱している。こんな過去があつたとは思えない。もしも、あたしが元元この世界にいるのだとしたら、名付けのサインなんてあるわけないんだ。

「誰だろう？ かあさん、覚えてないんだ」

「そうなの？」

「そうなんだよ、なっちゃん、もうしちゃ嫌よ？」

「でもね、あのね、なっちゃんはどうさまをみてみたいの」
「もじもじする夏男を、抱きしめる。まだミルクくさい。あたしの

すぐ横にはフキラが鼾をかいて眠っている。ぐっすりと。

フキラは、毎日死んでいるのではないかと思うほど眠りが深い。ちよつとやそつと、騒ぎ立てるくらい、問題ないだろう。義足をはずされた右足が、痛々しい切り口を覗かせている。…馬鹿な男。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6588c/>

ブラック・シープ

2010年10月17日12時16分発行